好子曰ろ風

233

憂迄力教学を務へし

文學博士　澤柳政太郎序

文學博士　田丸卓郎序

福永恭助著

國語國字問題

東京　聚英閣

諸家の序

（A^ア B^ベ C^セ D^デ 順）

序

我が國には多くの解決を要する問題があります。その中で最も大切な、最も急を要する、そして廣く且大きな影響を與ふる問題は國語國字のそれである。その適當な解決は如何なる政治上の改善よりも、どんな經濟上の發展よりも、又あらゆる他の施設よりも、國家の隆昌と民衆の幸福とになると思ふ。しかるに不思議にも此の重要な問題は最も閑却されて居る。遺憾の極みでありませす。こゝに於て此の問題の重大なることや、その解決の那邊にあるかを叫んで國民の注意を喚起する先覺者の奮發努力が甚だ望ましい次第であります。

福永君は疾くに國語國字問題の解決が我が國の將來にとりて極めて緊要なることを認められて、深く考究を積まれ、これまで屢々其の意見を發表せられた。私は我が國に福永君の如き先覺の士のあることは、多くの大政治家や、多くの大實業家や又多くの大軍人を有することよりも、より多く意を強くするに足ると考へてゐました。

本書は君の冷靜な考察の結果であると同時に、君の熱烈なる憂國の至情の發露である。私は我

が同胞が本書を精讀せられんことを希望して已まないものであります。

大正十五年二月

澤柳政太郎

はしがき

福永君は吾々ローマ字論者の中でも最有力な宣傳家であり實行家であると同時に最有力な研究家である。

ローマ字問題の大事なことは澤柳博士のはしがきにもある通りで、それの詳しい理窟は本書を御覽になれば遺憾なく分る。

その大事なローマ字の仲間にはいろ〳〵な人がある。ローマ字の大切なことを知り且つ口で又は筆でそれを宣傳するといふ方法で主として活動する人即ち「宣傳家」がある。又反對に專ら自分だけで盛にそれを使ふといふ側の人即ち「實行家」もある。別に又眞面目（まじめ）な態度でローマ字書きの文章に關係する事柄を研究する仲間即ち「研究家」がある。これ等の人々はいづれもローマ字運動にとつて大切な人達であるが、中で研究はそれによつてこの大事な事業が後に悔を遺さないやうな方向に安全に進むことが出來るものであるから最も大切な仕事であり、研究家は吾々に取つて特に大事な仲間である。そして本書の著者福永君は一人で上に述べた三通りの役者を兼ね

て居る人である。

福永君が此書に纏められたことは、主として最近宣傳方面で同君がした仕事であるが、それがどんな意味のものであるか、それがどんなにうまく述べてあるか等のことは、本書を讀めばわかることであるから、私は別に吹聽しない。私は只、同君がたゞの宣傳家でなくて同時に實行家であるから、此書で同君の述べて居られることは空な理窟ではなくて、皆實行の上から差支のないことであるに相違ないことを讀者に申上げたい。それとも一つ、福永君の研究家であるといふ點については、同君が現在國字問題中の大事な題目なる「ことば直し」の問題を吾々の機關雜誌「ローマ字世界」に毎號つゞけて出して居られる點でローマ字仲間ばかりでなく、國字問題研究者全體から注意と賞讃とを向けられて居る人であることを讀者諸君に御吹聽いたしたい。

このやうに凡ての點から見て有名なローマ字論者の書いた此書物は必ず世間から多大の注意を以て迎へられるに相違ないと思ふところから、私は最も大きなる悦を以て本書の出ることを待設けて居るものである。

大正十五月二月

田丸卓郎

MAEGAKI.

"Mêtoruhô wa ituno koto ka" to iwareta ga mohaya Hôritu to natte zikkôsareru. Kore to onazi yôni Kuni no Mozi mo Sekai ippanni tûyôsuru Rômazi ni naru koto mo tôku wa arumai.

Sore ni tuketemo sono Kakikata wo sikkarisita Dodai no Ue ni kimeru koto wa mottomo daizina Sigoto de aru. Kono taisetuna Zisetu ni, Hukunaga San no yôna nessinna Kata no tadasii Ronsetu no arawareta koto wa makotoni yorokobasii.

Kokoni tutusinde

Meidi Tennô no On'uta wo tatematurite kore wo kotohogu.

"Ametuti wo ugokasu bakari
Kotonoha no
makotono Miti wo
kiwametesi gana!"

Rigakuhakusi *Tanakadate-Aikitu.*

自序

◇

我國では、めくらが四年で了へて居る國民教育の課程をめあきが六ヶ年を費して居るといふ有樣である。大袈裟な物言ひが許されるならば、この國では小供が生れ落ちたならば、讀み書きを習はぬ内に早く眼玉(めだま)を潰して置く方が得策だといふことになる。

併し、何としてもめくらではやり切れない。然らば眼(まなこ)を潰すことなしにめくらと同じ御利益(ごりやく)にあづかるのにはどうしたらよいか。それが第一に此書の說く所である。

◇

人類の生活といふものが衣食住以上のものであり、尙その外に知識の生活、思想の生活といふやうなものがあることを思ふとき、言葉と文字が極めて重要な役割を演じて居るのに、言葉と文

字をとほしての生活は我國で尙未だ著しい非文化的の狀態の儘に取殘されてある。大戰後この國を風靡した「文化生活」や「生活改善」の叫びが此方面の生活に言ひ及んで居らぬのは物足りない。さういふ意味に於てこの書き物はまた國民の文化生活をも說いて居るものである。

◇

國語が將に亡びつゝある。外國語とさうして漢語の濫用の爲めに。國粹保存を振りかざす賣藥商有田某すら外國語の屋號を附けて殊の外それを珍重する世の中ではある。國語の尊ぶべきことを忘れて何の國粹保存か。此書は第三に、國字改良に依る國語の擁護とその發展に迄說き及ぼしてある。

◇

議論の根本は恩師田中館、田丸兩博士に負ふ處が少くなく、中には兩博士の所說其儘を借用した處さへもある。又所論の多くが國語整理と國字改良の宣傳文として發表されたものである關係上、

同じことを何遍も繰り返して居る節があるかも知れない。豫め讀者の寛恕を乞ふ次第である。

最後に、本書の爲めに花を添えて下さつた澤柳、田丸、田中舘、土岐、吉野の諸先生に對して厚く御禮の言葉を申し上げる。

大正十五年二月

著者しるす

目次

國語國字問題に關する一考察

——國語整理と漢字制限の可能性——

一　目覺めつゝある國民

近頃新聞や雜誌に國語と國字との問題に關する議論や記事を見受ける事が、大戰前に較べてメツキリ殖えて來た樣に思はれる。これは云ふ迄も無く、世界大戰爭に依つて五大國の一となつた我國の各人（めいめい）の頭に世界の日本であると謂ふ考が知らず知らずの間に植ゑ付けられた爲め、何かにつけて物事を歐米諸國に比較して見る事が行はれ、又一方國力の充實と謂ふ事が眞面目（まじめ）に研究される樣になり、其結果、我國が國字と國語の方面で外國に較べて實に容易ならぬ損をして居ると謂ふ事に氣が付いて來たからに違ひない。

實（じつ）に漢字は惡魔の文字である。千何百年の間、日本人と云ふ日本人が、直接間接漢字の爲めに

多大の精力を消耗して居つた事を想へば――漢字が日本の文化に與へた効能を全然無視する譯では無いが――誠に無念の至りである。併し遅蒔乍ら今日國民がそれに氣が付き始めたのは日本にとつてどんなに幸福な事か解らない。日本の國民が文字と言葉の問題に目を醒まして立派にそれを解決した時に、國運は更に一段の隆盛を來し、文化の光は世界に輝くに至るであらう。此意味に於いて此問題に對する世論は昨今最も健全なる方向を採りつゝある。

政府は又最近臨時國語調査會の官制を發布して、森林太郎博士を會長とし、朝野の學者名士三十五名から成る處の調査機關を設けて此問題を取調べると謂ふ。誠に結構な催しであつて、國民が多年齊しく望んで居つたものが實現された譯である。願はくば委員となられた方々は、舊き慣習に囚れず又空想に趨らず、よく國民の實行し得る案を作られて國民を文字と言葉との苦惱から救つて戴き度い。

調査會の仕事はそれの官制第一條に示された處に依れば『普通に使用する國語に關する事項を調査する』のであるが、文部當局の談に據れば、その調査事項は次の三種に岐れて居ると謂ふ。

（イ） 字音及假名遣の整理統一

（ロ） 漢字制限の範圍
（ハ） 口語體に關する調査

此の三種の内で第一の字音及假名遣の事に就いては今暫く論じ無い。たゞ、（ロ）項の漢字制限問題と、（ハ）項の口語體に關する調査（即廣義の國語整理）の二大事業に就き私の見る處を述べて一部の委員及多くの讀者諸君の參考に供し度いと思ふ。

二 漢字制限論

今日兒童が尋常小學校六年間に習ふ漢字の數は實に二千六百餘字（日本式ローマ字は僅か十九字である）に及んで居て之を覺える兒童の苦心の並大抵で無い事は世に兒を持つ親の誰しも經驗された處であらう。それが只の二千六百字であつても驚くのに、更に驚く可き事は、漢字と謂ふものには一字一字に就き音だとか訓だとか謂つて幾通りも讀み方があるのだから堪ら無い。例へば「行」なら「行」と謂ふ一字だけに就いて幾通りの讀み方があるか。

音（おん）としては「旅行（りよかう）」、「行者（ぎやうじや）」、「行燈（あんどん）」の三色（いろ）、又訓としては「行（ゆ）く」、「行（おこな）ふ」、「船を行（や）る」な

ど と云ふ讀方がある外に、人の名前などになると「楠正行（まさつら）」だとか「木幡行（こはたつとし）」（海軍大尉にある）と讀んで見たり、又土地の名前では、相模の藤澤と厚木との中間に「行谷（なめがや）」（同じ讀み方は上總海岸の「濱行川（はまなめがは）」と謂ふ村）と云ふ所があり、更に夫婦喧嘩の後に出るのに「三行半（くだりはん）」などと云ふのがあつて凡そ十種にも及んで居る。尤も之は著しい例であるが、平均一字に就いて三通りや四。通りの讀方があるのは事實であるから、今私は、兒童は二千六百字の漢字を覺えねばならぬと云ふたけれども、實はそれの三倍にも四倍にも相當する事になつて仕舞ふではないか。

私は今此處で長たらしく漢字の弊害や缺點を數へ擧げて居る暇が無いから此話はこれで打切りとするが、兎に角兒童は之が爲めに小學時代の可成（かなり）の部分を單に文字を覺えると云ふ事に費して仕舞つて、正味のある學問をする暇に乏しい結果、例へば獨逸の兒童が六の知識を得る間に我國の兒童は一の知識しか得られない（讀本の內容に就いて保科孝一氏の調査に據る。保科氏は今回國語調査會の委員兼幹事を務められる方である）と謂ふ哀れな有樣である。これでは日本の國力を發展させることも五大國としての歩調（あしなみ）を揃へる事も到底覺束無い。又此の樣な有樣では世間の人が小學校を目して文字を教へる所であると考へたり、教育とは詰り讀み書きの事に外なら無い

と考へる人が起るのも無理の無い話である。

ローマ字國字論や假名論は色々の細かい理窟もあるが、要するに右に述べた教育上の弊害を根本的に救濟しようと云ふのが主眼であつて、之等は孰れも漢字の樣な形象文字と違つて日本人が口で言ひ耳で聞く通りの音(おん)を寫す處の音文字(おんもんじ)であるから、漢字の場合の樣に教育上不都合な事が絶對的に無い。

併し世の中には急劇な變化を好ま無い保守穩健な人も少く無い。假令ローマ字や假名が理論上良くても今直ぐにそれに取り換へる事は不可能な事でもあるから、先づ差し當りの問題として日常に使ふ漢字の數を減らして其弊害を緩和しようと謂ふ妥協說も成り立つ理(わけ)である。これ即謂ふ所の漢字制限論であつて仲々賢い想ひ著きである。國語調査會も亦これをやらうと謂ふのらしい。だが併し全體漢字制限などと云ふ事が實際に行はれ得るであらうか？

今假りに、二千六百字の漢字を教へる事は國民教育上宜しく無いと云つて、それを五百字なら五百字に制限したと考へて御覽なさい。そして使用を許された五百字の中には「猫(ねこ)」と云ふ字があつて「狐(きつね)」と云ふ字は使用禁止の部類に屬して居つたとしたならば、「猫」は此の樣に漢字で書

く事を許すが、「狐」は假名で「きつね」と書かねばならぬと云ふ樣な事が實際に守られ得るであらうか？　政府が鐵血政策でも採つて漢字制限に背く者を嚴罰に處すると謂ふ樣な手段も勿論考へられないでも無いが、其の樣な秦の始皇帝式の遣り方は今日此問題に應用される可き性質のものでは無い。さうかと云つて成る可く式にして置くと、「猫」を漢字で書いて「狐」を假名で書くと云ふ事は後者が文章の中で名詞らしい纒つた感じが起ら無いから――漢字書きの「猫」に比較して――そんな事が實行されるとは思はれ無い。それならと云うて「狐」も漢字で書く事を許すと、今度は「狼」の樣な奴が『俺はどうして呉れる？』などと言ひ出して、遂に五百字の制限が五〇一字に殖え五百〇二字となり、從つて「猿」も「猪」も「猫」も「杓子」も各々獸種平等を叫び出して結局元の二千六百字に逆戻りが落ちではあるまいか！

　加ふるに近頃我國の傾向は、他方に於ては寧ろ漢字制限と背馳しつゝあるかの如き觀がある。「人力車」を縮めて「俥」と書き、「船首」、「船尾」、「右舷」、「左舷」の代りに「艏」、「艉」、「舟右」「舟左」と云ふ樣な活字まで造られ、殊に東都の某新聞紙の如きは懸賞で「自轉車」や「自働車」に代る可き新漢字（？）の考案を奬勵して居る程の有樣である。誠に以て怪しからぬ話ではあるが、

「ヒト」よりも「人」の方が便利であるから「人」と謂ふ文字を生む處の漢字の仕組みが元來それなのであるから、其の漢字を捨てて仕舞はない限りこれは避ける事の出來無い現象である。又人智の進歩發達に從ひ思想も複雜になり、道具も機械も殖ゑる一方であるから、それを言ひ表はす處の新らしい言葉の產れるのも自然な事であり、從つて其言葉を寫す處の新らしい漢字(?)の考案が續々出來るのは形象文字國の附き物であると云うて宜しい。

更に此問題を逆の方面から觀察して見るのに、「狐」を假名で「きつね」と書き得るものならば、「猫」も亦假名で「ねこ」と書き得る筈であるから、五百字の制限は尙切り縮めて四百九十九字にする事も出來やうし、又「犬」も「いぬ」と書き得る理窟だからと云つて四百九十八字に減らす事も出來る。斯くて此議論を推しつめて行くと結局假名國字論に迄漕ぎ付けなければ論理徹底しない。

右は漢字制限論の不合理なことの根本の理窟を判り易く說き明かしたものであるが、さりとて勿論漢字がいくらでも無限に必要だと云ふ理(わけ)でも無し、今日でも其數は或程度に折り合つて居るから其狀態を指して漢字制限だと云うて云はれぬ事は無い。例へば康熙字典には五萬七千二百十

六も漢字があると云ふのに、現今我國の新聞雜誌に使はれて居る漢字數が大體六千字を超えない處に落ち着いて居るのを見ても明かである。

併し其六千字をもつて制限された狀態だと云ふ事は制限には毛頭相違無いが、吾々の所謂漢字制限とは丸で意味が違つて、其樣な澤山の數では敎育上から見た漢字の弊を救濟する處の騷ぎでは無い。

勿論今の新聞雜誌が使つて居ると云ふ五六千の漢字に少しも整理制限の餘地が無いと云ふのでは無い。「則」、「乃」、「輙」、「卽」等もどれか一字だけに定めて仕舞ひ、又「聽く」、「聞く」も、「聞く」だけにするとか、或は私が此の書き物で度々使つて居る「據る」と「依る」も一方に定める（尤も「依る」を採る事にして「據る」を字引から除いて仕舞ふと「根據地」、「據點」などと云ふ言葉を書く時に困ると謂うて軍隊の方から苦情が起らうし、さればとて「據る」だけにすると「依田」だとか「野依」などと謂ふ人から文句が出る計りで無く「依賴狀」などと云ふ言葉を書くのにも不都合だなどといふ事になつて、實際問題としては此處で述べる樣に事は手輕に運びさうにもないが、それは先づ大目に見て置く）とか「謂」、「云」、「言」も一つにする（これも實行困

難な點では據、依に似て居るが）とかいふ事にして國民一般特に新聞や雜誌や官報や訓令などを書く人が正直に此約束を守ることにすれば――國際聯盟規約を守る樣な意氣込みで――多少其數を減らす事が出來るとも思はれるが、それの結果漢字の大なる弊害を救濟し得る程度に迄なり得るとはどうしても考へられ無い。

呉々も注意すべき事は、小學校尋常科の生徒の習ふ二千六百字だけが既に一大苦痛なのである。而も二千六百字では日常の用が足り無い。義務教育を了つただけでは官報が讀めない。役場の掲示が讀め無いのだ。小學校を出た丈で八百屋の小僧となつても通帳が滿足に書き得ないのである。

國語調査會の調査の結果が果して四千字制限說になるか三千字說になるか或は五百字說になるか今から豫測する事は出來無いが、要するに制限漢字數が小となればなる程實社會の要求と背馳して來るし、又大となればなる程制限の効果が得られないと云ふ事になつて結局此問題は昔から度々繰り返して居つた事を再び繰り返すだけが落ちではあるまいか？

尙最後に一言すべき事は、漢字制限は詰り或程度の假名國字論を採用した事になるから、文章

の中に漢字の數が減れば減る程其文章は一目見て文意を知ると云ふ性質を失つて來て大層讀みづらくなると云ふ缺點を伴ふに相違無い。假名で書いた文章の讀みづらい事に就いては、私は嘗て東京日日及大阪毎日紙上で野上博士の假名論に對して稍々詳しく申し述べて置いた（別文「假名とローマ字」參照）事があるから今再び此處で繰り返す事は避けるが。

要するに漢字制限などと云ふ事が出來たとしても、それは世人の期待するやうな效果を擧げる程度に字數を制限するのでは無いから其效果は高が知れたものである。

三　口語體に關すること

先般來文部省が先驅（さきがけ）となつて大臣の訓令でも何でも凡て口語體卽言文一致體でやつてのけて居られるが、其趣旨には吾々大賛成である。談話の時許される口語が文章には不適當だとか失禮に當るとか、ヤレ漢語漢文口調で無いと壯重で無いとか云ふ說は凡て日本を輕んじ外國にカブレて居る手合（てあひ）の世迷言――支那人の日常語までも壯重だとか云つて有難がつて居乍ら、而も本來のよい日本語を俗語だなどと輕蔑する支那カブレが時々あるのは、「猫（ねこ）」を「キャット」だとか「シャー」

だとか云つて得意がつて居る馬鹿青年と好一對だ――であつて毫も顧る必要は無い。文部省はよろしく適當なる宣傳を行ひ、逐次之を他官省の文章に迄及ぼして、法律文も裁判の判決文も軍隊の命令及報告文も凡て口語文に變る樣に努力せられたい。

唯此處で大に注意すべき事は、世の中には單に文章の結びを『……である』とか『……であるんである』の樣に早稲田侯紛ひに、或は『……であります』や『……御座います』式に變へるのを口語文だと心得て居る人が少く無い事である。此點で先達文部省で編纂して賣り出された「口語文用例集」や、內務省が民力涵養宣傳標語募集に使つて居る文句などは落第點に近い。

先づ「口語文用例集」に就いて批評して見ると、それの文例に出て居る次の樣な言ひ廻し方は一向口語らしく無い。これは私個人の案であるが下の樣に改めた方がよからうと思はれる。

病氣の爲缺勤します	病氣の爲休みます
伯父が死去しました	伯父が亡くなりました
一切の事件	一切の事柄（或は出來事）

教員を志望して居る	教員を望んで居る
推擧致します	御勸め致します
近視豫防に關する件	ちかめ豫防に就いて
御措置なさる樣	取計らはれる樣
通牒します	御知らせします
領收證	受取(證)
調査する	取調べる
御光來下されば	御出で下されば
大要	あらまし
生徒募入	生徒募集
御報知申上げます	御知らせ致します
御懇情に預りまして	御世話になりまして
御暇乞に參上する	御暇乞に上る

準備に追はれて	支度に追はれて
米國經由……	米國を經て……
汗顏の至りに存じます	御愧かしい次第で御座います
高名伺洩	御名前の伺洩
恐縮に堪へません	恐れ入ります
御遠逝遊ばされ	御亡くなりになられ
至極堅實な人物	至つて物堅い人物
權利が消失する	權利が無くなる（を失ふ）
御眷顧を蒙り	御ひいきを蒙り
乘車券の檢札を致させ	切符を改めさせ

尙此外「觀船」だとか「書中で御挨拶申し上げる」とか「嶄新優麗の諸品を御目にかける」とか謂ふ口語文の手本が出て居るのなども日本に於ける文章の總元締（もとじめ）である文部省の模範文としては

五十點以上の作文の點數は差し上げられ無い。

併し、これは流石は文部省であるから多少頭を使つてあるが、內務省の民力涵養宣傳標語募集（隨分難かしい言葉だ）の方になると「明悳」だとか「陶冶」だとか「輕進妄作」だとか謂ふ恐ろしく七面倒臭い言葉が使つてある。

口語文體として必要な條件は、話の言ひ廻し方に注意して漢文や外國文の直譯體らしく無い樣にすることゝ、語の撰び方を適當にして書いたものを見なければ意味が判らないと云ふ樣な言葉や多くの日本人に通じ無いやうな語の無いやうにする事とである。いくら語尾に『である』を附けても『ます』を附けてもこの二つが旨く出來て居ないのは、それは文章體の直譯に過ぎ無い。言ひ廻し方の事は他日の問題として、私はこれから主に語の撰び方に就いて述べて見る。語の撰び方はとりも直さず國語整理である。

國語即日本語と云ふものは言ふ迄も無く日本人に通ずる言葉でなければならないし、且日本の文章は廣く日本人を相手とすべきものであるから、國語整理に於て第一に考へる可き事は止むを得ない場合の外は成るべく外國語を使は無いと云ふ方針を採る事である。勿論特別な人などが特

別な人を相手として書く文章には外國語を採り入れても深く咎め立てをする必要はないが、さうでなくて今日の日本の樣にむやみに英語や獨逸語や佛蘭西語を使ふのはよく無い。

歐洲大戰の結果我國に物價騰貴の聲が八釜敷なつた揚句、東京に住む中産階級の俸給生活者が寄り合つて作つた組合に「月給取の組合」と云ふのがある。組合の主旨は別として、此會の固有名詞は右に述べた樣な日本語では無く S. M. U. (Salarymen's union) と謂ふ英語ださうである。私は何の必要があつて日本人から成り立つて居る組合が英語の名前などを持ち出さねばならぬのであるか殆んど理解する事が出來無い。日本人が日本語を捨てると云ふ事は日本人であると云ふ事を捨てる樣なものだ。呉々も斷つて置くが、我國は英國の殖民地でも米國の屬國でも無い。これは獨立國の體面から云つても頗る不體裁な話である。

英語問題は其邊で切り上げるとして、さて私の謂ふ「外國語」と云ふのは何も英語や佛蘭西語計りを指すので無い。彼の漢語と云ふ奴も嚴しく云へば「漢の語」であるから日本語でありやうが無い。尤も日本人に對する馴染から云ふと英語などとは比較にならない程古いし、且中には充分日本化されたよい漢語もあるから一概に漢の語だと云つて排斥する譯には行か無いが、この場

合にも亦國民が必要以上に漢語を濫用して、よい本來の日本語がチャントある場合でもそれを斥けて漢語の方を使ふと云ふ惡い癖さへあるのは見逃す譯には行か無い。

私は今年の春房總地方を旅行した事があるが、勝浦から兩國行の汽車に乘つて千葉の邊まで來ると車掌が列車の中をふれ廻つて歩く次の樣な定まり文句を耳にした。

『……稻毛、幕張は通過で御座います』

車掌のこのふれ廻りを聞いて言葉の意味が判つたものは列車内に餘り無かつたらしいが、大聲を出してふれ廻つて歩く車掌の眞の目的が御客に判らせるにあるとすればこれは當然次の樣に改める可きである。

『……稻毛、幕張には停まりません』

次ぎは漢語對日本語の比較としては適切で無いが、汽車の話の序に述べて置く。この汽車がやがて千葉驛を發車すると例の車掌先生又もやつて來て曰く、

『恐れ入りますが、乘車劵の拜見を願ひます』

これは尤も勝浦、兩國橋間の列車に限つた事では無く、乘客は屢々この樣に薩摩守扱ひを受け

るのであるが、聞く處に據ると實際亦ロハ乘りも少くないさうである。併し今はその事を論ずるのでは無い。「乘車券」と云ふ言葉を世間一般に使ひ慣れて居る「切符」に改めたらどんなものか。

「乘車」と云ふ言葉で思ひ出したが、ツイこないだの時事新報（六月二十七日夕刊）の『大不平小不平』と云ふ欄に面白い問答が出て居つた。問題は東京驛前にある電車停留場の名前の事であるが、田舍生と云ふ人が、

『今使つて居る「乘車口」及「降車口」と云ふ二つの名前は文字で見れば判然と區別が付くが、車掌に言はして見ると實に紛らはしいのみならず低音の場合などはどつちだか判らぬ事があるから、これは極めて簡明に東京驛出口、東京驛入口と呼ばせた方が判り易くて便利では無いか』

と謂ひ出したのに對して東京市電車課の答が振つて居る。

『その名稱は現在の通りにて差支無きものと認めます、遺憾乍ら投書の御趣旨に添ひ兼ねます』

難かしい漢語はこれ迄軍隊の專賣特許の樣になつて居つたが、近頃は其軍隊でも「獨立家屋」が「一軒家」、「十字路」が「四つ辻」、「三叉路」が「みつまた」、「森林」が「森」とか「林」と

かに變つた世の中である。電車課ももう少し考へて貰はねば困る。

本體「口語」と云ふ言葉からして一向口語らしく無い。これは宜しくローマ字仲間の云うて居る通り「話し言葉」(Hanasi-kotoba) に改める可きである。尙氣の付いたのを少し擧げれば、

扉の開閉（かいへい）	扉のあけたて
歩調（ほてう）	足並（あしなみ）
模型（もけい）	雛形（ひながた）
流行（りうかう）に遲れる	はやりに遲れる
消化する	こなれる
發賣する	賣り出す
日出（につしゆつ）	日の出（ひので）
日沒（にちぼつ）	日の入（い）り
識別（しきべつ）が出來ない	見分（みわ）けがつかない

照準	狙ひ
慣例	仕來り
暗夜	やみよ
根據	據り處
發條	ばね
燈火	あかり
裝置	仕掛

是等は孰れも皆立派な日本語であつて、高貴の方の前で使つても差支無い言葉であるし、且誰にもよく判る本來の日本語なのに、人々はそれを捨てて上に書いてある漢語の方を使ひたがるのはどう考へても感心出來ぬ事である。

以上は主に日本語の體面問題からなる可く漢語の濫用――何でもかでも漢語は全廢して大和言葉を使へと云ふ意味ではない、濫用がいけないと云ふのだ――を廢めねばならぬ事を說き明かし

たのである。これは前にも鳥渡述べた通り、日本人の事大思想から起る處の悪い現象で、何んでも漢語を使つたり英語を使つたりすればエラさうに見えると思ふ日本人の自主的精神に乏しい事をよく表して居る。

著者曰く、吾々が言葉に就いてはどこ迄も日本語を守り立てて行く大方針をとり乍ら文字の方になると急に世界的のローマ字を採用する事を主張するのは矛盾ではないかと疑はれる方もあらうが、それに就ては本書に掲げてある「外國語ののさばりこみ」と云ふ論文を讀まれ度い。

體面問題はそれ位に止めて、次に私は實用上の見地から國語整理の必要を述べ立てて見る。それは即漢語には同音異議の語が多くて、話しや演說や電報や電話で意味が通じ無い場合が頗る多いと云ふ事である。

勿論讀み方が同じで意味の違ふ語のあるのは强ち漢語には限ら無い。本來の日本語にも多少あり英語にも佛蘭西語にもある。それだから各國共多少駄ジヤレと云ふものが流行するのだ。併し本來の日本語は勿論の事、英語でも佛蘭西語でも其程度は漢語とは較べ物にならない程少くて、漢語の樣に數多いのはどうしても整理改良を要する。

何故漢語に同音異意の言葉が多いかと云へば、前にも述べた通り漢字の數は康熙字典にあるのだけでも五萬何千と云ふ多い數であるのに、それの音の數が四百位しか無いからである。即「カン」とか「トウ」とか云ふ一つの音に對して之を表はす文字の數が平均百二十五以上もある事になるから、同音異義の語の澤山出來るのは漢字を使ふ日本の特徴であると云つて宜しい。

本來の日本語にある處の讀み方が同じで意味の違ふ言葉は、一般に話や文章の前後の關係で大抵區別が出來るし尚又言葉の揚げ下げが違つて居るからそれで區別のつく場合が多い。例へば、一

Hára（原）,	Hará（腹）,	
Kakî（柿）,	Káki（牡蠣）,	
Hári（針）,	Harî（梁）,	
Haná（花）,	Hána（初）,	Hana（鼻）,
Hasî（端）,	Hási（箸）,	Hasi（橋）,

の様に。

處が漢語の方ではこの様な揚げ下げの區別も無く、又話の前後の關係でも判ら無いと云ふ様な言葉が少く無い。例へばよく引合に出される公爵と侯爵、科學と化學、禮遇と冷遇、効率（Efficiency）と工率（Power）、市立と私立、快漢と怪漢、無智と無恥、亡狀と暴狀、文化と文華、騎銃と機銃、合唱と合掌、破毀すると破棄する、博學と薄學、意見と異見、實見すると實驗する、寄港すると歸港する、感心と寒心、レンズの光度とレンズの硬度、鑛業と工業、御好意と御厚意、落伍と落後、全部と前部、屬吏と俗吏の様に數へ立てれば殆んど際限が無い。

『俺の親父（おやぢ）は華族でコウシャクだ』と云つても『私は目下クワガクを研究して居る』と云はれても、『林伯爵は英國で大層レイグウを受けた』でも、『此電動機のコウリツは幾らか』と聞かれても、どちらの事を指して居るのだか薩張り見當が附か無い。日本人同志が話をした場合に理解が出來ないと云ふ様な不都合な言葉は正當なる日本語で無いからどうしても整理せねばならぬ。そこでローマ字論者はグズグズしては居ない。直ちに改良を計つて次の様に云ふて居る。

即公爵はキンシャクと讀ませ、科學は理學に改め、又効率を効能率に呼び換へて居る。因に効

率を能率と云ふ人が世間にあるが、これは同じ物理學の言葉に能率(Moment)と云ふものがあるからいけないと謂ふ田丸博士の說である。尙其外の言葉の謂ひ換へを知り度い方は日本ローマ字會員になられるのが一番手つ取り早い。

右に擧げたもの程極端な例で無くても、人の演說や講義などを聞いて居る場合に、講演者の使ふ漢語がどの意味の言葉であるかに迷ふ場合が少く無くて、ウツカリそれを頭の中で考へたりして居ると忽ち演說は先きの方に進んで仕舞つて、遂に大切な處を聽き落す事などは人々の度々經驗された處であらう。

昨年冬の議會に、仲小路前大臣が山本農商務大臣に向つて云はれた『公定價格を定める事が必要だ』と云ふ文句が『高低價格を定める……』と誤り傳へられたり、又夏の臨時議會で加藤海軍大臣が分科會で降旗元太郎氏の質問に對して答へられた繫留氣球が新聞には輕流氣球と書かれたり、もつとヒドイのになると、ツイ先達つて辭職された田中陸軍大臣が尼港問題の答辯をされた中に『臣節を全ふする』と述べられたのが、翌日の官報には『親切を全ふする』と書いてあつたので、これが爲め次の日貴族院で阪本釤之助氏の質問となり、國家の重要な政務を議する時間の

幾分かゞ詰らね問題に振り向けられた事などは國語整理の必要を雄辯に物語つて居る。

加ふるに、漢語の作り方が右の様に眼で見た場合を基準として居る結果、口で言うた場合に語呂が惡くて言ひ難くかつたり、又耳で聞く場合に――殊に電話などで――聞きとり難いと云ふ風な事が少く無い。かくて昔から言靈(ことだま)のさきはふ國と云はれた言葉の國日本が文字の國に化(ば)けつゝあるのは慨はしい事である。

話は多少脱線の氣味があるが、要するに口語文と云ふものは單に語尾を『である』式にしただけでは何んにもならない。漢語の整理改良を計り、成るべく本來のよい日本語をドシドシ使つて書く言葉を言ふ言葉と並行させなければ口語文の發達は覺束無いし、尙又兒童教育上の負擔を輕くしてやる事も出來ない。察するに臨時國語調査會の方針もここにある事と思はれる。誠に結構の話ではある。

が併し、此問題を其様に早合點してはならぬ。それなら國語整理と云ふ事業は果して成功の見込があるかと謂ふのに、吾々ローマ字仲間の見る處では、甚だ覺束無く考へられる。それは我國が漢字に執着して居る限り成功の望みが無い。何故(なぜ)かといふのに二つの理由がある。

第一に、右に述べた方針に從つて、「流行」、「消化」と云ふ樣な漢語を廢めて、本來のよい日本語である處の「はやり」、「こなれ」等を使ふ事にすると、談話の時は先づそれでよいとして、さて、文章を書く段になると是等のいいいいいいい日本語を書き表はす可き漢字が無い。漢字が無ければ假名で書いたらよささうに思はれるけれどもさうは行かない。今日漢字交り文を認めて居る時代に名詞や動詞や形容詞のやうな重要な語に假名を使ふと云ふ事は、（イ）一般に無學者のする事だとなつても居るし又、（ロ）文章の中で重要な位置を占めて居る斯くの如き言葉――話や演說では一段と聲を張り上げる部分である――を假名で書くと云ふことは（假名計りの文章ですら堪え難い事であるのに、況して漢字の使用を許す文章では）書く人の心持から謂うても堪えられないし、又讀む人の側から見ても假名書きの所は餘り意をとめないのが事實である。殊に、（ハ）改まつた文章を書く場合には「こなれ」、「はやり」等のやうに假名書きをしにくい樣な實際の有樣になつて居る等の理由からしてそれは行はれ難い。かくて人々は日本語の「はやり」、「こなれ」を捨てゝ漢語の「流行」、「消化」を採るに至るのである。斯う考へれば文部省の口語文用例集の意味がよく判る。

この様に新聞や雜誌や官報などが旣に此方針を採るから世を擧げて漢字の流行を來し、遂にそれが書き物の場合計りで無く、談話や演說に迄も及ぼす次第なのである。近頃の看護婦の中に、氷枕（こほりまくら）を「ひようちん」と云ふ者まで出來たり、敎育を受けた人に却つてよい本來の日本語を忘れて仕舞ふ樣な現象の起るのなどは此藥の利き過ぎた例である。元來文字と云ふものは言葉を寫す符號に過ぎ無いから、言葉は主人公で文字は家來の分際である可き筈なのに、我國が漢字を使ふ爲めに斯くの如く家來たる處の文字の爲めに制せられて、よい本來の日本語を捨てねばならぬと云ふ樣な仕組みになつて居るのはどうしても日本語にとつて正當な事ではない。

第二に、公爵と侯爵や科學と化學と云ふ風な言葉は、何の方面から見ても改めねばならぬ事は一點の疑を挿む餘地が無いに係らず、今日迄それが直されて居らないのは何故であるかと云ふに漢字で書いた場合に、明かにそれの區別がつくからである。尤もそれを漢字の特徴だと云つて有難がるのは文字の任務が語を寫すにあると云ふ事を知らない人の淺い考であるが、併し現に角書いたものを見た場合には公爵と侯爵とはチャント區別が附くから、漢字を使つて居る間は國語整理の必要がピンと頭に來ない。從つて誰も國語整理を熱心にやらない。整理をしないだけならま

だしも、見れば判ると云ふ便利(?)がある爲めに、聞いた場合には判らないやうな言葉が續々新らしく製造されつゝある。詰り此の様に日本語を亂した根本原因は見れば判ると云ふ漢字の齎した罪である。であるからそれを救ふのにはどうしてもローマ字の様な音文字に依らなければ成功し無い。何となれば、ローマ字を使ふと語の不完全な點が暴露されて明るみに表れて來るから、人々は書いた場合にも意味が判るやうに言葉の言ひ廻し方に氣を附けるやうになるのが自然の成り行きであるから。

之等の事は理窟の上から計りでなく事實が明かにそれを證明して居る。世の中に一番熱心な國語整理實行家はローマ字仲間であつて、どんな立派な口語文を持つて來ても此點では毎月の雜誌「ローマ字世界」に出る文章には敵ふまい。而も斯く國語整理や漢語排斥に力瘤を入れて居る私自身でさへ、この様な漢字交り文を書く段になると、諸君のまの當り見られる通り、かなり澤山の漢語を使つて居る有様である。第一此論文の標題の「考察」や「可能性」からして血祭りに上げねばならぬやうな言葉である。即これを見ても口語文の發達は、漢字を使つて居る限り如何に困難な事であるかが窺はれる。それは實に日本がローマ字を採用する事に依つて最も確實迅速に成

功するものである。因に私自身の經歷が元來軍隊用語の改良を志して、其方面からローマ字の仲間にはいつたのである事も此の議論を證明する助けになると思ふ。

三　むすび

漢字制限に依り漢字の弊害を救濟せんとする企も、難解の漢語を整理して國語の獨立、口語文の發達を計らうと云ふ案も煎じ詰めれば、其根本に橫たはる國字問題を根本的に解決せねば成功の望みが無いと云ふ事は以上永々しく述べた處によつて明かに了解される筈であつて、此議論は縱から見ても橫から見ても理義明白一點の疑ふ餘地も無い。斯かる立派な議論は何も私が今急に考へ出した事でも何でも無い。凡て田中館博士や芳賀博士（今度も亦國語調査會の委員となられた）や田丸博士が疾うの昔から稱へて居られた處で、凡そ今日ローマ字仲間と云ふ仲間は誰でも皆此位の事は心得て居る。

勿論私は、以上述べ來つた事に依つて、臨時國語調査會の事業が全く効果が無いと云ひ斷るのでは無い。あれだけでもやらないよりはマシであるし又相當の成績を舉げる見込みもあらう。假

令僅かな効果でも収獲のある事は遠慮無くドシドシ着手すべきである。唯、高がこの位の仕事で國民が根本的に救はれると思ふ人があつたら大變な間違ひであると云ふ事を述べた迄である。

根本的で無い之等の手段は所謂差し當りの間に合せ策に過ぎない。言はゞこれは泥濘に足駄をはいたり、足駄に爪革を附けたり、自働車の泥除けを考案する樣なものだ。根本問題はどうしても道路を修繕してアスファルトなり木煉瓦なりを敷か無ければ充分な解決が付かないのと同樣、斷然國字を改め、ローマ字を採用しなければ救濟することは出來無い。

併し其根本の道路の完成する迄には相當の暇が費るから、それ迄なりとも泥濘から逃れる工夫を考へついたのが即泥除けであり爪革であるのだ。これは實によい想ひ着きで、値段が安くて手輕に出來る應急策は遠慮なく採用すべきである。漢字制限も此意味ならば少しも排斥する事は無い。たゞ充分なる効果は擧げられない迄の話である。

唯此際呉々も注意す可き事は、日本人に慾が少いと云ふ事である。諦のよい日本人は足駄や爪革が發明されるとツイ僅か計りの便利さに滿足して、高い税金を拂つて道路を直す事を忘れて仕舞ふ傾がある。間に合はせ物の弊害は特に日本人に對して此點に存する爲め恒も根本策の解決を

永引かして居る。初めの約束は道路が出來上る迄のツナギであつた爪革の發明が、ツイ道路其物の完成を遲らせる事は無いか！

臨時國語調査會が、凡ての國語國字問題の根本の解決策である處のローマ字問題の完成を少しも遲らせる事無しに、唯それに移る迄のツナギとして之等の問題を調査研究するならば、大賛成であるが、成案を得た結果慾の少い國民をして小成に安んじさせる樣な氣風を馴致したならば其罪や決して輕く無い。

調査會の委員諸君、願はくば此問題を應急策と根本策との二種に劃然たる區別を設けて、應急策が根本策を犯さ無いやうに充分なる思慮を廻らしつゝ國語及國字の調査を進められん事を。翻つて、一般國民諸君特に智識階級の諸君は調査會が三ケ年に亘る應急策の研究を遂げた後更に進んで其根本策に向つて突進せねばならぬ事を銘記して戴き度い。（中央公論大正十年八月號）

國字改良の原理

——不都合不合理不徹底なる國字の現狀と其救濟策——

一　前置き

今日我國の前途には諸種の難問題が横たはつて居て、何れも吾々及吾々の子孫が早晩何とか根本的に解決をつけなければならないもの許りであるが、其内でも我國の興廢に關する甚だ重大な問題が一つある。卽それは私がこれから追々と申し述べようとする處の國字問題である。

彼の太平洋問題であるとか、軍備制限であるとか謂ふ問題も、勿論日本にとつて重大な事件であるに相違ない。併し乍ら一國の興廢盛衰は一般に、之等の對外的事件よりも寧ろ對內問題に依つて消長する事が多いと謂ふ事を思ふ時、吾々はそれ等の問題に較べて心的方面から見ても物的方面から謂うても、より大切である處の國字問題を等閑視してはならない。外ばかり見て足許を

御留守にする國民は危い。

國字問題の様なものは其專門の學者例へば國學者や文學者などの考へる可き仕事であつて、一般世人の取扱ふ問題では無いかの如くに考へて居られる方があつたら、それは大變な心得違ひであらう。國字は國民一般の使ふものであるから其改良には凡ての日本人が參與す可きであつて、教育家であらうと、軍人であらうと、實業家であらうと、文學者であらうとに差別は無い。

さて私はこれから國字改良問題の玄關から奥の院迄を讀者諸君に紹介するのであるが、豫め諸君に御斷りして置く可き事がある。凡そ誰でも或議論を進める時には相手(あいて)の心理に强き印象を刻せんとするの目的からして、議論が往々極端に趨る事を免れ無いものだ。丁度曲つた棒を眞直(まつすぐ)に直(なほ)すのには之を稍反對方向に迄曲げ過ぎる事が必要である様に。從つて「眞理は兩者の中間に存する」などと謂ふ大ざつぱな平均値をとる様な事になるのであるが、私は特に此點に細心の注意を拂つて掛値無しの中庸の道を辿る事に勉める積りである。而して其引用する處の數字や統計には凡て確實なる根據のある事をも諸君は見落さないであらう。

打開(うちあ)けて謂へば、國字問題は私の如き後輩が今更述べ立てる迄も無く、既に立派な解決を終つ

て今や實行時代に進入す可きものであると稱せられて居るに拘らず、それが多數の國民に對しては常に新らしき問題であるのだ。既に議論の時代を通り越したと謂はれて居る其議論を再び此處に蒸し返す事を必要とする處の日本の現狀を私は悲む。

二　文字と言葉

私の知つて居る範圍に於て、世間で相當識者と謂はれる程の人で、字と語、即文字と言葉との區別を辨へて居られない樣な議論をする方が少く無い。讀者諸君に對しては極めて判り切つた事の樣であるが、話を進める順序として一通りこの區別を明かにして置くのは强ち無駄な事ではあるまい。此書き物を段々と讀んで行くに從つて諸君は私の用意が極めて周到であつた事を悟られるに相違ない。

由來日本人は字と語とを混同して取扱つて居る。混同の原因は謂ふ迄も無く漢字の罪であるがその事は後で述べる事として、例へば彼の「アドバタイザー」や「クロニクル」などの事を日本人は一般に英字新聞と呼んで居るけれども、これは寧ろ英語新聞と謂ふ可きである。尤も色々と

こぢ付ければ英字新聞と云つて云はれぬ事は無いが、之を英語新聞と呼ぶ事の適切なのには敵ふまい。

彼のヘボン式ローマ字の大立物たる櫻根博士でも此點を混同して居られるやうだ。と謂ふのは九月號の雜誌 Rômaji 第一頁にある同博士の文章の中に次の一節がある。

"Jissai *Mormott* do yoku wakatte iru tokoro ni, kotosara *kimei*（海溟）nado to iu muzukashii *monji* o mochiiru hitsuyô ga nai to omoimasu."

即博士は「モルモツト」を「カイメイ」に變へる事文字の變化であると思つて居られる樣であるが、實は言葉が變るのである。

右は語と謂ふ可き處を字と取り違へた例であるが、次にそれと反對に、人に依つては字と云ふ可き處を語と取り違へる事もある。例へば假りに原首相が、『どうも日本語は不都合だ。私の名前なども原敬（ハラケイ）と讀まれて、誰も「ハラタカシ」と呼んで呉

れ無い』

と不平を零されたならば、それは首相の間違ひであつて、日本語は少しも此場合には不都合では無くて、たゞ「ハラタカシ」と云ふ日本語（文法上固有名詞に屬する日本語）を表はす處の日本の文字（此場合には漢字）が不都合なのである。

誰も承知の通り、言葉と云ふのは人間が口と耳との仲立ちに依つて思想をとりかはす處の一方法――最も有力な――である。近代の經濟學者は、人類の文明が他の動物に較べて獨り今日の如き盛觀を呈するに至つたのは、他の動物と異りたる或る有名なる特徴を有するが爲めであると稱して、其特徴を手の延長即道具の製造に歸して居るが、吾々はより一層根本的の相違として言葉を擧げて見度い。これは實に人類生活の特徴であつて蟲や鳥や獸などの生活には見られ無い現象である。

話は鳥渡脇道にはいるが、近世の遺傳學の示す處に依れば『生物が一代に獲た處の變化――知識や肉體の上などの――は遺傳しない』と謂ふ事に多くの學者の說が一致して居る。これは何う謂ふ事かと謂ふと、親父が車挽きをやつた爲めに脚が發達したからと云つて生れる兒供はその部

分が別に發達して來るものでなく、又親が一生の間に獲得したさまざまな知識は其兒に傳はるものではないと云ふことだ。

其生れた兒供は嘗て其父や母が生れた時と同じ樣に、國語の知識も理學の知識も地理の知識も持たないのだ。親に較べて此點で少しも進んでは居らない。然るに人類の文明が逐年進步をして遂に其趨く處を知ら無いと云ふ樣な偉觀を呈するに至つたのは何の理由によるかと云ふに、人間のみ獨り言葉を持つて居ると云ふ事が大きな原因をなして居る。

他の動物、例へばそれ等の內の最高等動物と云はれて居る猿などでも言葉は極めて不完全なものになつて居て、自己の經驗した知識を他の猿に傳へる事が出來ない。前に述べた通り一代に獲た經驗は遺傳しないから、例へば親猿が嘗て河豚を喰べて腹痛を起こして苦しんだと謂ふ風な事があつても、其後に生れた子猿は河豚の毒に就いては何等知る處がない。而も親猿が子猿に河豚の毒を教へてやらうとしても言葉と云ふものを持たぬ畜生の悲しさは、如何とも其手段がつかない。斯くて此貴重な經驗は誰に傳へる術も無く、埋れ果てゝ子猿孫猿は申すに及ばず、隣の木に住む猿も其子孫も繰り返し河豚に中てられるのであらう。これは啻に河豚計りで無く、凡て此調

子であるから猿社會の文明程度は幾代經つても元の杢阿彌である。

そこへ來ると有難いのは人間樣である。親が河豚に中毒したが最後、兒供にはチャントそれを言ひ聞かせる。其子は又自分の子に祖父の經驗を話す。斯くて昔から所謂『言ひ繼ぎ語り繼ぎ……』と云ふ事が行はれたわけである。而もこれは時間的に語られ計りて無く空間的にも行はれるから其一人の知識や經驗が廣く人類社會の文明や幸福に貢献するに至るのだ。私はこの事を考へる度びにいつも、始めて河豚を喰べた人もさる事乍ら、海鼠を喰べた人類最初の人や、雲丹のやうな棘々のある動物が吾人の食用に供せられる事を發見した人の事を思つて、之等の人々の勇氣に多大の尊敬を拂ふ。

扨此人類に限り許されたる思想表現法の一種なる言葉は目下の處國々に依り或は民族の異なるに從つて同一で無い。卽日本人の使ふ言葉は日本語であり、英國人のは英語、又支那人のは支那語と云ふ風に。

次に文字と云ふのは右に述べた言語を寫す爲めの記號であつて、これにも亦色々な種類がある。漢字、假名、ローマ字、土耳古文字、露西亞文字其他がそれである。尙以上の關係を例を擧げて

説き明かせば、鼠を捕へる動物の事を「ねこ」と云ふのは日本の言葉であつて、之を漢字で「猫（べウと讀んではいけない）と書いても、片假名で「ネコ」と書いても、又ローマ字で Neko と書いても、それは依然として日本語である。それと同時に英語の cat を片假名で「キャット」と書いても、それは決して日本語になつたのでは無い。

そこで國字問題と國語問題とが判然と切り離して考へられる。私が此話で國字問題と云ふのは、日本語を寫す處の現用國字即漢字と假名とを吾々日本人は此儘後生大事に守つて行く可きものであるかどうか。若し此儘でいけないと謂ふならどうすればよいかと謂ふ問題である。從つて言葉の問題を論ずるのは此話の主眼とする處では無い。今假りに段々と攻究の結果、日本の國字としてローマ字が一番適當して居ると云ふ結論に達したとしても、それは單に日本語をローマ字で書けと謂ふだけの事であつて、決して英語の採用とか、佛語の採用とか云ふ事を指して居るのでは無い。

然るに世間には、吾々が國字問題を持ち出すと直きに『ローマ字をやる位ならエスペラントをやれ』とか何とか云ふ識者が少く無い。『假名を使ふ位ならローマ字にしろ』とか『英語を學ぶ位

ならエスペラントを習へ』と云ふならば話は判つて居るが、ローマ字の代りにエスペラントと云ふのは餘程問題が掛け離れて居つて、前者は文字の問題であり後者は言葉の問題である。

勿論吾々は字と語との間に密接の關係がある――尤もそれは日本語と漢字とは切つても切れぬ緣があると云ふ様な意味ではない。此の意味は追つて分明する時があらう――事を認めるし（語を離れて字を考へる事は出來ない）、尚又日本語の中にも整理改良を要するものが少く無いと云ふ事は既に八月號で述べた處であるが、最初の間は明かに此兩者を區別して掛らねば往々議論の錯綜を招く處があるので、特に長々しく此項目を設けて兩者の立場を明かにした次第である。

三　現用國字と國民教育

今日迄國字として我國は永く、漢字を主要文字として假名をそれの補助文字として居つた――現にしつゝある――事は誰しも承知の事である。此二種の文字には各々救ふ可からざる缺點があつて是非共國字の改良を計らねばならぬ事はこれから追々と述べるのであるが、私は先づ第一に其内でも主力たる處の漢字の攻撃から始めて、次に時機を見て鋒先を假名に差し向けようと思ふ。

兒童教育の上から見て漢字に數の多いこと（尋常小學六年間の讀本の字數が千三百六十字、讀本以外のものを籠めて兒童の習ふ漢字數は二千六百餘字、及其一字一字に色々な讀み方があつて實は三千足らずの文字を覺える事が一萬字にも匹敵する事になると云ふ事など）に就いては旣に私は八月號で述べたが、成る可く話の重複を避けて私は更に詳しく此問題を研究するであらう。

話の種

私が八月號で述べた樣に「行」の字の讀み方がザット十種にも及んで居ると謂ふ話を或る處でしたら、聽衆の中からこんな事を云ひ出す者があつた。

『いや、それよりは洋の字の方がズット澤山の讀方がある。字引を引くとヨー、ショーの二つの音（おん）とナダ、タヾヨフの二つの訓（くん）がある外に、洋燈（ランプ）、洋傘（コーモリ）、洋杖（ステツキ）、洋琴（ピアノ）、洋風琴（オルガン）、洋漆（ワニス）、洋灰（セメント）、洋鬼（ヤンキー）、洋妾（ラシヤメン）……などいくらでも讀み方がある。』

今一字に就き十種の讀み方を覺える――「行」の字の場合の樣に――と謂ふ事と、十種の別々の文字を覺えると謂ふ事との難易を比較して見るのに、前者の場合には、「カウ」と讀む可き處

を「アン」と讀んで三井銀行の事を三井ギンアンなどと謂ふと丸で意味も判らなくなり、又無學者として人にも笑はれる（落語の題材に斯う云ふ風なのを取扱つたのが多い）から、十種の讀み方を覺えた上に、吾々は尙それ〴〵の場合に適當な使ひ分けを暗記しなければならない。此各種の場合に應じて適當な使ひ分けを憶えると云ふ事は決して容易な業では無い。兒童が頭を惱ます事は、十種の別々の文字を覺えると云ぶ事よりも一層大である。要するに兒童の負擔は一萬何千字も覺えると云ふやうな莫大（ここれに小の字を添へると莫大小と讀むのだから堪らない！）なものに相當して仕舞ふのだ。

『小學校に於て適當なる教師の指導の下に、兒童の好奇心と知識慾とを利用して、巧に教授を行へば二千六百字（福永曰く、實は一萬數千字に匹敵する）の漢字を覺えさす事は大した負擔でも無く、兒童は特に苦痛を感ずるとも無しに、知らず識らずの間に二千六百字を覺えて仕舞ふ事が出來る』と謂うて、學校に於ける兒童の苦心及負擔を輕く視る人も世間には少く無い樣であるが、それは小學教育又は兒童の實際を知らない人の議論である。

兒童が二千六百の漢字を覺えるのにどれだけ苦勞して居るかは、彼等の下調べと復習とが永い

間——卒業間際になつても未だ——讀み書きであるのを見ても判るし、若し又論者の云ふ樣に、特に目立つた苦勞なくしてそれを教へ或は覺え得たとすれば、それは教師が毎日少し宛小出しをして六ケ年の長日月を費したと云ふだけの事で、其時日と努力との總合計は大したものであるに相違ない（別表保科氏の取調べを見られ度い）。『知らず識らずの間』と云ふ文句は、此際兒童の教育と云ふ事に冷淡な父兄の知らず識らずの間と解釋すべきである。

成程兒童の知識慾は大であらう（人の記憶力は滿十三歳の時が最高だと云ふ）。併し、凡そ學問と云へば單に讀み書きだけであつたと云ふ德川時代なら知らぬ事、今日の樣に學ぶ可き事が山程ある時代に（近頃義務教育年限を更に二ケ年延長すべき事が叫ばれて居る位ではないか！）兒童の知識慾や好奇心を正味のある學問に振り向けずに、之を單に文字を覺えると云ふ事に費して仕舞ふのは、歐米諸國の狀態に比較して見て、殊に詰らない話である。

全體文字は思想又は知識其物では無い。田中館、芳賀、田丸の三博士は其著書「ローマ字獨り稽古」で此點を面白く說き明かして居られる。即『元來文字は言葉を表はす符牒で、其言葉は思想や知識を表はす符牒であるから、中味たる知識や思想から見れば言葉は丁度容器（即重箱）に相

當し、文字は其重箱を包む風呂敷位の格である』

今日飛行機や蒸汽機關がどんなものであるかと云ふ位の事は誰にとつても必要缺く可からざる知識であると云うて差支無い。處が我國では其飛行機とか蒸汽機關と云ふ文字が仲々難しい。私が多數の機關科將校——蒸汽機關の專門家である處の——に就いて試した處に依ると蒸汽と云ふ文字を完全に書き得た人は至つて少かつた。而も此の難しい文字を一生懸命になつて覺えた處で（日本の小學校は之をやつて居るのだ）、それは飛行機や蒸汽機關を學んだのでは無い。我國の小學教育が（陸海軍の新兵教育も幾らか之に似た所はないか？）この忙しい世の中に大部分の時と力とを此難かしい文字即ち風呂敷の詮索に費して居る間に、文字の易しい歐米諸國では、恐らくは既に中味たる飛行機や蒸汽機關の構造から取扱法まで研究を進めて居る事であらう。

日本の小學教育が、歐米に比べて、如何に風呂敷の詮索に多大の時と精力とを費して居るかを一層明確に讀者諸君に意識して戴く爲めに、私は昨年東京御茶ノ水に開かれた文部省主催、時展覽會の出品表を左に掲げて見る。

一、小學校に於ける國語の每週授業時間表　（六ケ年間の平均）

漢字を使ふ日本では……………一一・三時間

ローマ字を使ふ歐米では……………八・〇時間

これを總科目の授業時間に較べると、

日　本……………四四％

歐　米……………三一％

二、これを學ぶ讀本の分量を語數（字數ではない）で較べると、

（第三學年に就いてミユンヘン市の教科書に較べた例）

日　本……………九九〇〇語

獨　逸……………四八〇〇〇語

三、同じく百語を學ぶに要する時間は、

日　本……………四時間と二十分

獨　逸……………只の三十八分

即日本は獨逸の七倍も暇が費る。

四、普通の書き物を相應に讀み得る迄の年限（大凡の見當）

日本（中學三年位と見て）……………八年

歐米（小學二年生が自由に讀む）………一年半

（文部省國語調査主任東京高等師範學校教授兼東京帝國大學助教授保科孝一氏の取調べに依る）

即右の統計に依れば、我國は歐米諸國に較べて毎週三時間と二十分だけ餘計に國語教育に力瘤を入れて居るのに、其効果は獨逸の五分の一にしか當つて居ないと云ふ有樣である。これは抑何に原因して居るかと云へば、其最大理由は云ふ迄も無く我國の國語教育の大部分を擧げて實は國字教育の方に振り向けられて仕舞ふからである。斯くして總科目授業時間の四割四分の大部分は風呂敷の詮索に徒費されつゝある。

斯くの如く多大の時間と精力を費して教はつた國字教育は、それなら非常に好成績を示して居るかと云ふに、これは又驚く可き程不結果に終つて居る事は、小學校を出ただけでは社會へ出て用が足りない（本誌八月號參照）のを見れば直ぐに了解される事であらう。尙更に驚く可き事實は

中學校を卒業する頃になつても未だ平常使用の文字を憶え切れないのはおろか、帝國の最高學府と稱せられる大學を卒業しても尙座右に和英辭典やローマ字引きの國語字典を備へて居る事である！

以上述べたのは文字卽風呂敷に就いての話であるが（重箱たる言葉に就いては前表の通り獨逸の七分の一の成績）、次に私は中味たる思想や知識に就いて述べなければならない。專門家の研究に據れば、我國の尋常小學六年間に習ふ讀本の材料を獨逸あたりの小學校の同年限に敎はるそれに較べると、僅に六分ノ一にしか當つて居ないと云ふ事である。我國の兒童が讀み書きに夢中になつて居る間に彼等は道草を喰ふ事無しに六倍の知識や思想を得て仕舞つて居るのである。國民一人々々が此狀態にあるから、國全體として彼に比較して實に容易ならぬ差を生じて居る。この障害なくしてさへ立ち遲れの我國が文字の鎖で足を縛られて、どうして歐米諸國民と駈步競爭が出來やうぞ！

世には吾々が漢字の缺點だとして取扱つて居る所のものを却つて漢字の特徵――優れた――だと信じて居る人があるから實に世は樣々である。曰く『漢字が兒童の頭を惱すのは事實であるが

兒童の頭を惱すことはこれ、とりも直さず兒童に對する頭腦の鍛錬に外なら無い。漢字にへコたれる樣な國民は矢張り劇烈なる生存競爭には勝て無いのだ』と。

此議論に對しては私は餘り多く答へるの必要が無いと思ふ。第一に兒童の頭を鍛錬するのは贊成であるが、それの材料に何故に風呂敷を持ち出さねばならないか、今日は兒童の頭の鍛錬に利用し得る處の中味のある必習學問の寧ろ多きに苦んで居るのでは無いか。尙後段の論法に對しては私はアベコベに論者に反問しやう。『歩行に堪へられない樣な國民は劇烈なる生存競爭に敗けると云うて、論者は東京から長崎へ行くにも膝栗毛をやる積りか』と。『日本の交通機關を破壞して日本人は凡て歩行に依れ』などと云うたら、列强との競爭はおろか、人は皆論者を氣狂ひと呼ぶであらう。

尙此鍛錬問題に就いて一言すべきは、字を記憶すると云ふ事は機械的の記憶力を要する事である結果、兒童の推理の力の發達を鈍らすと謂ふ話である。

扨私は長々と漢字の弊害を兒童教育上から述べ立てた。漢字の不都合な事は色々な方面から論ずる事が出來るけれども、此所に述べた教育上の不都合程大なる不都合はあるまいと考へて、重

ねて私が此章の說明を繰り返した次第である。世間には吾々が第四位或は第五位以下に取扱つて居る問題を取り出して、さも之を吾々の主要問題ででもあるかの如くに取扱ひ、そうして之に對する些細な缺陷を發見して吾々の國字問題の全部を否定し去る樣な論法を採る人が少く無いのは、吾々の屢々閉口する處である。そこで私は特に此章を冒頭に推し立てて、逐次他の論に移らうとする次第である。

それは扨置き本論に還つて、日本を前述の樣な憐れな狀態から救ふのにはどうすればよいか。

これは唯日本語を書く方法を簡單にするより外に致し方が無い。

四　所謂「民衆の自覺」

本章で述べる所は私が嘗て岡山の六高及醫專の講演會の爲め準備した所の草稿であるが、前章と關係する處が淺く無いから特に一章を設けて此處に插入することとした。

文化開化の聖代は有り難いものである。今は日本も行燈や洋燈の時代は疾うに過ぎて、鄙も都も電氣燈が行き渡るやうになつた。『螢の光、窓の雪』はおろかな事、今時の青年には、油買ひの

話や――油賣りは今でもあらうが――洋燈の掃除や、さては洋燈の心の切り方の苦勞を話して聞かせても――それ等は皆書生や居候の重要なる役割の一つであつた――何の感じも起るまい。嗚呼便利なる電氣燈よ！　心を出し過ぎてホヤを割る處もなければ、ひつくり覆して火事を起す心配もない。

處が不思議な事には、日本には其便利な電氣燈を夜中點け放しにして居る家が少く無い。而も點け放しの言ひ草が振つて居る。『うちはメートルでないから、電氣を消して寢たつて會社が儲ける計りだ。マシヤクに合はないから點け放しにしてやれ！』だと。

全體夜中に電氣燈を點けた儘寢ると、メートルの無い家庭自身にとつても、(イ)安眠を妨げる。殊に兒供の爲めによく無い。(ロ)電球の命數が減つたり、球の光明度が減退する。(ハ)外が暗くて家の中が明るいのは盜賊を吸收し易い――序乍ら述べて置くが之と反對に家の周圍に電燈を一個設備する事はよく交番一ケ所を設けた事に匹敵すると云ふ專門家の話である――等の不利があるから利己主義で世渡りをする心掛けの人でも電氣は消して寢た方が得策なのである。

次に私は利他主義の人に對して忠告しなければならない。日本は所謂五大國の內でも名高い貧

乏國である。金持の國とても決して無駄をしてよいと云ふ理窟は無いが、殊に貧乏な日本にとつて電燈の點け放しは驚くべきエネルギーの無駄使ひである。日本中の家庭が夜間不要の電燈を消す事に依つて日本の動力はどれ丈け浮いて來るかを考へて戴き度い。而して此の省かれた動力は諸種の機械を運轉する事も出來やうし、又は之を電氣化學工業に振り向ける事も出來やう。

聞く處に據れば、大戰中習志野に收容された獨逸の俘虜は、夕方散歩でもして居る時遙か彼方の自分達の室に電燈が無意味に輝いて居るのを見付けたが最後、突撃の稽古でもするかの如き疾驅を以て室内に跳び込み、さうして電燈を消した後に緩々と更に元の散歩に復つて居つたと謂ふ事である。日本人が同じ日本人の設てて居る會社を敵の樣に思つてワザと電氣の點け放しをして居るに較べて、彼等から見ればこれは又本統の敵國の財產であるのに！

議論の公平を期する爲め私は順序として、啻に電燈の使用者側計りを攻擊する事を止めて、鋒を彼の橫暴なる我國の電燈會社にも向けなければならぬ——私の住んで居る町の電燈會社などは料金の破格に不廉なこと、送電々壓が規定の半に達しなくて燭力の低いこと、故障の爲め送電の出來ない事が少くないこと、而も料金は送電したと同額を請求する事など目に餘る事が度々重なつ

て居る――處であるが、その方の事は今日の話に關係が無いから直ちに次の話に移ることにしよう。

水道の水の使ひ方の荒い事といつたら、それが教養の無い(併し小學校だけは終へて居る筈だ)女中達の直接使ふ處だけあつて素晴しいものだ。弁の開け放しも時々見受けられるが、さても水の使ひ方の荒さよ！　吾々の様に海に育つて艦を住家とした者には勿體なさが身に浸みて空恐ろしくなる。併し昔から我國には『金錢を湯水の如く使ふ』と云ふ譬がある位であるから、使ひ方の荒いのは湯水に附き物ではある。

世界大戰の爲め金物の値段が暴騰した頃の話である。造船工場の職工が繫留中の船に仕事に來た歸りに、携へて來た螺子や鋲類の殘りを工場へ返す手續の面倒さ――大した手續が要るわけでも無かつたが、それを還納する爲めに幾らか歸宅時刻が遲れるのは事實であつた――からしてそれ等の殘りを海中に投げ棄てる者が少く無かつた。

以上述べた様な事實をまのあたり見た所謂我國の識者は必ず次の様に議論を結ぶに違ひ無い。『勞働問題も普通選擧も週休制度も陪審法も日本では亦だ早い。民衆がもつと自覺して、勞働者

の頭でも何でも西洋の様に進歩しなければ駄目だ』

勞働問題や普通選擧や陪審法やは私の問題の外の事であるから、これに觸れる話は一切避け度いと思ふが、唯右に述べた識者の結論にはその根本に面白い理窟を含んで居る樣に思はれるから其事に就いて一通り私の所見を述べ度い。それは外でも無い、社會を改良するには、其組織だけを變へたのでは足り無い。社會を組織し運轉しつゝある處の各々の人間の改良は更に一層大切な事であると云ふ事だ。

所謂組織の改良とは何かと云へば、私が述べた電燈の例に就いて云へば、會社が各人の家にメートルを取り付ける事である。又人間の改良とは、家庭の主婦なり女中なりを教育して、電氣燈の附け放しが此の世の寶を溝に捨てるやうなものである事を覺らせる事である。また螺子や鋲類の如き金物を海中に投棄する話に就いて述べれば、使ひ殘りの品物を工場に還納する手續を簡易にして彼等の歸宅時刻に支障なき樣に取計らふ事は即組織の改良に外ならない。而して職工を教育して無意味の海中投棄は天意に背くものである事を知らしむるが即人間の改良である。

諺に『境遇は人を造り、人は又境遇を造る』と云ふ事がある。從つて組織の改良も人間の改良

と共に忽にす可からざるものである。例へば電氣燈の話で謂へば、メートルを設備するだけで此問題は殆んど解決するではないか。其處で吾々は組織と個人との兩方を改良して凡ての社會改良に從ふべきである。

であるから兩者の內孰れを重しとする事も出來無いが、今若し孰れがより根本的の改良かと謂うたならば私は『それは人間の造り替へである』と答へるであらう。組織の改良でさへ其人間が行ふのでは無いか。其又人間は制度や境遇に依つて左右される事はあるけれども。

さて問題に立ち歸つて、それなら個人の改良言ひ換へれば民衆の進步と自覺とは何に依つて得られるかと謂へば答は誠に易しい。卽國民教育——小學校教育——に依るのがそれの大本である、次ぎに小學校を出てからの社會の教育に負ふ所が少く無い。處が日本の小學教育は既に多くの人の氣付いて居る通り、たゞ文字を教へると云ふ事だけに非常な時と精力とを費して居る有樣である。社會の教育と云ふ內にも亦色々な類があるけれども、とりわけ新聞や雜誌や書籍等（殊に百科全書の樣なもの）に依る教育は仲々効果が淺く無い。處がそれ等は日本で熊公や八公やお鍋などの間に廣く讀まれて居るか。文字を易しくしない限り、又新聞や雜誌の値段を安くしない限り

それは覺束ない話だ。卽凡ての問題は唯一つの事卽文字をとり換へる事に依つて解決が付く。小學校の敎育を救ふのも文字をとり換へるのにある。讀み物を易しくするのも文字をとり換へるにある。書物の値段を安くするにはライノタイプの應用が與つて力多い。詰り『日本語をローマ字で』である。

五　間に合せの文字

旣に私は漢字の不都合な點を主として敎育上から論じた。物解りの好い讀者諸君は、敎育上の理由だけではや充分漢字廢止すべしの結論に到着せられたに違ひあるまい。併し諸君早まつてはいけない。斯樣に不都合な漢字でも、それが本來の性質上日本語に適して居るものであるならば、言ひ換へれば、日本語は性質上漢字で書く可きものであるならば吾々は尙一顧の價値があると認めてやらねばならないのである。然りその樣に日本語と切つても切れぬ緣があるならば、敎育上の困難なども或程度迄は我慢しなければなるまい。そこで私は第二に此問題の吟味に取り掛ることに仕度い。

話は再び脇道にはいるが、明治四十二年――私が少尉候補生の時――私は亡くなられた伊地知彦次郎少將に率ゐられて、軍艦阿蘇、宗谷で米國西岸の見物をした。始めて外國を見た忘れる事の出來無い數多い印象の中で、今だに忘れる事が出來無いものが一つある。それは在米日本人の言葉である。

今でこそ米國の西海岸には我軍艦旗の飜る事などは敢て珍しくも無いが、此時は十何年振りかで始めて、而も排日問題の八釜しい眞最中であつたから、在留日本人の我練習艦隊に對する歡迎も亦素晴らしいものであつた。殊に廣島縣人會とか、和歌山縣人會とか謂ふ在留邦人の團體が同鄉出身候補生に對する特殊の歡迎張り――廣島縣出身候補生は金側時計を、山口縣のは凡てカフス釦を又和歌山縣は萬年筆を贈られたと謂つた樣な――は出稼人の少い他の地方の出身者を羨ました事夥しい。私は半ば山口縣出身だと云ふので十四金のカフス釦を寄贈された――それは今でも私の軍服の袖口で燦然たる光輝を放つて居る！――し又半ば東京府出身だと謂ふので東京出身の日本人から珍らしい品物を贈られた。別に出稼人らしい出稼人を持たないので贈物の光榮に浴さなかつた或北國出身の一候補生が呟いた。『日本人はこれだから駄目だ。海外へ出ても未だ山口

縣だの廣島縣だのとケチな事を云うて居る。これでは何時まで經つても日本人の海外發展は覺束か無い』と。

思はず話が横道に深入りしたが、カフス釦などは別に國字問題に關係は無い。さて吾々は此等の在留邦人の案内で度々賑やかな大通りや、公園や、寄席や、ホテルや三越紛ひの大建築物などを赤毛布式に見物したものだ。處がどうも腑に落ちぬのは此等案内役たる在留邦人の言葉である。案内者の一人は私達を捉へて次の樣な事を云ふ。

『みいら、たいむが無いけん、でんかあで行く』

右の内『無いけん』と云ふのは廣島から山口邊へかけてのなまりである事は既に吾々三ケ年の江田島生活で充分心得て居る處であるが、さて一寸判らぬのは『みいら』『たいむ』及『でんかあ』である。

併し乍らそれも始の間の事、艦隊が漸次ロスアンゼルスからシスコ、タコマ、シヤトルと北上するに連れて私共も漸く場數を踏んで、自然の間に此等の言葉の意味を會得して仕舞つたのである。今それを此處で日本に居乍らにして諸君に漏らさうと言ふのである。

みいら　卽『me等』…………………私達
たいむ　『time』…………………時間
でんかあ卽『電car』…… ……………電車

これ以來艦の候補生室ではこの様な言葉が大流行を來した事は云ふ迄も無い。吾々は今だに在米邦人のことを『ゆうら、みいら（you等、me等）』と呼んで居る次第である。

話は又違ふが、大正四年八月十七日の大阪毎日新聞には金子直吉といふ方の『國字、國文の改良に就いて』と云ふ議論が出て居つた。金子氏の說は要領に於て、何の事は無い、『右のゆうら、みいら』式に似たものであるが、それよりも先づ次の例を見られ度い。

フクザワ Professor idiograph の teaching.
Japan にかなの idiograph ありながら China-chracter を mix use は very inconvenience なれども…………

卽主要語たる熟語には英語を使ひ、それの讀み方には第一法としては英語の傍に附けた假名の通り、卽日本語の訓の通りに、又第二法としては英語の發音(音)通りにプロフエッサー、イディチグ

ラフ等と讀ませ樣とするのであつて、金子氏の案では其孰れの讀み方をも許さうと云ふのである。

亞米利加在留の日本人の樣に周圍を英語國氏で取卷かれて居る者や、又は專門の學問をする或る特別な人達が、それに關係した問題の時に——少數の同臭味の學者や學生を對手として——話の中に英語を挿むと謂ふ事は別段咎め立てをする程の事では無いが、全日本人を對手として、全日本人に使はせる日本文（金子案では或場合は日本字、或場合は日本語）の改良案として、金子氏の樣な遣り口が正當なものであるかどうか、又此の樣な改革を成し遂げる見込みがあるかどうかは、恐らくは賢明なる讀者諸君に對して說明の限りではあるまい。尙金子氏の樣に日本語の中に外國語を生の儘で採り混ぜる事を主張される方に正金銀行の時枝誠之氏などが居られるから、私は大に諸君の戒心と注意とを促す爲めに日本語の中に外國語を採り混ぜる事に就いて他日大に論ずる處があるであらう。

それはそれとして、私は今漸く此處で本論に筆を進める事が出來た樣に思ふ。多くの日本人は生れ落ちると直ぐ樣自分の名前を漢字で書き記されて役場に屆けて仕舞はれた樣に、もともと漢字だらけの世の中に育つたのである結果、『日本語は漢字で書くのが果して正當なのであるかどう

か？』などと云ふ疑問すら起して居るまいと思はれるが、讀者諸君だけは此先入的思想を拂ひ落してよく私の述べる處に耳を傾けて戴き度い。抑漢字は誰も知る通り元來支那語を寫す爲の支那の文字である。その支那文字を日本が借用に及んだのである。而も其の使ひみちが今日では、輸入當時の樣に日本音を寫すと云ふ行き方で無くて、之を形象文字として取扱つて居る次第である。例へば『猫』と云ふ支那字には『ネコ』と謂ふ響はもともと無かつたのを、我國で『ネコ』と讀む樣な約束を作つたのである。さうして、それを音で『ベウ』と讀むと云ふのは支那音（今の支那音とは一致しない事もある）の事であり、それを訓で『ネコ』と讀むのは『ベウ』と謂ふ支那語の日本譯であるから、結局前に掲げた金子式と同じ遣り方に外ならない。倘諄く云へば『ネコ』と云ふ日本語を我國で漢字で『猫』と書くのは日本語の『ネコ』に相當する支那語を研究し、其支那語に對する支那字が猫であつたと云ふ行き方である。而してそれの反對に吾々が猫と云ふ漢字を見て『ネコ』と讀むのは、『猫』（と云ふ支那字に對する支那語が『ベウ』であり、其『ベウ』と云ふ支那語）に相當する日本譯が『ネコ』である事を捜して『ネコ』と讀むのである。

然るに、下世話にも『所變れば品變る、難波の蘆は伊勢の濱荻』と謂ふ位であるから、支那と日本とは凡ての事物が必ずしも同一で無い。卽國民の思想も、其所に住む生物の種類も、又國民の使ふ道具や機械も彼と我とは必ずしも一致して居ない。從つてそれ等を表はす處の言葉に就いても亦同樣の事が云へる譯である。

旣に述べた通り、これ迄我國が國語を書き表はす爲めにも、將又書いた物を讀む上にも此の樣な複雜なる手續をして居るから、事實の上に於いて左記の樣な各種の場合が起つて來てそれが爲め吾々の日常生活に色々な不都合を起こす原因となりつゝある。(因に私は今主に漢字の攻擊をして居る次第であるが、前に揭げた金子式の遣り方も其主義に於いては漢字と同じ行き方を採つて居るから、左記に示す樣な不都合、不合理、不徹底は矢張り免れ得ない。)

(イ)或る日本語に相當する支那語が唯一つあり、其支那語に相當する日本語が唯一つあると謂ふ場合卽式で示せば先づ次の樣にでも表はす可きもの

(或る日本語)＝(或る支那語)

(ロ)或る日本語に相當する支那語が全く無い場合

(或る日本語に當る支那語)＝〇

(ハ)或る日本語に相當する支那語が二つ以上ある場合

(或る日本語)＜(支那語)

(ニ)右と反對に或る支那語に相當する日本語が二つ以上ある場合

(日本語)＞(或る支那語)

右の内(イ)項の場合には別に差支が起ら無いが(ロ)、(ハ)、(ニ)の場合には色々な不都合が起つて來る。第一に(ロ)の様な場合卽或る日本語に相當する支那語が丁度無い場合にはその日本語の書きやうが無い。

例へは、ワカル、ハイル、ハヤル、キマル、コナレル、スケル、アルク、アヤフヤ、アブナイ、ヤサシイ等の立派な日本語を書き表す事が出來無い。之等の語に對して現在漢字でどう書いて居るかと云うと、別に名案も浮ばないから仕方が無しに「分る(判る)」、「定まる」、「這入る」、「流行する」、「消化する」、「危い(浮雲い)」の様な無理な書き方をして、先づ差當り當座の間に合はせを行つて居る。殊に、たゞ適當な漢字が無いと云ふ丈の理由で「ハヤル」、「コナレル」のやう

なよい本來の日本語を捨てて「流行（りうかう）する」、「消化（せうか）する」のやうな外來語をとり入れねばならぬ漢字の仕組が不都合極まるものであると云ふ事は旣に私が八月號の本誌で述べた處である。

其內でも滑稽なのは彼の宛て字である。「サスガ」、「ヤタラ」、「ヤニハ」、「マジメ」、「トカク」、「メデタイ」等の日本語に對してもそれに當る支那語が見當らぬから我國で勝手に流石、矢鱈、矢庭、眞面目、兎角、目出度等の出鱈目な宛て字を作つて、之も應急の不便を凌いで居る。

宛て字の內で最も極端なのは日本の地名人名を漢字で表はしたものであるが、それ等の大部分は全く遊戲半分に作られたので無ければ謎である。

地名では、相模の釋迦牟尼佛（ミクルベ）、羽後の言語同斷（アクラ）（これをテクラと讀むのこそ言語道斷である）、常陸の月出里（スダチ）、下總の行行林（オドリバヤシ）、常陸の木葉下（アボケ）、近江の不知哉（イザラ）、甲斐の左右口（ウバクチ）と藥袋（ミナヘ）、越中の眼目（サツクワ）、豐後の夙連（ユケヒ）、下野の大步（ハゴ）と巴波（ウヅマ）、上總の小食土（ヤサシド）、美作の小童谷（ヒヂヤ）、羽前の文下（ホウダシ）と及位（ノゾキ）と左澤（アテラサハ）、河內と出雲の日下（クサカ）、薩摩の水流（ツル）、備中の有漢（ウマ）、筑前の目尾（シヤカノヲ）、伯耆の車尾（クツモ）、備前の紙工（シトリ）、陸奧の善知鳥（ウトウ）、出雲の朱明（ホノカ）等殆んど煩に堪えない程可笑な宛て字があるが最も奇拔なのは山城の一口（イモアラヒ）

陸奥の十三(トサ)

遠江の十五七百(キイナゴ)

出雲の十六島(ウソブルイ)

陸前の十八成(ククナリ)

下野の十八女(ワカイロ)

上總の二十五里(ツイヒナ)

羽前の二十六本(トドロキ)

能登の廿九日(ヒヅメ)

讃岐、越前、能登の九十九(ツクモ)

などの類である。

甚だくどいやうであるが、漢字の不都合な事を讀者諸君に徹底的に了解して戴く爲めに、私は引續いて外國の人名や地名の書き方に就き一言せねばならぬ。

亞米利加、佛蘭西、伊太利等の宛て字はまだしも、それを簡單にして或は亞米利加(アメリカ)を米國(べいこく)と呼

ぶが如きは殆んど意味をなさない。佛語が佛蘭西語の事であるか佛語（ぶつご）であるか解らなかつたりするやうなフツゴな事もある。（併しこの話は寧ろ後段述べる（二）項の例とする方が適切である）晩香坡（バンクーバー）、甲谷陀（カルカッタ）、伯林（ベルリン）、桑港（サンフランシスコ）、紐育（ニューヨーク）、黑山國（モンテネグロ）、牛津（オックスフォード）、劍橋（ケンブリッヂ）（これは丸で電車（デンカー）式だ！）馬耳塞（マルセーユ）（馬の耳に念佛だとか、馬耳東風だとか云ふ言葉もあるが、之は又念のいつた話で、その又馬の耳に栓（せん）を挿した様な地名である！）や、維遜（ウイルソン）、黑鳩公（クロパトキン）、冷忍（レーニン）の類に至つては殆んど文字の遊戯である。

次に、第二の不都合は（ハ）項の場合である。即ち或る日本語に相當する支那語が二つ以上ある場合には、支那語でそれ等の内、どれを使ふ場合に當つて居るかに從つて（日本語が一つであるに拘らず）書き分けをしなければならない。

例へば、唯一つの日本語の『みる』や『きく』や『まつ』などに對して「視る」、「見る」、「觀る」、「覽る」、「看る」、「睹る」、「覩る」や「聞く」、「聽く」や「待つ」、「俟つ」、「竢つ」、「須つ」などがある類である。

之等の書き分けは私共が小學校以來殊に多大の苦心をして敎はつて來たのであるが、私などに

は今だに之等の書き分けの方則がよく呑み込め無い。

何故日本語の『きく』なら『きく』を表はす支那の文字が幾つもあるかと云ふに、言ふ迄も無く、この日本語に相當する支那語が幾つもあるからである。從つてそれ等の支那語を表はす支那字がそれ〴〵「聞」、「聽」に分れて居るのは當然な話である。而して日本語の『きく』に對して支那語が何故に二つもあるのかと云ふに、此の場合には支那人の思想が日本人のそれよりも複雜である爲めに――言ひ換へれば、日本人の物のきゝ方が支那人程微妙で無かつたのだ――日本では唯一つしか出來なかつた語に對して支那では二つも出來た次第である。

右の樣な譯であるから、從つて吾々が學校で日本語の文章を書く場合に（支那の文章を書く場合は別）之等の書き分けを骨を折つて習つたのは實に馬鹿氣た無用の努力であつたのだ。而も今日の小學校、中學校、女學校は尙それを繰り返して居る。日本語は（字を幾通りに換へても）『きく』なら『きく』一つである。唯それに對する支那の語が用途に從つて二つの場合を區別するだけの事に過ぎない。支那の語では、それが丸で違ふ語であるからそれを書き示す字も違ふのが當り前であるが、日本語は一つであるから一つにするのが當然である。勿論書き分けをして置けば、

夫が支那の語の孰れに當るかを示して置くだけ意味の區別が出來て居るから、只『きく』一つよりは意味が精密になる利益はあるが、それは日本の語以外の事で示された區別であつて日本語を書くと云ふ點では要ら無い事である。

第三の不都合は、(ハ)項の場合と反對に、或る支那語に對する日本語が二つ以上ある時には、讀み方が判らないと云ふ事である。

例へば、『こまかい』と讀んで貰ふ積りで「細い」と書くと『ほそい』と讀まれたり、「周り」が『ぐるり』とも『まわり』とも讀まれ、又「止める」が『とめる』か『やめる』か判ら無かつたりするのは此部類に屬する。尙此の様の例は(ハ)項の場合と同じく澤山あつて、

「弾いて」　ひいて、はぢいて、
「側」　そば、わき、かたはら、
「調へる」　ととのへる、しらべる、
「急く」　いそぐ、せく、
「上る」　あがる、のぼる、

「下る」　をりる、くだる、さがる、

「斷つて」　たつて、ことわつて、

「後」　あと、のち、うしろ、

「前」　さき、まへ、

「宛」　あて、づつ、

などは共一部分に過ぎ無い。

之等の場合、日本語では『ほそい』と『こまかい』或は『とめる』と『やめる』のやうに二つ宛全く違つた語があるのに、何故それに當る支那語が一つ宛しか無い――從つてその支那語を表す支那字が細、止の一つ宛しかない――のであるかと謂ふに、これは丁度『きく』の場合とは正反對に、此度は支那人の思想の方が日本人のよりも單純なので、詰り支那人は『ほそい』と『こまかい』とを區別するやうな、そんな微妙な觀念を持たないからである。手つ取り早く謂へば(ハ)項の場合は支那の方が思想――從つて言語――が豐富であり(ニ)項の場合は日本の方が却つて進歩して居ると謂ふ事になるのだ。

私は此の處で一言諸君に注意せねばならぬ事がある。學者往々にして日本語の貧弱なことを嘆き、英佛獨語などの豐富なことを述べる事があるが、この說は或る特別な思想に就いては言ひ得るけれども、叉別の方面の思想を表はす事になるとそれが逆になる事があるから、決して一槪に論斷する譯には行か無い。彼の英文和譯に從事する人が常に日本語の貧弱なのを憾むと同時に諸君が和文英譯をする場合に常に英語の語數の足らざるを託つなどは此邊の消息をよく物語つて居る。

因に、外國語でヤレ船は女性の名詞、机は男性、鉛筆は何性などと云ふ事があつて色々とそれを區別して居るが日本語に此の區別が無いのも、今孰れを優れりとするかは暫く別として、日本人には机や鉛筆に迄も性的區別を付けるやうな觀念が全く無いからで、そんな事はどうでも好いのである。それと反對に外國語の言ひ廻し方に日本語のやうな敬語が少いのは、外國人には上を敬ふと云ふ觀念が少いから從つて其言葉も出來なかつただけの話で、所詮は皆思想や知識の相違が根本の問題である。

田中舘博士曰く『本來日本語の素質は立派なものであつて——たゞ漢字が渡つて來た爲めに

變な漢語が出來たのだ――例へば「とる」が「とらる」「とらす」（口語では「とる」が「とられる」「とらせる」）のやうな巧妙な語尾の變化で文法上所謂受身、可能、使役の場合を表はして居る。又人に依つては日本語に單數、複數の區別が無いことを批難するものがあるが、數の觀念を示す必要のない場合でも是非此區別をせねばならぬ處の歐米語の仕組は吾々にとつて煩しく且意味の無いことである。而もそれの必要のある場合には日本語ではチャント

人々、節々、島々、隅々、所々、

と、云ふやうに名詞を重ねて、又は

華族がた、親たち、女ども、子供ら、

のやうに名詞の下に「がた」「たち」「ども」「ら」などを附けて之に應じて居る。尙もつと數學的に數量を示し度い時には

五枚の紙、九人の男、筆三本、薪一わ、

等のやうに變通自在にそれ等を表はし得る』と。

それはそれとして再び前の話に戻つて、日本語に於いては『ほそい』と『こまかい』とが全く

別々の言葉であるのに、只支那と云ふ外國に於いてそれが「細」一つになつて居るばつかりの理由で、日本語の書き方で區別が出來無いなどに至つては主客顚倒と云はうか何と云はうか沙汰の限りである。

以上述べただけでも不都合の極みであるのに、かてて加へて、我國では漢字を昔の支那の音の儘に讀む事を許して居るから前に掲げた(イ)項の最も簡單な場合でさへ(ニ)の場合と同じ事になつて、書いてある事が確かに讀めなかつたり讀み誤られたりする事が起る。或人が『家の間數(マカズ)を測つて呉れ』と云ふ注文を受けたのに對して間口何間、奥行何間の間數(ケンスウ)を測つて報告したと云ふ間違も時にとつては只の笑ひ話で濟まされ無い事にもなり得る。尚、見物と見物、表と表、平家と平家などの類も控へて居る。

話の種

林家受付

東大教授文學博士林博太郎伯が今年の春洋行の時、見送人の便宜を計つて東京驛に「林家受付」と書いた立て札を建てた處が、通りがゝりの粗忽者がそれを見て

『はゝあ、あの男が赤坂の林家(はやしや)の亭主かい？　それにしても立派な男だれ……』

尙最後に殘つて居る今一つの不都合を述べて私は本章の結論に到り度いと考へる。それは卽、右に述べた支那の音が更に又吳音、漢音、唐音に分れて居る事である。例へば同じ音讀でも「變化」を『へんくわ』と讀む時と『へんげ』と讀む時とに依つて丸で違ふ意味の語になつて仕舞ふのである。

殊に又前記(ロ)、(ハ)、(ニ)の場合と音讀(而も三種の音がある)の場合とが色々に組合つて、複雜な場合が出來るから、吾々の日常生活の不都合は右に述べた總計に數倍する理窟である。

この樣に吟味して見れば、漢字は啻に兒童敎育の上から或は國民の効能率を發揮する上から見て不都合である計りで無く、讀者諸君は明かにそれが日本語を書き表はす可く本來不適當な代物(しろもの)であることを看取されたであらう。要するに吾々はもともと、表はす可からざるの文字を持つて來て日本語を表はして居つた次第なのである。而して表はす可からざるの文字であるが故に色々の不都合や不都合理が生ずることとは知りつゝも、先づ當座の間に合はせには大した差支も無からうと云ふので今日に及んで居るのだ。宛も彼の『茶腹も一時』が辛うじて當座の餓を凌いで居

るかの如くに。

話の種

議會の大問題『藏原事件』

私の同僚に海軍大尉内藤淳、同草川淳、及海軍中尉磯部淳と云ふ三人の海軍士官がある。此例を見ても如何に漢字が日本語を寫すのに不適當な代物であるかが窺はれる。日本人の姓名すら書き表はし得無い文字が日本の國字だなどとは戯談にも程がある。

處が一部の無神經なお目出度い連中は『そんな事はどちらでもよい。淳だつて淳だつてどちらにでも讀めるのだから構はないではないか』と云ふ。元來固有名詞が『すなほ』でも『じゆん』でも『きよし』でも何れでも構はぬと云ふ法は無いが、それよりも次の藏原代議士の話でも聞いて其爪の垢でも煎じて呑んだらよからう。

第何議會の出來事であつたか、時の陸軍大臣寺内將軍は衆議院議員藏原惟郭氏を『ぞうはら君』と呼んだので端無くも問題となり、藏原氏は金時の樣になつて

『ひとをゾウハラとは甚だ怪しからぬ。我輩がゾウハラなら貴樣はテラナイだッ！』

此時寺内大臣の態度は如何に？　と云ふに、只平詫りに詫る外は無かつたのは惜しき話の限りであつた。國字問題の研究は國務大臣にとつても亦大切である！

六　間に合はせ物の日本の現狀

漢字が日本語を寫すのに間に合はせ物であると云ふ事は前章で述べた。而して假名も亦同じ様に間に合はせ的のものである事は追て述べる事とするが、併し諸君は熟々我國の現狀を觀察する事に依つて、何一つ間に合はせ物で無い物は無いと感ずる程の色々な事實を發見されるであらう。これは日本が永遠の使命を持つて居ると信じて居る吾々の信念とは隨分懸け離れた現實である。

先づ吾々の生活に一番手近な物から調査して見ると、日本服殊に婦人の衣服の如きは、半襟と云ひ、直ぐに摩り切れる裾と云ひ、隨分耐久力に乏しい假製品である。殊に履物となると、足駄とさうして爪革！

建物でも同じ事、神社佛閣のやうな千古に傳ふ可き藝術品でさへ永持ちのするのは少い。長野の善光寺の大伽藍も一朝火を失すると烏有に歸して仕舞ふ（善光寺の歷史を見よ）し、鎭守の森はいつも乍らの緑を呈して居るが八幡様の建物は動もすれば幾年かの雨風に朽ち果てる事を免れ

無い。白木作りの清々しさを誇る我國の神社を今邊に鐵筋コンクリートに改める事を申し出したら愚に非れば狂の類であるが、それでも畏くも明治神宮の神燈は石造りである。今度新に落成した靖國神社の大鳥居は金屬製となつた。佛敎のお寺も印度、シヤム、ビルマにあるパゴタは日本の様な弱々しい作りでは無い。

ずつと下つて吾々の住居と來たら、間に合はせ物の親方であらう。『紙の家』とは西洋人の譬であるが、この障子と云ふ奴が又恐ろしく永持のしない代物であつて、宿屋等では指先きに唾を付けて、往々隣室を覗くための孔を開ける者さへある。子供の多い家では腰の方は大抵孔だらけになつて居る。故に子供持ちは通例家主から敬遠される。

又『疊と何とやらは新らしいに限る』と云ふ俚諺が明に證明して居る通り、この疊が又其場限りの植物性のものだ。其他垣根でも板塀でも永持ちのするものは至つて少い。

近頃東京の道路が悪いと云ふので大層やかましい問題になつて居る。『天氣の好い時は砂漠の砂。暴らしのやう、又雨降りの日は泥海の様な路になつて、船で無ければ渡れ無い』などと極端な事を云ふ西洋人さへある。西洋人の悪口はどうでも好いとして、一番困るのは日本人自身である。

其又泥濘を泥除けと云ふ世界の何處の文明國へ行つたつて見られ無い發明品をブラ下げて走つて居る自動車は實に天下の壯觀である。足駄の爪革と自動車の泥除け！　爪革の護謨紐が切れて人前でトンダ恥曝しをする事があるのに、泥除けの方は車といつしよにダルになつて廻轉して居るのさへある！

吾々の國字問題でも――漢字制限案がまた間に合はせ案である事は既に八月號で述べた――衣服や住居の事でも、社會の設備にした處で凡てが斯の樣に間に合はせになつて居て、日本ではそれ等を根本的に改良すると云ふ事がなされて居ないのは何故か。或人は日本が貧乏だからであると云ふ。併し少くとも是等の問題では、永い間の算盤勘定から謂へば間に合はせ物が詰りは非常な損になると云ふ事は否定出來無い。此理窟が判つて居乍ら、日本人が間に合はせ物で我慢して居ると云ふのは日本人の性質に依るのであらう。それなら日本人がどうして間に合はせの性質を持つ樣になつたかと云ふのに、私の見る處では次の二つに依るらしく思はれる。

(a)佛教の影響を受けて『此の世は假りの物、うつし世は暫く腰掛けに來て居る處で　本統に味のあるのは死んでから』とと云ふ考があるから、常々此の世の不滿足や不充分と謂ふ事に滿足し

て——寧ろ諦めて——居る事。

(b)日本は外國に較べて恐ろしい天然の影響を受ける事が多い。地震、雷、火事及親父の外に毎年秋になると此國を襲つて來る處の暴風や洪水やさては津浪などは日本人の永年に亘る計畫と勞苦との施設とを根こそぎに覆して仕舞ふ。そこで日本人は永い間の經驗からして、この様な先きざきを見越した計畫をしても駄目だと云ふ事をよく心得て仕舞つた。

かてて加へて、近時の功利的思潮の流行は、國民をして自分自身の事だけしか考へ無いにしてしまつた。少くとも自分の生きてゐる間の事だけしか考へ無い者が多い。聞けば植林事業などは日本で最も流行し難いものの一つだとの事である。

日本の現狀がいくら間に合はせであつても、日本の國と民族とは決して其場限りの線香花火であつてはならない。永遠の使命を持つて居る我國がいつまでも間に合はせでは濟まされ無い。吾々が此世に生れて來たのは何の爲めであるかと云ふ事はよく判ら無いが、吾々が日本に生れたからには吾々の生きた社會卽日本を吾々が祖先から受取つた時よりも一層立派なもの——住みよく學びよい世の中——にして次の國民に引き渡すと云ふ事が吾々のこの世に對する一番大きな務め

ではあるまいか。

七　國語の正當健全な發達

扨これで愈々漢字のやうな形象文字は教育の不經濟を省くと云ふ點から見ても、又日本語を寫すと云ふ方面から謂うても不都合極まるものであると云ふ事に議論が定まつたが、形象文字がいけないとすれば殘る處は日本人の口で云ひ耳で聞く處の音卽ひゞきを表す音文字である。

音文字はローマ字にしても假名にしても、漢字の樣に字數が多く無いから教育上漢字のやうに不都合な事が無い。又言葉のひゞきの通りに寫すのであるから、私が第五章で述べたやうな不都合、不合理、不徹底が絕對的に無い（尤も假名には幾分かある）。

此處迄述べて來ると讀者諸君の多くは多分判を捺したやうに、次の疑問を發せられるに相違ない

『ローマ字や假名のやうな音文字は成程論者の云ふやうな利點もあるが、又缺點も少くない。第一形象文字のやうに花、鼻、初や原、腹の區別が書き表はせない。』

この疑に對しては私は先づ次の様に答へたい。

『それは多くの場合、話や文章の前後の關係や、場合々々で區別が判る。今草花の事をかいてある文章の中で Hana とあつたら誰だつて鼻と間違へる事はあるまい』

そうすると頭の好い讀者は引續いて反問されるであらう。

『多くの場合はそれでもよからうが、百回の內たとへ一回でも不完全なことがあつては矢張り間に合はせたるを免れない。例へば今顏の事をかいてある文章の中で Hana no Kanbase とあつた場合には誰でも一度は鼻の事を考へるに違ひ無い』

そこで私は第二の答辯を申し述べるであらう。

『若し讀者をしてその様な疑問を起させる處がある場合には吾々は左の様に音の揚げ下げを利用して符號をつける事に依つて區別する』

Haná（花）, Hana（鼻）, Hána（初）

Hará（腹）, Hára（原）

すると八月號の本誌で既に豫備知識を貯へて居られる讀者はこの答辯に滿足する事無く更に突

き込んで尋ねられるに違ひない。

『花、鼻、初や原、腹の例はそれでは撤回するが、公爵と侯爵、議院と議員などの漢語は音の揚げ下げも同じだから符號の付けやうもあるまい』

さてこれからが愈々本論である。

今假りに私が太平洋會議の全權の一人として樽俎折衝其宜しきを得大に國權を伸張し國利民福を計る事が出來た爲め上級の華族に列するの光榮を得たと想像して見るのも惡くない。すると其事を傳へ聞いた私の舊友は菓子折の一つでもブラ下げてキット私を訪れるに違ひ無い——西鄉從道侯が、華族に列せられた時の述懷談に『華族になつて別に大して變つた事も無いが、只親類がいいい急に殖えたよ』と云ふ話がある。

『君は今度華族に列せられたさうだが、華族は全體何爵か。伯爵か子爵かね?』

すると私は鼻をうごめかし乍ら、グット反り身になつていとも應揚に答へるであらう。

『ウン、こうしやくだよ』

扨問題は此處だ。これでは私の友達には私が公爵であるか將た侯爵であるかサッパリ見當が付

くまい。而もこの事は啻に私の友達に見當が付か無い計りで無く、どんなエライ日本人――文學博士でも――を連れて來たつて決して解りつこはない。つまりこの『こうしやく』と云ふ言葉は日本人同志に通じ無い言葉なのだ。凡ての日本人に通じないやうな言葉は果して日本語であらうか？　少くともそれは正當なる日本語ではありやうが無い。

宮内省邊りの實際を見ても式部官が五爵の席を指定する場合には次のやうに云つて居るとの事である。

『ソウロウコウシヤクの方(かた)（侯は候と違ふのだけれども）はあちらへ、キミコウシヤクの方はこちらへ』

即此場合にはコウシヤクと云ふ言葉は忽ち權威を失墜して仕舞つて、キミコウシヤク及ソウロウコウシヤクに取つて代はられたのである。

既に日本人同志に通じ無い――凡ての日本人に判らない――言葉は日本語で無いと云ふ事が承認されたならば、吾々の公爵と侯爵との書き分け方に對する答辯は極めて簡單である。吾々は元來「日本語をローマ字で書くこと」を研究して居るのであるから、日本語で無いやうなものは書

き方は研究の限りでは無い。今少しく親切丁寧な物の言ひ方をすれば、寫す可き言葉が既に不完全であつて日本人に通じないのは、それは言葉の側の責任である。日本人に通じない言葉をローマ字書きにして判ら無いと云ふのは寧ろ當然な事であつて、それは文字其物に缺點があるからでは無い。

それなら何故に斯くの如き不都合な言葉が日本に澤山出來たかと云ふに（八月號の本誌參照）、それは我國が漢字を使ふからである。書いたものを見た場合には區別が付くと云ふ漢字を使ふからこそ人々は此等の言葉を整理しない計りでなく、新しく惡い言葉がドシ〳〵製造されつゝあると云ふ事に就いては既に八月號で述べた。卽漢字を日常使用の文字として居る結果、我國は第三に日本語の正當健全なる發達を妨げられつゝある。而してそれを救ふ爲めにも日本がローマ字や假名のやうな音文字を採用せねばならぬ事に就いても私は前號の本誌上で詳述したから今それを繰り返さない。

八　むすび

以上述べた事の要領をかいつまんで見れば、

第一、教育の經濟と云ふ點から見て、漢字は頗る宜しく無い。

第二、日本語を書き表はすと云ふ點から見ても、本來漢字は不適當なものである。卽國字としての任務を完全に果して居無い。

第三、漢字を使ふ爲めによい日本語が滅びると共に、書いたものを見なければ判ら無いやうな語が殖ゑる。言ひ換へれば日本語の正當健全なる發達を計る爲めには是非漢字のやうな形象文字を捨てねばならない。

第四、第一の弊害を救ふには日本語を書く方法を簡單にする事に依つて、第二及第三の缺點は日本人の口で云ひ耳で聞く處の音（ひゞき）を寫す處の文字を採用する事に依つて達成される。これ卽ローマ字國字論の起る根本原理に外ならない。

國字改良の原理は勿論これで盡きたのでは無い。漢字と國民思想殊に儒教との關係、ローマ字採用に伴ふ外國語との交涉、日本語の世界的發展、文明的諸機械と國字問題、二種の音文字——ローマ字と假名——との比較、各種ローマ字綴り方の問題等に亘つて更に詳細なる攻究を要する

のであるが、私は讀者の倦怠を虞れて此處に一先づ筆を擱く事とし、他の機會を俟つて逐次それ等の問題に論及したいと考へて居る。終りに當つて吾々の主張する處のローマ字(日本式綴り方)の短い見本文を左に掲げて諸君の參考とし併せて諸君の疑問を喚起するの材料に供し度いと考へる。(中央公論大正十年十月號)

Hanasi no Tane.

Midu no Kawa to Hone.

Rômazi no **daikiraina** aru Kangakusya ga aru Atumari de Kanzi no Kônô wo nobetatemasita. "'日' to '月' to wo awaseta no ga *akarui* to nari, '清' (*Midu no aoi* no) ga *kiyoi* to naru no mo omosiroi ga, '波' sunawati 'Midu no Kawa' ga *Nami* to naru nado wa zituni Rikutu ni kanatte iru. Konaida aru Kaigun-sikwan no Hanasi ni, Aranami no tokini itiban heikina no wa Senkôtei da to iu koto de aru ga, kore sunawati *Nami* ga 'Midu no Kawa' de aru rippana Syôko dewa nai ka!"

Suauto Kikite no naka kaaa tondemonai koto wa tuduneru mono ga dete

kimasita.

"Imano Senkôtei no Hanasi de, '波' ga 'Midu no Kawa' de aru koto wa yoku wakarimasita ga, tugini '滑' (nameraka) ga 'Midu no Hone' de aru to iu Wake wo osiete kudasai!"

Oyakorosi to Sinsetu to no Kwankei.

Kore wa Môa-gakkô de kiita Hanasi de aru ga, Kanzi no Kyôiku wa Osi ni taisite kotoni mudukasii to iu. Tatoeba, '親' to wa Titihaha no koto de ari, mata '切' to wa *ki wo kiru, Hara wo kiru* nado no *kiru* to iu Imi de aru koto wo osieta atode, '親切' to iu Mozi ni dekuwasita tokini makotoni komaru. "Titihaha wo kiru" sunawati "Oyakorosi" to iu koto ga rippana Nippon no Dôtoku de aru towa dôsite Gatten ga dekiyô zo!

外國語のさばりこみ

――附日本語の世界的發展――

一　讀者からの反駁論

嘗て私は中央公論誌上で先づ、野郎事大で自主的精神に乏しい日本國民の一部が必要の程度を超えて外國語を濫用しつゝある事に就いて讀者諸君の警戒を促し――此點で彼等は支那人や朝鮮人の事大思想を笑ふ資格はありません――續いて、準外國語とも謂ふ可き漢語の濫用は我國民が漢字に對する執着を捨て無い限り之を匡正する事が出來無いと論じ、最後にそれを救濟するのには實にローマ字や假名の様な音文字に依るのが一番有効な方法であると議論を結びました。

處が其後此議論に對して東京の杉崎（假名）と云ふ方から私は次の様な意味の長い手紙を受取りました。

『（前略）私は八月號の中央公論に掲げられた「國語國字問題に關する一考察」と謂ふ論文を多大の共鳴を持ち、有益なる教示を受けつゝ拜讀したのです。殊に「日本人が日本語を捨てると謂ふ事は日本人であると謂ふ事を捨てる樣なものだ。吳々も斷つて置くが、我國は英國の殖民地でも米國の屬國でも無い」及「日本人の事大思想から起る處の惡い現象で云々」と云ふ邊、御識見の牢固卓越せる、拍手喝采を禁じ得なかつたのであります。然るに、然るに思はざりき其末段に至つて私は背負投を喰つたのです。私は貴君が事大思想を痛撃され乍ら、自ら遂に事大思想に囚はれ、英米の殖民地の人民となられて仕舞つた事を遺憾に存じます。（中略）貴君が、國字をローマ字に改めれば根本的に改まると思はれるのこそ根本的謬見です。何となれば、

（一）日本が漢字を輸入した爲めに「行」の字に十色も讀み方が出來たり、「氷枕（こほりまくら）」を「ひやうちん」と發音するやうな思想が起つたり或は同音異義の漢語が新たに作られたりするのと同樣に、ローマ字を國字とする事に依つて日本の言語上に如何なる變化を招來するでありませうか？　而も方今世界に最も隆盛を極むる英米の文字を其儘日本に移植せんとする事大思想に至つては曩昔最も旺盛を極めた支那の文字を其儘移殖した事大思想と何等異る所はありません。

（二）文化の程度高く、言語の豐富なる英米の國語に於てすら同一系統の文字を有する他の國より輸入した處の新語が綴りも發音も其儘使用せられ、英米本來の綴字發音に依つては解し得ないものが許多混入して居るのは如何なる理由に依つて然るのでせうか？　他日「ローマ字國」になつた日本が――英米に比して言語の豐富ならざる日本が――英米の新語を英國式に、發音のみならず綴字をも其儘輸入し來つてローマ字綴の中に混淆使用するに至るは寸毫の疑もありません。現今ですら「月給取の組合」を salarymen's union と改稱する位であるのに、文字迄もローマ字に換へたならば、日本語は遂に英語化されて其影をだに止め無い樣になる時期が來はしまいか？』

ローマ字に就いて此種の疑を懷いて居る人は恐らくは論者一人ではありますまい。彼の熱心な平假名縱書き論者の一人で「かなのめばえ」と云ふ雜誌までも發行して居られる東京池袋の成蹊學園々長中村春二氏も其一人でして、ローマ字の採用が外國語ののさばりこみを招きはしないかと云ふ點を懸念してローマ字に賛成し兼ねて居られるやうに伺つて居ます。又私の同僚である海軍士官の大部分も此種の疑を懷く側の人である事は皆さんの充分想像し得られる處でせう。而も

其海軍士官も私共の主張する眞意をよく呑み込めば、この疑が單なる杞憂に過ぎなかつた事を悟る――私から直接ローマ字の話を聞いてそれに賛成した海軍士官は數多いですが、其内具體的に「日本ローマ字會」の會員になつた士官だけでも三百名程あります――樣になるのです。では今から、私が如何なる論法を用ひて從來此難しい質問の關所を切りぬけつゝあつたかを御目に掛けませう。

二　日本語の爲めの國字改良

外國語のの<u>いさばりこみ</u>を研究する前に、先づ私は我々ローマ字論者が果して事大思想に囚へられた外國かぶれであるがどうかを明にして見ませう。單に外觀が英米と同じ文字であるからローマ字論者は事大思想に囚はれて居ると見るのは淺墓な考です。

論者の第一の誤解はローマ字を方今世界に最も隆盛を極むる英米の文字だと見做す事です。英米が今日ローマ字を國字として居る事には毛頭疑はありませんけれども、吾々日本式ローマ字論者が（ローマ字擴め會の方々がどう考へて居られるかは知りませんが）ローマ字を見る時には

英米の文字と云ふ特別な意識はありません。私共はそれを英吉利も使ひ佛蘭西も使ひ獨逸も使ひ――獨逸が龜の子文字を普通のローマ字に改めることに決めたのは餘程前の話である――伊太利も西班牙も和蘭も白耳義も丁抹も瑞典も諾威も北米諸國も南米諸國も共に使ふ處の世界的の文字であると見て居るのです。ローマ字を見れば直ぐ樣英吉利や亞米利加をのみ聯想される杉崎氏こそアングロサクソン恐怖病に罹つてお出でなのではありますまいか？

それはさて置き、左に掲げた比例式は國語と國字との關係を軍隊の事柄に當て嵌めて説き明かしたものです。

（國民の知識や思想――→國語）／（國　字）＝（軍人精神――→日本軍人）／（軍服や武器など）

卽、國語と國字との關係は丁度私共軍人が武器や服裝などに對する關係によく似て居るやうに私は考へるのです。さうして此式の兩側で、分子に掲げてあるものは孰れも其國に持前のものであつて、これは輕々しく取り換へる可きものではありません。度々申し上げる通り、私共の考に據れば、日本人が日本語を捨てると云ふ事は、日本人であると云ふ事を捨てるのと同じ位に大變な

事なのです。併し分母の方となると、勿論輕々しくは取り換へてならないですけれども、其程度は前とは餘程輕くなつて、若し分子の爲めとあらば、都合に依つては取り換へても差支ないものです。言ひ換へれば、分母を取り換へる事に依つて分子の光を一層輝かす事が出來ると云ふやうなものが若しあつたならば、それに換へても差支無いものだと信じます。

以上申し述べた事は勿論大體論でして、特別な場合には分子だからとて絶對的に變へてならない事も無し、又分母だとて無暗に變へて良いと云ふ筋合のものでありませんが、併しそれは分子と分母とを切り離して別々に觀察した場合の話です。分子對分母として較べて見ますと、そこに一種の段階――一は内面的で他は外面的であると云ふ――が嚴として横たはつて居ることを誰方も認め無い譯には行きますまい。この考は色々な方面から色々と說き明かす事が出來ますけれども、此處では唯左の二つの事を述べるだけに止めて置きませう。

先づ日本の軍隊を御覧なさい。海軍にせよ陸軍にせよ我國の軍人は孰れも西洋風の軍服を始め、大砲や水雷や飛行機やタンクや無線電信や軍艦の類に至るまで凡て西洋の道具を採り入れて居乍ら、内心は何處までも日本の軍人であると云ふ性質を失は無い――いやいや實は其性質を益々輝かす

爲めに西洋の品物を採り入れたのです——のを見て判ります。又國語と國字の方では、英吉利も佛蘭西も獨逸も伊太利も西班牙も文字は皆共通のローマ字を使つて居乍ら國語の方となるとどれもこれも各々違つて居るではありませんか。勿論歐洲各國の間には互に似通つた言葉も無いではありませんが、それ等の言葉ですら多くは幾らか發音が違つて居る計りで無く、更にそれを國語全體として見る時は國字の全然共通なのに比較して餘程の相違があるものと認めねばなりますまい。

私共の方針も實はこの取り換へて差支無い處の分母を、世界的で而もよく日本語の性質に當て嵌る處のローマ字に取り換へて、さうして日本語の光を一層輝かさうと云ふ（漢字や假名ではそれが出來無い）のであるから、その私共を指して事大思想に囚れて居るだの、ヤレ外國かぶれであるとか謂ふのは大變な誤解でなくて何でせう？　少くとも私共の先輩が往年、西洋の國露西亞に對抗する爲めに西洋風の軍服や大砲や水雷や無線電信や軍艦などを使つた——而もそれ等を實に旨く使ひこなした——事を承認する人や、今日我陸海軍が西洋風の飛行機や潜水艦を採用する事に反對し無い人の論としては誠に可笑な話と謂はなければなりません。日本の軍事當局が飛行

概や潜水艦を採用するのを目して、『方今世界に最も隆盛を極むる英米の武器を其儘日本に移植せんとする事大思想』などと批難する人が何處にあるでせうか？

三　漢字とローマ字との根本的相違

前章の説明でローマ字仲間の方針は詰り取り換へても差し支へ無い方の部分を、どうしても守らねばならぬものの爲めに取り換へやうと云ふのであるから決して外國かぶれでも何んでも無いと謂ふ事がよく呑み込めたと思ひます。言ひ換へれば、文字を換へて日本語を守り立てて行かなければ、主人公たる日本語の方が段々漢語化したり聞いただけでは意味が解らなくなるから、家來たる文字は主人たる言葉の爲めに潔く打死しなければならないと考へるのです。只今の儘で打ち過ごせば、家來は或は丈夫に育つて行くでせう——それすらも疑問ですが——が、主人の方が危くなるのです。

この事が解つたら私は直ぐ次の問題に移りませう。即漢字を採用したため漢語の流行を來したやうに、ローマ字を採用した爲めに英語（或は其他の外國語）の流行を來しはしないかと云ふ點

です。

私は充分の確信を以て答へます。『漢字と假名をローマ字に換へたために、特別に英語の流行を招くと云ふ結果にはならないであらう』と。何故さう言ひ斷ることが出來るかと謂ひますと、ローマ字の採り入れ方と漢字の採り入れ方とが根本からして違つて居るからなのです。漢字の爲めに漢語が出來たと云ふやうな事はローマ字の場合には起らない筈です。

論者を始め多くの讀者諸君は十月號の本誌で「國字改良の原理」と云ふ書き物を讀まれたでせう。あの中に亞米利加在留の日本人の言葉から說き起こして、我國の漢字の使ひ方を詳しく述べた一章がありました。即我國で「ネコ」と云ふ日本語を書く場合に漢字で「猫」と書くのは、日本語の「ネコ」に相當する支那語を研究して「ベウ」を得、然る後其「ベウ」と云ふ支那語に對する支那の文字が「猫」であつたと云ふ行き方であると云ひました。處がローマ字の場合はそれと全く趣が違ひます。「ネコ」と云ふ日本語を書く場合に私共がローマ字で Neko と書くのは、日本語の「ネコ」に相當する英語を研究した上で、其英語に對する英國の文字が Neko であつたと云ふ行き方ではありません。たゞ日本語の「ネコ」と云ふ音をローマ字でもつて寫しただけ

の話です。

論者の心配して居られるやうなことは、英語の cat を訓で「ネコ」と讀まし、音で「キャット」と讀ますやうな所謂金子式を採らなければ起る筈がありません。さうして金子式は私共の決して贊成しない改革案である事は既に私は十月號で詳しく述べて置きました。

古事記を調べれば直ぐ判りますが、日本でも漢字が輸入した當時はそれを單に日本語の音を寫す役目に使つた事が多かつたのです。さうして其儘に漢字の利用が止まつて居つたならば恐らくは今日のやうな漢語の流行を齎らさなかつたでせう。併しもともと表意文字である處の漢字で日本音を表はさうとするのは適當でないから、此方法は其後永く續かずに止んで、遂に今日の樣な使ひ途をとつて仕舞つたのです。今日ではそれを音文字として使ふのが僅かに神様に上る祝詞（のりと）の一部分に面影を殘して居るだけです。

以上の說明で、漢字で日本語を表はすと「氷枕（こほりまくら）」を「ひやうちん」と讀む事が起り得るけれども、ローマ字で Kōri-makura と書いてもそれが日本人をして「氷枕（こほりまくら）」に相當する英語や佛蘭西語や獨逸語の濫用を齎す原因には少しも成り得ないと云ふ事が判りました。若し日本人が將

來外國語を必要以上にとり入れる事が起つたとしたならば、其原因はローマ字の採用にあるのではありますまい。

この事は明かに今日の我國の狀態が證明して居ります。日本は今日未だローマ字を國字として採用しては居ませんのに、外國語は今日外の原因に據つてドシドシ侵入しつゝあるではありませんか。論者の心配して居られるのは或は次のやうなことかも知れませんが、若しそれでしたら私は嘗て田丸博士が中村春二氏に答へられた言葉を借りてお答へした方が早解りだと思ひます。

『今日ローマ字を採用しない時ですら外の原因からして外國語がドシドシ侵入して來る。況してそれをローマ字にしたならばどんなに外國語の侵入を增すかも解らない』

中村氏がローマ字に對して心配される事柄は、ローマ字を使へば外國語が澤山はいつて來て日本語が蹴落されるだらうと謂ふ點であるが、此心配は吾々の方針では一向要らない心配である。

吾々の經驗では、外國語を知らない一般の日本人に對しては、外國語は、假名を使ふ場合よりも餘計厄介である。其れの譯は――例へば中村氏の刷物「かなのめばえ」の中にも使つて

ある「オーソリチー」と謂ふ言葉にしても、假名なれば此の通りで通ずるけれども「ローマ字で英語風に authority と書いては一般の人に判らず、又日本風に Oosoritii と書くと英語の方から共言葉を知つて居る人に却つて通りが惡い。かう云ふ實際上の點からも、外國語は假名を使ふ場合に較べて、ローマ字文に却つてはいり難いのである。尤も外國語を知つて居る人同志の間には外國語が使はれ易いと云ふ事はあるに相違ないが、それは特別な場合で一般の書き物には外國語はローマ字文に却つて使はれ難いものである。(大正十年二月號ローマ字世界)

右は田丸博士の所說ですが、事實は明かにそれを證明して居ます。雜誌「ローマ字世界」のどの頁でも開けて御覽なさい。漢字交り文で同じ樣な事を書いたどんな雜誌に較べても外國語は少く使つてあります。これは理窟計りではありません。事實さうなのです。

四　寧ろ積極的を

最後に殘つて居る問題は『英米語——文化の程高く、言語の豐富なる英米の國語——の中に外

來語が綴りも發音も其儘で使はれるのは如何なる理由に依るか』と云ふ事です。これは大變に込み入つた問題ですから短い書き物で意を盡すのは困難な事ですが、それには先づ歐羅巴の地勢と英國の歴史とを調べて見る必要があるでせう。例へば英語の中には佛蘭西語が隨分はいつて居ますが、英と佛とは互に外國であるとは云ひ乍らもまづ私共日本人から見れば同じ歐羅巴内のことですから互に言葉の往來のある事は多少免れ無いことかと思ひます。その邊は日本と英國との關係よりも密接なのではありますまいか。殊に英國は征服された國ですから、被征服國に征服國の言葉が侵入するのは當り前な事とも云へるでせう。ですから杉崎氏の樣に、英語に外國語がのさばり込んで居るのを見て、直に日本がローマ字を採用した後の狀態を想像するのは早計でせう。

又氏は「ローマ字國」になつた日本が他日英語を生の儘で――綴字及發音共に英語の儘で輸入しはせぬかと心配して居られますが、未來の事は神ならぬ身の斷言し得る處ではありませんけれど、恐らくはそんな事はないでせう。第一、多數の日本人には發音しにくいから多分さうは成りますまい。tincture が「チンキ」になり、diastaze が「ヂアスターゼ」に變り、platina が「プラチナ」になつて日本語にはいつた事を思へば大凡の趨勢は察せられるではありませんか。

併しこれだけ述べたのでは杉崎氏初め多くの人々は尙承知しないでせう。『兎に角西洋と共通な文字を使ふやうになれば英語の書いたものを見た時に共なじみが今迄とは餘程違ふから、多少英語が日本にはいり易くはなるだらう』とも謂ひ得るから。

全體外國語が日本にはいる爲めには先づ外國語を知つて居る人を通して來なければなりません。處が、日本がローマ字を採用した處で、既に外國語を知つて居る此等の人々に對しては外國語のなじみが特にそれが爲めに增す樣になると考へられません。ですから一般の日本人の間に外國語がはやる樣になると云ふ事は文字を取換へる事とは大して交渉する處はない樣に私は思ひます。

今假りに一步を讓つて、日本がローマ字をとり入れた爲めに、卽文字が世界と共通になつた爲めに、外國語が日本にはいり易くなつたとしても、それを恐れるの餘り杉崎氏が、世界的の文字を採用した爲めに日本語を世界に擴め得る可能性を附與された事に氣が付かれなかつたのは大變消極的な事でした。ひとから侵されまいと氣を配るよりも自分の方から一步踏み出す方がよいとは思ひませんか。

では此處まで話を進めた序（ついで）に、私は日本語の世界的發展と國字問題とに就いて述べる事に致しませう。例に依つて又話が變りますから其積りで讀んで下さい。

五　日本語は世界に幅が利かない

日本と云ふ國は東隣りに亞米利加を控へて居る爲めか、いやに英語の盛んな國です。日本中の中等學校でそれを敎へる事になつて居る計りでなく、雜誌に、看板に、汽車の切符に大抵英語が並べ書きにしてあります。凡そ世界に國をなして居る國は許多ありませうが、苟も獨立國であつて日本の樣に外國語を並べ書きにして居る所は先づ無いと云ふ話です。

が併し私は今再び此處で日本人が外國語を使ひ過ぎる事の善し惡しを議論しようと云ふのではありません。英語は啻に日本で計りでなく、世界の國々に素晴しい勢で擴まつて居ります。唯私は之程迄に盛んな英語の勢力が羨しくて堪りません。

日本が、世界に於ける所謂五大國であると云ふ事を裏切る樣な事實は決して少くはありますまいが、就中言葉の上では此感じが殊に深いやうに私は考へます。外の問題は兎も角として私は言

葉の上では英國や佛國はおろか、伊太利に對しても我國は對等の交際をして居ない程憐れな狀態にあると言ひ斷つて憚りません。

世界大戰中の事でしたが、東京に殘留して居つた獨逸人に對して日本の役人が日本文の印刷物を渡したと云ふ事に就いて某博士が某雜誌で、日本の役人に常識の乏しい事を攻擊された事がありました。我國の役人に常識が缺けて居るのは今更珍らしい事ではありませんが、さてそれなら、吾々が獨逸に行つた時に獨逸の役人が吾々に對する態度はどうであるかと謂へば、矢張り日本の役人と大した變りはありません。獨逸よりももつと、常識に富んで居ると謂はれる英吉利へ行つたつて決して日本文の刷物などは渡して吳れ無いでせう。

私はこないだの大戰中地中海に出征して聯合國側の海軍と附き合ひましたが、英吉利海軍は申すに及ばず、佛蘭西や伊太利の海軍から私共に宛てゝ來る公用文書は凡て自分の國の言葉――伊太利からのは伊太利文と謂ふ風に――を使つてあるのに對して、日本の艦隊側から出すのが日本文で書かれた事などは唯の一度もありませんでした。即手紙をやる場合でも又貰ふ場合でも飜譯の手續きは恒も日本側の負擔となつて居る有樣ですが、さりとはなんと情無くも亦物要りな話で

はありませんか！　多少の相違こそあれ、外務省でも商の取引でも凡て此規則——『飜譯は此方持ち』——に從つて居る事かと思はれます。

同じ様な事は未だ外にもあります。日本人が日本に居て西洋と附き合ふ場合に、外國語が判ら無いと云ふ事は私共日本人にとつて非常な恥となつて居ます。嘘だと思ふ人は夏休みに輕井澤あたりへ出掛けて調べて見るがいゝ。英語や佛蘭西語の話せない人は丸で日本人で無いやうに考へて居る日本人がザラにあります！　さてそれなら私共が西洋へ行つた場合に、日本語の判ら無い事を恥と思ふやうな西洋人が澤山に居て呉れるかと思へば、私の貧しい經驗では滅多にそんな人に出會した事がありません。恒も飜譯は此方持ちなのです。

此の様に日本側が言葉の上で、恒も外國に對して家來の様な立場から逃れる事が出來無いのは何故でせうか？　また日本人はこんな情無い立場に滿足して居るのでせうか？

六　日本の事情が世界に判ら無い

日本と日本人の本統の有様が、昔から今日迄、世界に判つて居ない事は豫想外です。或る場合

には天國の様に宜すぎて、また或る場合には惡魔の國の樣に惡く受取られて居ます。日本の事情が外國にハッキリ傳はつて居ないと云ふ事は本統に恐ろしい事です。假令それが買被られるのであつても、また低く評價されるのであつても、それは孰らも宜くありません。

私共が軍艦に乘つて亞米利加や濠洲に行くとよく聞かれる事ですが、其土地の相當な識者がこんな事を謂ひます。

『日本にも此國の樣に電車が走つて居るか？』

『日本でも電氣燈を使つて居ますか？』

近頃日本の世界に於ける評判が殊によく無い。亞米利加あたりには明ら樣に日本を第二の獨逸だなどと謂ふ者さへあります。日本が獨逸に較べられるのは或る點では大層買ひ被られた處がありますけれども、また隨分迷惑な話です。

人に依つては、日本の樣子が外國に解らない方が得だと謂ふ人がありますけれども、私は決してさうは思ひません。國と國との誤解が思はぬ戰爭を引き起した例は昔から決して少くはありません。今日は世界がお互によく判り合ふ事が大切な時代です。

日本の事情が世界によく判つて居なかつた爲めに起つた戰としては私は日露戰爭を擧げて見度い。この戰爭の始まる前には日本でも露西亞の樣子はよく判らなかつたのですけれども、其判らなさは露西亞が日本を知らなかつたのとは較べ物になりません。丁度戰爭が始まらうとする前に、時の陸軍大臣であつたクロパトキンの一行が、日本を調べに來たけれども、日本の事情はよく呑み込めなかつたらしいのです。其處で彼は日本に對して色々な見込違があつて、其見込違ひが戰爭の手違ひの種となり、遂々敗け戰でけりが付いたのでした。

『併し日本の樣子が露西亞に判らなかつたからこそ我國が大國露西亞に勝てたのではないか』と云ふ風に皆さんが此問題を解かれ無い樣に願ひ度い。本統の處は、日本の樣子が露西亞に知れて居無かつたために此大きな賭博がザー並に其取卷連の手で仕組まれたのです。勿論後から見れば、此戰爭があつた爲めに日本の東洋に於ける足場が一層堅くなつたには違ひありませんが、日本の樣子が外國に知れなかつた爲めに、こちらの望まない處の戰を望ましくない時に――少し妙な物の言ひ方であるが――向ふから仕掛けられた事には少しも疑はありません。お互がよく了解し合ふと云ふ事は個人の交際で必要な許りではありますまい。これからの國際間に殊に大切な事

かと私は考へます。

米國カリフオルニア州立大學の名譽總長だと云ふ人が去年の春、日本見物の仲間に加はつて來ましたが、此の人が日本を出立する時に次の樣な捨て言葉を殘して行きました。

『東洋と西洋の文明は迚も解け合ふものでは無い。日本人には本統に西洋の文明が解つて居ない。矢張り、永久に東は東、西は西だ！』

尤も、此の人の樣な素通りの日本見物で本統の日本が解つてはそれこそ旅費が泣くでせうが、それにしても日本の隣り國の亞米利加で、殊に我國に一番近いカリフオルニアの人がこん事では、もつと、奥深い所に居る亞米利加人に日本が解らないのは當然なことです。英國や佛國の事は云ふだけ野暮でせう。

扨それならどうして日本の事情が外國に解らないかと云ひますと、答は誠に易しい。卽日本と日本人が解らないのは日本人の心の中が彼等に解らないからなのです。全體人の心を知る爲めには、其人の身振りや顏付などに依る方法――此點で表情に乏しい日本人は餘程損をして居ます――や、また繪や音樂などに依るのもありますけれども、言葉に依るものの程廣くて力強いものは

ありません。云ひ換へれば、日本と日本人を知るためには日本語を知ると云ふ事が一番大事な事なのです。處が既に前章で述べた通り、日本語が世界に擴まつて居ない事はまた驚く計りなのです。それなら日本語を世界に擴めて、日本の事情を世界に解らせるのには、どうすればよいでせうか? 之等の細かい事は項を改めて次章で述べます。

七　世界に擴めん、日本語

世間には、『「猫」をローマ字で Neko と書いても、それは矢張り元の日本語であるから、西洋人に對して判らない事は少しも變りは無い』と云つて、ローマ字の西洋人に對する效能を輕く見る人が少くありません。が併し私共はそれをそんなに輕い事だとは思ひません。何故かと云ひますと、

第一に、西洋人が漢字や假名で書いた日本語を見た場合とローマ字書きのを見た場合とでは、日本語に對するなじみが丸で違ひます。

これは丁度反對の場合ですが、兎も角英語にはかなりなじんで居る私共が、まだ少しも習つた

事の無い伊太利文と、同じ様に少しも知らない露西亜文と、また土耳古文とを見たり或は此等の國々を旅行した場合を考へて見ればよく判ることです。伊太利文は——英語にも源をラテンから發したのがあると云ふ事を別問題として考へても——それが英語に使ふのと全く同じローマ字を使つて居ると云ふだけの理由で英語を習つた吾々に餘程親しみがあります。處が露西亜文の方になると、共處にNやRを裏返しにした様な文字が出て來て、餘程英文とは懸け離れた氣持が起ります、更に降つて土耳古文となると『こんな文字を使ふ國民とはとても心から解り合ふ事はあるまい』と云つた様な氣分になる事は一部の人々の經驗された處でせう。實際に露西亜語や土耳古語を深く研究したり、又は之等の國民と交際して見れば、露西亜人も土耳古人も大して吾々と違つた心持の人類ではない事を發見するのですけれども、一番初めに受ける處の此の誤つた印象は仲々力強いものです。こんな詰らない印象が抑々國際間の誤解の原因となるのです。

右に述べた様な事を考慮に置いて、西洋人が日本の書き物を見たり、日本見物をする場合を想像して見るのに、それこそ非常に分け隔てのある氣持——『永へに東は東、西は西』と云ふ様な——を起すに違ひありません。此の氣持が彼等をして日本語の研究を鈍らせる事は云ふ迄も無く、

遂には戰爭と迄に漕ぎ付ける處がある事は既に私が前章で述べた處です。併し私共が立場を換へて考へて見ても、西洋人の此の心持ちは無理もあるまいと思はれます。

第二に述べる可き事は、此の樣にローマ字書きが西洋人に向つて、日本語に對するなじみを深くする結果、それの當然の成行として日本語が知らず識らずの間に彼等に擴まつて行くことです。

近頃西洋から日本見物に來る御客の數は決して少いものではありません。之等の通りがかりの西洋人が、例へば銀座通りをブラついて居る時に――銀ブラは亦彼等の好む處です――店の看板に『傘と履物』と書いてあつた場合と、ローマ字書きで Kasa to Hakimono と書いてあつた場合とを比較して見るのに、前者の場合は丸で譯が解ら無いから、てんで氣にも留めないのですが、後者の場合にはローマ字書きの心安さからツイ「かさとはきもの」(多少國に依つて讀み方や揚げ下げの具合が違ふでせうが)と讀んで見ます。そして恐らくは『何の事だらう?』位の輕い疑も起るでせうし、かくしに入れてある日本語字典をとり出して見るか、又は側に附いて居る通辯や案内者から Kasa to Hakimono の意味を教はる事になり、尙店頭に列べてある賣物の傘や履

物と較べて見て、愈々動きの無い處の Kasa と Hakimono と云ふ言葉の意味を確めて、遂々此等三個の日本語をシツカリ憶え込んで仕舞ふ事になるでせう。この様にして、日本見物の西洋人は習ふとも無しにめいめい四拾や五拾の日本語を覺えて國に歸るに相違ありません。これこそ一番易しい日本語の攅め方ではありませんか。

第三に、日本に居る西洋人の中に、話はよく判るけれども、日本の文字が讀め無いと云ふ人が澤山に居ますが、ローマ字は此等の人々に對して効能が少く無いと云ふことです。

元來文字と言葉とは、私がくどくど申し上げた通り、別物なのですから、日本語を習ふのに漢字や假名が是非必要だと謂ふ事はありませんけれども、今の處日本の新聞や雜誌が漢字や假名で書いてありますから、此等の文字を知ら無い西洋人の日本語研究には、或程度の行詰りがあるに違ひありません。此事に就いて面白い實例があります。

東大の文學部教授ダールマン氏の話に次の様な一節があります。

『私はもう十二年も日本に居るが未だ日本の新聞も雜誌も讀め無いから、どうしても日本に對する私の觀察は間接の材料に據つて居る弱點があるが……』(大正九年八月廿六日時事新報に據る)

即十二年も日本に住んで居て、而も日本の學生を相手にして居る人が未だに日本の新聞や雜誌が讀め無いとは實に驚く可き事で、多少事情を異にしては居ますが、日本人が西洋へ行つた場合に西洋の新聞や雜誌はよく讀めるけれども、會話が旨く出來無いと謂ふのとは丸であべこべな事實ではありませんか。

ローマ字はかう謂ふ外國人に對して、更に進んだ處の日本語の研究を促して、もつと突き込んだ日本の事情を悟らせるのに効果がある事は申す迄もありません。私は前々章で、某博士が日本の役人に常識の乏しい事を攻撃された事に就いて、『それは強ち日本の役人ばかりに限らない』と云ふ事を述べて日本語が世界に幅が利かない事を大變慨きましたけれども、實は我國が現用文字を捨て無い限り私共の希望は達し難いでせう。此の意味からして某博士のあの意見は決して誤ではありません。日本に居る外國人に對して、日本の役人が日本文の刷物を渡して差支無いのは我國がローマ字を採用した曉の話です。

人に依つては、『日本語を世界に擴めるには、日本自身を偉くすればよい。若し日本の力が世界第一と云ふ樣になつたならばよしや我國が漢字や假名を使つて居ても、世界の人々は無理にも日

本語を習はねばならないやうになる』と云ふのがあります。これは今の亞米利加や英吉利の勢力に照して尤もらしい言分ですけれども、實は未だ考が足りない。

第一に私共は其實力を養ふ爲めに今の文字が妨げになると云ふ事を看板にして居る計りでなく、いくら實力が備つても元來難しいもの——日本人自身すら困りぬいて居るもの——が西洋人に擴まりさうには思へないではありませんか。少くともいつ迄もなにがしかの分量が日本語を習ふ上に抵抗として殘る事は事實でせう。

私共は世界の人が無理にも日本語を習はなければならない様になると云ふ其無理な狀態から日本語を救はうと云ふのです。尚此外に、日本語が擴まると云ふ事それ自身が日本の實力の增した事になると云ふのをも忘れてはなりません。

さて私共が右の様に議論を樹てるとローマ字に反對する人が定まりきつてこんな事を云ひます。

『では、西洋人の爲めに文字を取り換へるのか?』と。

此の種の議論に對しては、私は餘り多く答へるに及びますまい。常々私共の遣り口を呑み込ん

で居らせる方や、既に前號の本誌でローマ字論者の方針を知つて居られる處の讀者諸君は、私共が日本自身の爲め及日本語の爲めに文字を取り換へる事を唱道して居るのである事はよく心得て居らるゝから。

八　世界語或は國際語のこと

私はこれ迄大層議論を控へ目にして來ました。それはたゞ日本語を今日の憐れな状態から救つて、英語や佛蘭西語などと同じ高さに迄引き上げやうと云ふのに過ぎませんでした。私共の此希望は今時大流行の機會均等主義から云つても、平等思想から見ても當然許さる可きものです。何故ならば、私共は只日本語に英語や佛蘭西語や伊太利語などと對等の附き合ひを考へることを要求して居るに過ぎませんから。

併し、此要求を極度に發達させますと、やがて私共は世界語或は國際語の問題に逢着します。世界の言葉を一種類に統一すると云ふ事は仲々難しい事でして、これは今の處、エスペラント主張家でも云つて居ない處なのですが、併し各國語の存在を認めつゝ、一方に於いて國際語を制定

すると云ふ事は極く必要な事です。而して共國際語に英語を使ふか、佛語を使ふか、それとも日本語にするかは容易に決め得ない大問題でせう。勿論良い品は自然に勢力を得る様になるのは自然の數ですが、此點ではエスペラント側の主張するやうに中立の言葉——或一國に屬しない處の——と云ふ事が國際語を定めるのに必要な條件となります。さうしてエスペラントが果して共れを主張する人々の云ふ樣に、中立語であると云ひ得るかどうかなどと云ふ疑も起るのですが、國際語問題に就ては又他日の論題として、これで一先づ杉崎氏に對する答辯を終る事にしませう。

（中央公論大正十年十一月號）

附言。

著者曰く、其後杉崎氏は日本ローマ字會員となつて居られる。

マルタ島の日本語

日本にも古い處では、『花の家』とか『松の家』、新しい處では『緑の家』などと云ふ樣に、家にシャレた名前を附けて納まり返つて居る人があるが。西洋人は殊にこれが好きだと見える。

地中海のマルタと云ふ小さい島の別莊町のスリーマと云ふ所には綺麗な家が澤山に並んで居る。いづれも、家に『ベルダン』だとか『マルヌ』だとか云ふ新らしい家名を附けて居る中に、「對馬」、「佐世保」、「見島」（？）と云ふ三軒の別莊が並んで居る（勿論それはローマ字書きであるが）。御國を遠く離れて歐羅巴の海に旭日旗を翻へす身にとつては、こんな小さな出來事でも、御國の光がこの名も無い町に迄及んで居るのかと思つて、人知れず戎衣の袖を沾した。

假名とローマ字

――野上博士の國字論に就て――

先月廿七日から本月四日に亘つて本紙――大每及東日――に連載された京大教授野上俊夫氏の『假名國字論』は多くの假名論者の意見と大體に於いて趣を同じくして居るが、それが前後十三項に分れた精密なる研究であると云ふ點に於いて近頃稀に見る大論文である。併し御議論の中にどうも私の腑に落ちない箇所が少くない。そこで私は今それを順々に書き立てゝ博士の教を仰がうと思ふのである。

重要な國字問題

『國字改良などと云ふツマラヌ仕事……』と稱へて、熱心な國字改良論者の仕事を嘲笑つて居る朝野の名士が今尚世間に少く無いのに較べて、野上博士の態度は敬服に値する。殊に其後段で、こ

國字改良と密接な關係を持つて居る國語整理は、日本語を棄てゝ英語を採り入れたり佛語を採り入れたりする事によつて目的を達すべきで無いといふ事を力強く述べられた卓見には全く感服の外は無い。

漢字の缺點

此項目で博士が述べて居られる事は凡て尤もな意見許りである。そして博士が本項で漢字學習の困難な事を說明される文句の中に『之等多數の漢字の大部分は唯一つ宛の形に就いて暗記するの外無く、記憶上何等の法則が無い』と述べられたのは注目に値する。

改良論の由來

此項目の中頃で博士が『實際に於いて漢字には大なる缺點もあると同時に又大なる長所もある。自分等も未だ今日直に之れを廢して仕舞ふことは聊か躊躇するものであるが』と述べてしまはれたのは殘念至極である。この文句で博士が第一項及第二項で國字改良の必要を叫ばれたり漢字の

缺點を攻撃されたりした事が無意味になつて仕舞ふ。博士は尙續いて『今假りに漢字を廢する場合の到達するものと假定して、偖て之れに代るべきものは假名かローマ字か』と云ふ事を研究して居られる次第であるが、これは又夢の樣な事を研究されたものである。筆者自身もあまり自信の無い事を假りに……と假定して議論を進められるなどは大論文の價値を大層下げて仕舞ふ次第である。併し野上氏が事實其通りに考へて居られるならばどうも致し方の無い話であるが、博士はホントウに所謂漢字の大なる缺點と大なる長所と其の大の分量が同程度のものと認められるのであるか、若し長所と缺點とが丁度栝匹敵するものであるならば國字改良は現狀に波瀾を起したり移り變りの抵抗を呼び起したりするだけ損な話であるから、其樣な閑事業には一切手を出さ無い方が結局得策だと云ふ事になるから所謂重要な問題ではなくなつて仕舞ふ。但し私自身は野上氏とは餘程違つて漢字の缺點は其長所を以て迚も償ふ事が出來無い程大なるものであると信じて居る次第である。

ローマ字と假名との比較

此項目で博士の主に論じて居られる事は『單音記號のローマ字は音節記號の假名よりも發達したものではあるけれども、日本語は歐米語と全く其性質を異にして居るから音節記號が最も適して居る』といふ事である。成程日本語は歐米語と全く性質を異にして居る事もあるが、此の事も伊太利語、西班牙語の大部分や佛蘭西語の成部分などに較べると必ずしもさうともいへないから博士の議論も餘程割引して聞く必要がある。併しそれはそれとして何故に歐米語に單音記號が適當して、日本語には音節記號が適當して居るかの詳しい說明を博士に御願ひし度い。この說明が缺けて居る爲めに博士の擧げられた sublime と云ふ二音節の語は二個の音節文字で書き表す可きだと考へる人も起らうし、又『Hanaより「ハナ」の方が良いと云ふなら「ハナ」より「花」の方が一層良い事になる』などと怪しからぬ事を云ふ人も出て來やう。

尙細かい部分に就いて述べると『日本語は二個以上の子音が母音の前又は後に重なる事の無い點に於いては多くの歐米語と異つて居る。例へば英語の strength と云ふ字の如く母音の前にも後にも三つ宛の子音が附いて居るやうな例は日本語には決して無い』と言ひ斷られたのは稍々亂暴である。今二個以上と云ふ言葉が二個をも含むものとすれば、

活潑な(kwappatuna)

法華宗(Hokkesyû)

などは母音の前後に各二個の子音が重なつて居るのはどうした事か。又三つ宛の子音が附いて居る例は、

八百貫(happyakkwan)

などがあつて母音の前後に各三つ宛の子音がある。尤も此様な例は日本語に澤山無いのは事實であるが、博士が「決して無い」などゝ斷言されるから反證を擧げたまでゝある。

最後に『日本語の一音節を分解して子音と母音とにして見た處がそれは殆ど何の役にも立た無い』と云はれてあるが、この一節はローマ字が子音と母音とに分れて居ることの利益を餘り輕く視られた嫌がある。ローマ字が子音と母音とに分れて居るからこそ拗音や促音（Kippu, atta の様なツマル音）を現行の假名書きよりも完全に書き表し得ること（假名書では「醫者」と「石屋」と間違へる）や、字數が少くて濟むこと（日本式ローマ字は僅十九字で濟むのに假名は四十八字の外に濁音、半濁音がある）なども考に入れなければならない。尚又字數が少いと云ふ事は索引

などを作る場合に非常に便利であることは「ローマ字引」と「イロハ字びき」との便利さを比較して見れば直に判る話である。其他電信にタイプライターに、ライノタイプに、字數が少いといふ事がどれだけ効験あらたかであるかを想像して見られ度い。

綴字法の困難

此處で博士が英語の綴字法の込み入つて居ることを述べられたのは至極當然な話で、私も常に深く共感を有つて居るのであるが、私は野上氏が何の爲めに特に此項目を設けて外國語の綴字法の困難なことを叫ばれたのであるかの理が判らない。博士御自身も第六項で述べて居られる通り、日本語のローマ字綴りの方は外國語の綴字法に比べて最も簡單な綴字法であつて、Kaは常に『カ』と讀み且『カ』の音は雨が降つても槍が降つても Ka と綴るのであるから外國語の樣に怪し氣な事が絶對に無い、從つて此處に外國語の綴字法の困難と云ふ事を引き合ひに出す必要は少しも無いのである。尤も野上氏が如何なる事を述べられやうとも私に兎や角文句を云ふ權限は無いのであるけれども、新聞を急いで讀む多數の讀者の中には此項目を見て「英語の綴字法が困難だか

ら日本語のローマ字綴字法も學習に困難だらう」と云ふ様な大ざつぱな見當を附ける人が無いとも限ら無い事を私は恐れる。何となれば野上氏が特に此項目を設けられたのは決して日本語のローマ字綴りの容易な事を讀者に示す爲めになさつた事ではなく寧ろ其反對であるらしく想像されるからである。

國語と綴リ字

冒頭に於いて博士は日本式ローマ字綴り方が外國語の綴字法に較べて大層易い事を述べて居られ乍ら、直ぐ其次で『現在のローマ字論者は漢字の教授を以て兒童に對する大なる負擔なりとして大に攻擊して居るに拘らずローマ字を用ふる事に依つて綴字法といふ新しい負擔を兒童に負はせやうとするのは其主張に大なる矛盾があると謂はねばならぬ』と迄もいふて居られる所を見ると矢張り心の中では相當に難かしいものゝ様に認めて居られるらしい。即ち『此の點でローマ字が假名に比べて劣つて居ることは爭ふべからざる事實である』といふ結論に到着して居られる。今果して事實がさうであるかを吟味して見よう。此の吟味は假名の五十音圖とローマ字の五十音

圖とどちらが敎へ（或は覺え）易いかといふ事を研究する事に依つて達し得られる理窟である。

扨先づ假名の五十音圖から取調べて見ると假名の場合には四十八なら四十八の文字の形の間に何等の關係がない（尤も濁音、半濁音は此限りで無い）。たゞ一つ宛の形に就いて暗記するの外なく、記憶上何等の法則がない。然るにローマ字の方になると次の表で判る通り一定の法則が立つて居るから大變敎へ（或は覺え）易い。ローマ字の敎授法の一端を今此處に漏せば、吾々は次の樣にやつて居るのである。

先づ一番初めに母音の「a i u e o」の五字を暗記させる。これが丁度假名の「アイウエオ」の五字に匹敵するであらう。次に、

『皆さんは聲を出してカ、、、、といふて御覽なさい。さうすると終には皆さんは唯ア、、と叫といふて居る事に氣が附くでせう。途中から此敎室へ這入つて來た人は皆さんがア、、と叫んで居る樣にしか思はれません。卽ち「カ」と云ふ音は前に敎へたaの前に何かくつついたものらしい。同じ樣に「キ」も前に敎へたiの前に何かくつついたものらしい。以下「コ」も同樣である。そこでローマ字ではa i u e oの前にkといふ記しを附けて「カ、キ、ク、

ローマ字の日本式綴り方

	ア a	イ i	ウ u	エ e	オ o	拗音 -ya	-yu	-uo	-wa
k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キヤ kya	キユ kyu	キヨ kyo	グワ kwa
s	サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so	シヤ sya	シユ syu	シヨ syo	—
t	タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to	チヤ tya	チユ tyu	チヨ tyo	—
n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニヤ nya	ニユ nyu	ニヨ nyo	—
h	ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho	ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒヨ hyo	—
m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミヤ mya	ミユ myu	ミヨ myo	—
y	ヤ ya	(イ i)	ユ yu	(エ e)	ヨ yo	—	—	—	—
r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リヤ rya	リユ ryu	リヨ ryo	—
w	ワ wa	ヰ wi	(ウ u)	ヱ we	ヲ wo	—	—	—	—
g	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギヤ gya	ギユ gyu	ギヨ gyo	グワ gwa
z	ザ za	ジ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジヤ zya	ジユ zyu	ジヨ zyo	—
d	ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do	ヂヤ dya	ヂユ dyu	ヂヨ dyo	—
b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビヤ bya	ビユ byu	ビヨ byo	—
p	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピヤ pya	ピユ pyu	ピヨ pyo	—

特徴 {各行に一定の父字を使ふ。
拗音の書き方が規則正しい。

ケ、コ」の音を表はすことになつて居る。さうしてkのことをカキクケコの記しと名付けます』

といふ風に教へて行く。さうすればａｉｕｅｏの五字を知つて居る者に對して極めて合理的にka, ki, ku, ke, ko, を教へ得る次第であるが、それは兒童にとつて「アイウエオ」と全く關係も法則も無い「カキクケコ」を五つ棒暗記するよりも容易な事は野上博士の充分想像し得られる處と推察する。「サシスセソ」以下も同樣に之に準ずるのであるから結局全體としてローマ字の教育の方が假名の教育より易しいことになる。これは理論上さうである計りで無く、實驗上容易く證明し得られるから、世間一般の實驗心理學者に實驗を御すゝめする。

尙野上氏は、この綴字法は每日讀み又は書く時に一度一度起つて來る手數だといはれるが不思議な話である。一旦五十音圖を充分に覺えた兒童は ka 全體を見て「カ」を感ずる筈であるから其後の一生涯に每回綴字になやまされる心配は無い。よしや ka 全體を見て「カ」を感ずることの頭腦の働きを心理上細かく分解すれば矢張り綴字法をやつて居る事になると云ふ結論に到達しても「フ」と「ノ」とから成る字が「ア」の音を示すと云ふ事を意識することの難易とどれだけ

の相違があらうか。

尙博士は第九項の終りで、日本の國字として片假名と平假名の兩方を採用するがよいと云ふ主張をされて居られるから、假名學習の困難はローマ字の場合に較べて右に述べた事の尙二倍に增加する理である。

書き方の遲速

此の項目では主にローマ字と假名との書き方の遲速を比較研究されたのであるが、野上氏の統計のとり方が餘りに荒つぽいのは心理學者たる氏の立場から見て不似合な事であるといはねばならぬ。博士の前の方の統計は或る一人の結果であり、後の方の統計は他の一人の結果である事は注意を要する。又合計此二人の實驗者の資格が少しも報告されて居ないのは極めて此統計の價値を少からしめる。卽ち此の二人が平生假名書きに慣れて居る人であつたりなかつたり又ローマ字書きに慣れて居つたり居なかつたりする事に依つて該統計は殆んど信用すべからざるものになつて仕舞ふ。因に書き方の實驗をされる方に注意迄に申し述べて置く事が一つある。それは外國

語の方面でローマ字に書き慣れて居る人を連れて來て、日本語のローマ字綴りの書き方の實驗をさせてもあまり信用すべき結果が得られ無いといふ事である。

尙小さな事であるが、博士が『假名の一字に對してローマ字が二字を要する』と云はれたのは誤りである。（野上博士の此論文の一部――第七項の冒頭から凡そ十八行の間――を私は試みに假名書とローマ字書とに書き替へて字數を較べて見た處が假名の三百五十字に對してローマ字では五百三十六字卽ち假名の一・五三倍になつた）勿論大體論としてはさう云はれても差支無いが、精しい取調べに依ると假名の二字に對し日本式ローマ字では三字（漢語の少い文章では三字强になる）を要するのである。

本論に立ち戻つて、同じ文章を假名で書くのとローマ字で書くのとは實際どちらが早いかと云へば、今私はローマ字の方が早いと言ひ斷る勇氣は無い。ローマ字も案外早からう位の事は云へるけれども或は假名の方が早いかも判ら無い。いづれもこれは多數の實驗から結論を見出すべき性質のものであるから將來の判決に任せて置く。何故今日未だに其實驗が出來て居ないかと云へば、今の處此實驗をなすべき適當なる資格者が澤山得られないからである。

翻つて、ローマ字國に於いては字を書くと云ふ事は何に依つて成されるかと云ふと、タイプライターの利用と云ふ事は今日歐米では輕視する事は出來ない。殊に書き方の遲速を爭ふ樣な舞臺は全くタイプライターの天下である。而して假名のタイプライターとローマ字のタイプライターとは孰れが早く印刷出來るかと云ふ事は面白い研究問題であると思ふ。それは第十二項で精細に述べる。

讀み方の難易

假名とローマ字の比較で一番大切なのは**讀み易さ**の問題である。前項の書き方の事も多少問題になるけれども讀み方の問題程大切では無い。何となれば書く方はタイピストを利用する事も出來やうし――米國邊りでは會社の重役などは用事を蓄音機に吹き込んで置く。さうするとタイピストはそれに依つてタイプライターで書き物を二通も三通も作つて置くと云ふ――又書籍や雜誌や新聞の事を考へると、著者はたつた一人であるが讀者は數萬人にも達する。然るに此一番大切な讀み易さの問題を博士が餘りにアツサリと片付けられてズンズン次の論に移られたのは甚だ心

得難い。

此項目に於ける博士の結論は『Inu も「いぬ」も讀み易さは同じであらうと思はれる。此の點では兩者の優劣は先づ判らぬといふべきである。併し suzuribako「スズリバコ」の樣に字數が長くなるに從つてローマ字の方が假名に較べて著しく（殆ど二倍近く）讀み難くなる。尤もこれは目下實驗中だから斷言は出來無いが併し少くもローマ字が假名に優つて居るといふ事は無からうといふ位の事は云ひ得られる』と云ふのであるが、これは實に私がこの六七年間に初めて伺つた意見である。

一體平假名でも片假名でも凡て假名は、漢字交り文に於けるが如く漢字（一名本字と云ふ）の補助文字として使つた場合にそれの最大効能率を發揮するのであつて、假名許りの文章は讀みづらい事夥しい。全體假名と云ふ言葉からして本字に對して出來たもので假りの文字或は補助文字と云ふ意味を含んで居る。卽ち單獨に使ふべく作られたものでは無いのであつてそればかりで書いた文章はいくら慣れても讀み難い。これは假名本來の形狀から來る所の缺點であつて今の所全く救濟の見込みは無いと云はれて居る。

例へば「かいぐん」なら「かいぐん」といふ四つの假名は、たとへ外の語との間に間隔をあけて書いても――東京池袋の成蹊學園の中村春二氏の行き方である――四ツが全體として一つの纒つた形をなさない。此一語が全體として纒つた形を成さ無いといふ事が、漢字交り文やローマ字文に比べて假名許りの文章が甚だ讀みとり難いと云ふ結果を齎すのである。

ローマ字が一語として纒つた形を持つが爲めに、一目見て判る樣になるに拘らず、假名には此性質が乏しい爲めにいつまでも拾ひ讀みをせねばならぬと云ふ事は却々人に說明し難い。これ迄の私の實驗に依ると悟りの好い人は說明無しに此事を會得するけれども中にはいくら說き明かしても納得し無い人もある。かう云ふ人に對しては多數の實驗に依る統計を示すのが一番良いのであるが殘念ながら統計をとるべき資格者が殆んど未だ見當ら無い。何となれば讀み方の統計をとる場合の資格者は書き方の場合よりも一層難かしいのであるからそこで多くの場合には私自身がスラ〳〵とローマ文字を讀み上げる事に依つて不充分ながらも實驗の一半を解決して居る有樣である。

併しこれは頑固黨に對しての話であつて、多くの人は次の四つの事を私が述べる事に依つて大

抵納得する樣である。之等の說明は勿論正面からの堂々たる議論では無いから萬人を說服する譯には行か無いが、それでも多少効果があると思ふから參考の爲め記して置く。野上博士は果して是丈で私共の說を承認されるかどうか？

（一）假名は上から下へ書き下ろしても讀めるし、又軍艦の艦尾にある艦名の樣に右から左へ書いても、又は數學の本の樣に左から右へ書いても其讀み易き（或は讀み難さ）は大した違ひは無い。然るにローマ字では此の樣な藝當は到底出來無い。油繪かきなどが時々ローマ字の署名を上から下に書いて居るのを見受けるが、あれは甚だくつつきが惡くて假名の場合と比ぶ可くも無い。殊に右から左へ書くのなどは私は見た事も無い。此の二つの事實から次の結論を作り出しても不當ではあるまいと私は信ずる。

イ、假名の方は一字一字の粘着力が各方向に殆ど均一にある（詳しく云ふと其内でも上下に一番あるらしいが、片假名では必ずしもさうともいへない）代りに其力が三方に分散して居る爲めに各方向の粘着力は弱い。從つて假名は一字一字が離れ離れの字たる事を免れ無い。

ロ、然るにローマ字は上から下或は右から左といふ方向には殆ど粘着力を持たない代りに、左

から右といふ特別な方向だけには非常な粘着力を持つて居つて、此方向にローマ字を並べた時には一語として、まとまつた形を成す性質を充分に備へて居る。

世間で萬病に利くと云ふ藥にろくな物が無くて、これは胃病だけに利いて外の病には効能が無いといふ樣な藥こそ胃病に頗るよく利く事や、又眞の知己といふ樣なものは八方美人主義の連中から求め得られ無いのなどはローマ字と假名との粘着力の比較をする時に想ひ起こされる事柄である。

(二)假名が日本で發明されてから既に一千年以上も經つて居るのに、今日假名許りの文章が少しも振はないと云ふ事實から其原因を推測して見ると、その一として日本人に外國崇拜(當時ならば支那崇拜)の根性が旺盛であるが爲め必要以上に漢字を尊敬したからだといふ事も見逃すことは出來無いが、假名其物にも缺點がある爲めである事を忘れてはならない。もしホントウに野上氏の云はれる通り漢字の犬も假名の「いぬ」も讀み易さの程度が全く同一だとすると、少くとも下級社會にでも今少し假名計りの書き物が流行して居なくてはならない筈だと私には思はれてならない。千年も經つて居るのであるから。

（三）次に今日の假名論者を觀察して見ることに依つて、私は一層明かに假名本來の形狀の缺點を認める事が出來る。それは外では無い、近頃殊に目立つて來た假名の字形の改良案である。

大阪の山下芳太郎氏は此方面に於いて最も熱心な片假名改良を企てゝ居られて既に三回に亘つて御自分の考案に成る改良片假名の活字の製作を試みて居られる。さうして最近の案は前二回のものに比べて著しく粘着力を增した樣に見えるけれども、山下氏自身も述べて居られる通り未だ滿足なものになつて居ない。

東京市外戸塚の高尾謙一氏の考案に係る「ニホンジ」と云ふのは山下氏の第二回考案と第三回考案との中間に位したやうなもので矢張り片假名の改良である。

東京小石川の小森德之翁は古くから片假名の改良を企てられ殊に筆記體に就いて面白い案を立てて居られるが讀み易さの點では未だ充分なものとは認められ無い。

尙此片假名の改良では靑木良雄と云ふ方の全然ローマ字化した案があり（大正八年十一月號の「太陽」參照）平假名の方では世田ケ谷の小島一騰翁と云ふ七十七歲の老人の案や最も原始的なのに成蹊學園の中村氏の案などがある。

さて此等の假名の改良は吾々に何を敎へて居るかと云ふに、それは言ふ迄も無く現在の假名を以てしては假名國字論がどうしても成り立たないといふ事を最も雄辯に語つて居るのでは無いか。

(四)之に反してローマ字は我國でこそ未だ經驗は淺いが歐米諸國では永年の間讀み易さの問題では不都合無く行つて居るから、それが日本語の場合にも理論上都合好く行く可き筈であるし尙私自身の經驗でも實證し得られる。

扨てそれならローマ字は其本來の形の何處からして斯樣に讀み易い性質を持つて居るかと云ふのに

第一、ローマ字では主な條が定まつた向――普通の字體では上下の向き――を持つて居つて、而も其間に交つて居る曲線や斜な線は見分けの記しになり乍ら全體としての向はよく保たれて居ること。

此點は字を續けた場合に二つの字のなじみ（粘着力）を良くすると謂ふ結果を生ずる。實際磨り減つた活字でnmihなどの續いたのを見ると何處が字と字との境だか解り難い樣な場合があ

る。これがローマ字が言葉として纏つた形を與へる原因であらうと思ふ。

第二、ローマ字では字の幅が全體として定まつて居り乍ら其間に上に出た線や下に出た線が混
つて居て各の言葉に持前の形を與へて居る事。

日本語でも k t h d b g p や拗音に固有の y が好い程の數はいつて居る爲めに此點が都合好くいつて居る。これが又言葉全體として見分けが容易い原因であらう。

次に此の様な二つの點に就いて假名が何うであるかを調べて見ると、其どちらの性質も缺けて居ることが直きに知れる。假名の條には全體を支配する主な向きが無くて、假名を二つ並べたものが一つの形をなす様になじまない。又假名を幾つか並べて見ると、幅も丈も一様に變化がない爲めに一つ一つ書いた言葉に持ち前の形が無い。

右の二點から考へて假名はいくら慣れてもローマ字文に慣れた場合の様に讀み易くなるだらうと思はれ無い――卽ち一つ一つの假名を讀まずに言葉全體の形を見ただけで讀んで行くと謂ふやうにはなる事は出來無いと思はれる（右第一以下田丸博士の說に據る）。

前に述べた山下芳太郎氏や小森翁や高尾氏は假名に之等第一、第二の性質を與へようと苦心し

て居られるのである事は既に述べた通りである。

尙讀み易さの比較を研究される方に御注意迄に述べて置く可き事がある。凡て慣れゝば讀み易い、慣れ無い間は讀み難いと云ふ事は當然であるから、孰れが讀み易いかといふ問題についての個人個人の判斷には、文字其物の性質から來る部分と其人の慣れから來る部分と混つて居ると云ふ事である。

最後に、博士は Suzuribako の樣な長い綴は片假名書きの「スズリバコ」に比べて著しく讀み難くなるといはれるけれども、外國語でも獨逸語などにはそれより遙かに長い綴りの言葉が澤山あるのに、獨逸人が不都合無しにそれを讀んで居る處から考へると、Suzuribako が「スズリバコ」に比べて讀み難くなる――博士は二倍近くも讀み難くなるらしいといはれる――とは思はれ無い。尤もローマ字ではまだ一語として認められ無い組立言葉は其間にツナギを入れる事にして居るから無暗に長たらしい綴りが出て來る處はない。

其他の諸點

此の項目の初めの處で、野上博士は『或る人はローマ字は其性質上相接して居る文字が相結合して一體となつて見えるが、假名には各字の間の結合する性質が少いから一字一字づゝ讀まねばならぬ、從つて時間を多く要するといふ。實際假名の離れ勝ちなことは事實であるが、これは少しく假名の形を改良すれば避けられる。現に假名論者の中には其工夫をして居る人がある』と述べて居られる。これでは博士が前項で述べられた『兩者の優劣は先づ判らぬ』とか『イヌも Inu も讀み易さは寧ろ同じであらう』とかいふ說を自ら打ち壞して仕舞はれた事になる。博士がチャント假名の離れ勝ちなことを認めて居られるのを早くから知つたならば、私は前項であれ程詳く述べるのではなかつたのに。博士が時々此の樣な事をされて一般の讀者及び私を面喰はされるのは恐縮の至りである。尙其次に書いてある假名の改良の事は私も前項で述べた處であるが、山下案にしても小森案にしても高尾案にしても未だ充分物になつて居ない許りで無く、將來いくら改良に改良を重ねても成功しさうの望みが見えない。ローマ字に字數が少い事の利益は實に此點にあるのであつて(假名よりも習ふに手數がかゝらないといふ事は實に問題とするに足ら無いのだ)假名や、改良假名の樣な澤山の字に別々の形を與へて、それが皆簡單で、見分け易くて而も粘着

性に富むといふ三拍子揃つたものになるといふ事は無理な註文である。

本項の後半部で博士は、眼の衛生上縱書き（讀み）も横書き（讀み）も大差ないことを說き明かして居られるが、私は次の理由に依つて縱讀みの方の眼が衛生上工合が悪いといふ事を度々聞いて居る。

（イ）眼球を左右に動かす筋肉はそれを上下に動かす筋肉に較べて餘程强い。而して讀書の時の眼球運動は飛躍的に飛んでは止まり飛んでは止まりするものではあるけれども、一行を讀み終つて次の行のはじまりに眼を移す時に縱書きが横書きのものよりも眼を疲らせるとの事である。日本に於ける實驗心理學の大家の一人である野上博士が自分の專門の事である此事實を百も御存じである筈なのに、この事に少しも觸れて居られ無いのは片手落であらう。

（ロ）今一つは、一行の終りから他行のはじまりに眼を移す時に縱讀みでは著しく眼球の焦點距離を調節し變へねばならぬ事で、これが又眼を疲らせる他の原因になる。尤も視線が紙面の中央に垂直となる様に見臺を設備することに依つて此の弊害は餘程救はれるわけだが、色々な關係上現今見臺の設備は或特殊な場合を除いて出來ない有樣である。

右の二點を出來るだけ防ぐ手段として、今日の新聞紙などは行の長さを出來るだけ縮めて居る。併し歐文の新聞も同様にそれを縮めて居るから、矢張り縦書きは横書きに比べて前記二項の缺點を有つて居る事は免れ得ないのみならず書籍や雑誌には事實未だ行の長い印刷が行はれて居る次第である。

次に博士は『假名が其の性質上縦にも横にも書けることは寧ろ其の一つの長所であるともいへる』といふて居られるが、これは一寸考へ物である。其長所が卽ち粘着力に乏しいと云ふ缺點を伴ふのである事は旣に第八項で述べたが、それよりも先づ次の話に耳を傾けられ度い。

（其一）　饂飩粉の手荷物

近藤と云ふ私の友達が横須賀の停車場で、表に假名で『コンドウ』と書いた手荷物を汽車に預けようとしたら驛員から斷られた。

『ウドンコは手荷物に出來ません！』

（其二）　三笠か相模か

世界大戰が始まつてから間も無い話であるが、或る人が横須賀軍港に軍艦見物に來た所が

艦の横つ腹に白ペンキで、右から讀むと「バカ」と大きく書いてあるのがあつた。帝國の堂々たる軍艦に樂書きがしてあるとは怪しからん話だと憤慨して傍の人に聞いて見たら、それは驅逐艦の樺であつた。

次に此先生段々と漕いで行くと、今度は左から讀むと「みかさ」と云ふ金文字を艦尾には り付けた堂々たる戰闘艦の側へ來た。『ハハア、これが彼の有名な東郷大將の三笠艦か』と思つて、艦内の見物を願つて意氣揚々として軍港を引き揚げたが、實はそれは露西亞からの分捕艦の相模であつた！

次に博士は『何も別にたゞ一通りの書き方に限る必要は無い』と云はれて、横書きの片假名と縦書きの平假名との兩方を國字として採用される方針であるらしいが、兒童の負擔は大問題で無いにしても、これでは色々な方面に差支が起つて來るから多くの人の賛成し兼ねる處であらうと私は考へる。尙タイプライターと二種の假名の採用との關係は第十二項で詳しく述べる。

歐米との關係

、此の項目で述べてある事は大體日本式ローマ字論者がヘボン式ローマ字論者に對して常に云つて居る事であるから別に問題としない。たゞ博士は『ローマ字論者の一部には、日本の知識階級が歐米語を學ぶ上に於いて、ローマ字を國字とする事に依り非常に便宜を得ると云ふ者があるが、それは間違つて居る』と長々しく之に對する說明をして居られるが、これは博士も斷つて居られる通り眞に一部の淺墓なローマ字論者だけのいふ事であつて、此點に關して私共は非常に便宜を得るとまでは考へても居らず、又歐米語を學ぶ爲めと云ふ事にそんなに重きを置いて居ない、寧ろ日本語を世界に發展させる方に重きを置いて居るのである。

併しながら世界の主な國々と共通な文字といふ事を餘り輕く視られるのはいけ無い。度量衡ですら世界共通である事の利益からして日本でもメートル法を採り入れる勅令が發布された時代である。今は我國も東洋の日本として甘んじて居る可き時では無い。而も形式上の世界共通は世界の大勢である。

日本語の純正を害す

此項目の前半で野上氏が述べられた事卽ち日本語のローマ字綴り方の讀み方を教はら無い西洋人が日本に來た場合に自國流の發音をするといふ事は寧ろ當然であつて、格別とり立てゝ論ずべき筋合のものでは無い。英語の讀み方を教はらない佛蘭西人が chi と云ふ英語の綴りを見てシの樣に發音したり、獨逸語を知らない英人が Zeppelin を「ゼッペリン」のやうに讀むのは當り前な話で、丁度支那の事を知らない日本人が上海を「ジヤウカイ」と讀む場合と等しい。であるから、これ等の西洋人には日本語を教へてやるといふ事が必要である。

後半部で野上氏は『勿論日本人はローマ字書きの日本語を見ても矢張り本來の音節通りに發音するであらう。併し乍ら特別の場合に――例へば讃美歌を歌ふ樣な場合に日本人の內でも外國人らしい發音をする事が今日幾分かある方面で始まつて居る』と云はれて假名書きの讃美歌の例を書き出されたがこれでは丸で何をいふて居られるのだか理が解らない。博士の論法は『ローマ字を採用すると日本人まで日本語を英語風に發音して仕舞ふ樣になる。その證據には日本人が假名書きの讃美歌を英語風に歌つて居るでは無いか』といふのと同じだからローマ字論者が叱られたのか假名論者が叱られたのか一寸見當が付かない。

併しこれは博士が辭句を過度に省略された爲めにその樣にとれるのであつて、博士の眞意は恐らくは『ローマ字書き日本譯の讃美歌を讀む西洋人は西洋風にそれを歌ふ。日本人の基督教徒は漢字交りの讃美歌でも、假名の讃美歌でも、ローマ字の讃美歌でも、凡て日本流に發音すべき筈であるに拘らず不知不識の間に西洋人の宣教師の口調に同化される傾きがある。この大元の原因は實に最初宣教師にローマ字書きの讃美歌を見せた事に基因して居る』と云ふのであらうが、果してさうだとすると又私は一亘り文句を並べねばならぬ事になる。

所謂『文明の器』

博士は極く大まかに『今日でも西洋出來のタイプライターを其儘用ひて字面だけを假名にさへすれば立派に假名のタイプライターが出來る。今日普通の西洋の印字器の鍵(押釦)の數は四十六七あるから丁度それに假名を配置するにも都合がよい』と斷言されたけれども、これは餘程念入りに考案されないと都合の好いものは出來無い。右の四十六七と云ふ釦押の數も怪しいが、尙濁音符、半濁音符、其他の符號及數字を計算に入れると今日の西洋のタイプライター其儘では其

合が悪からうと思はれる。これは一つ博士に具體的の排列を圖示される事を御願ひする。

併し、私のいふのは今日西洋出來のタイプライターを其儘用ひた場合の事であつて、日本で別に作るといふ事にすれば問題はなくなるから假名のタイプライターの任意なものを作る事が出來やう。此點に就いて博士の主張は正しい。たゞ此處で注意すべき事は、タイプライターにせよ、ライノタイプにせよ、モノタイプにせよ、或は速記機械のグランジャンにせよ、字を印刷する電信機械にせよ、外國に立派な發明があつた場合に、タトヒそれらを假名用に作り代へ得るとしても、それは日本限りの器械であるから經濟上世に行はれる樣になる事は多少困難でもあり、又行はれても外國に對して始終大なる損失を甘んじて居なければならないといふ事である。

次に『假名のタイプライターはローマ字のよりも二倍近くの速さで印刷が出來る』と云ふ博士の主張は大きな疑問である。これは前に私が述べた事のある假名書きをローマ字書きに書き替へた時の字數の殖え方――それは決して二倍には殖えないで通例一・六倍位になる――と云ふ事を御存知ない議論である許りで無く、假名のタイプライターでは其字數が日本式ローマ字の二・六倍にも殖える爲めに押釦を搜すのに餘計な時間がかゝるといふ事を全く度外視した計算である。

英語用の印字器を使ふ場合にはタイピストの眼は殆んど押鍵盤に注がれては居ない有様であるが數多い假名の場合にもそれが旨く出來るか――ローマ字と同速度で――は疑問である。氏の主張を推し擴めて行くと結局或數の漢字を交へた假名のタイプライターが一番良いといふ事になりはしまいか?

むすび

最後に博士は、日本語を表す所の國字としてローマ字を採用するといふ主張に對しては決して同意する事は出來無いと議論を結ばれて居られるが、どうか私の此論文と御自分の主張とをよく照し合はされて今一度の御考へ直しを望む次第である。

筆を擱く前に博士に對する御願ひを述べる事を許され度い。國字改良問題は昨今漸く火の手を擧げて識者の間に眞面目に論ぜられる樣になりましたが形象文字對音文字の議論は兎も角と致しまして、假名論對ローマ字論の場合には論者の見込みと判斷とが議論の岐れ目となつて居るために常に甲論乙駁を繰返して居るやうに考へます。これに對する最後の斷案を下すものは實に實驗

の成績に依るの外は無い。而して博士は此實驗をされるのに一番都合の好い位置に居られるやうに見受けますから、一つ御苦勞乍ら其方面の仕事を受持つて頂くわけには參りませんか。勿論此種類の實驗に必要な不偏不黨といふ事を念頭に置かれて。（大正十年五月大阪毎日新聞）

再び假名とローマ字に就て

――野上博士の假名論に答ふ――

前置き

事の起りは昨年の春である。京大教授文學博士野上俊夫氏は大阪毎日及東京日日紙上に國字改良新論と題する假名國字論らしきものを發表された。野上博士は我國の心理學者として卓越せる且尊敬すべき碩學であられる事と信ずるけれども、國字問題に關する氏の説には如何にも誤謬多く、これは氏の地位及學識の高いだけそれだけ世人を誤ることの多からん事を恐れて、直ちに私はそれに對する反駁文を東京日日及大阪毎日紙上で發表する事とした。丁度これと相前後して、ヘボン式ローマ字の熱心家櫻根醫學博士及私共と全く説を同じくする私共の先輩土岐善麿氏も、それぞれ大阪毎日及東京朝日紙上で野上説を反駁された事があつ

た。

丁度それから滿一年經つて博士は今月の『太陽』誌上に再び『假名とローマ字』と謂ふ長論文を發表された。此論文は博士が假名論者の立場から前記三名のローマ字論者に對する答辯として書かれたものであるが、それの內私に對して述べて居られる所が論文の大部分を占めて居る樣に思はれるから、更に私から同博士の尙誤解して居られる點を明かにして置き度いと考へる。

議論を進める前に、國字問題界に於ける深き事情を承知して居られ無い方の參考迄に一言して置かねばならぬ事がある。と謂ふのは野上博士が對手とされた吾々三人の內、土岐氏と私とは勿論どちらも日本式ローマ字論者として全然同一の立場にある者であるけれども、私共二人とヘボン式の櫻根博士とは必ずしも同一主張を持つて居るものでは無いと謂ふ事である。人によつてはローマ字論者が假名論者に對する時、ヤレ日本式だとか、ヤレヘボン式だとか言つて內輪のゴタゴタを表はすのは不利であると考へる者もあるけれども、事實は決して隱蔽すべきものでは無い。殊に野上博士が『外國語の攝取』と云ふ項目で櫻根博士に答へ

て居られる部分の如きは、寧ろ日本式ローマ字の方針と合致して居ると云ふ樣な事さへある。

ローマ字の日本式綴り方と謂ふものはどんなものであるか、しかしてまたこの綴り方のローマ字が何故に今日の盛況を贏ち得るやうになつたかと謂ふ事などに就いて論述するのは勿論この書き物の目的とする處では無い。それ等に就ての詳しい事は『日本のローマ字社』發行の左記書類について見られ度い。

田丸博士著

『ローマ字國字論』

同　博士著

『ローマ字文の研究』

前置きは先づ此位に切り上げて野上氏の文章の順序に從つて、これから逐一反駁に取掛ることにしたい。因に、各項目は氏が『太陽』に載せられたそのまゝを採る事にしてある。

一　議論の態度

第一に私は野上氏の本問題に對する態度の公明正大なことについて特筆しなければならない。『今後更にお互の研究を進めて行く内には、私が自分の考への誤つてゐた事を認めて三氏の軍門に降參する事になるかも知れない』と明言してをられる博士は私共にとつて最も張り合のある反對論者である。どうかいつまでも、この態度を持續されて野上博士が遂にはこのお言葉の通り私共の有力なる味方となられんことを望んでやまない次第である。

これに引換へて、この項目の最後の所で博士が田丸理學博士の國字論を評して『國字に關する精細なる研究の多くなさるゝに至つた今日においては、田丸博士の書物は既に餘りに古典的(クラシカル)なものとなつたきらひがある』などとケチを付けてをられるのはよろしくない。私は身を軍職に奉ずる多忙の身であるから或ひは寡聞の點もあらうとは思ふけれども、今日國字に關する精細なる研究が多くなされる樣になつたとはいふものゝ、田丸博士の研究にかゝるもろ〳〵の著書を古典的(クラシカル)だと蹴落とし得る程の名著、名研究の世に成つた事を聞かない。殊にその言葉につゞいて氏が『田丸博士の「ローマ字國字論」の中で假名を論ぜられた部分は僅に四ページにしか過ぎない』と述べてをられる如きは迂潤な話しといはねばならない。今日の『ローマ字國字論』には五十一ペ

ージに亘つて假名の事が論ぜられてあるのである。私は勿論本年の一月に同書の第二版が出版された事及びそれとおなじものが既に大正六年十一十二月及び大正十年一月二月の雜誌『ローマ字世界』に出てをつた事に氣付かれなかつた野上氏の迂濶さを笑ふものでは決してない。たゞ私はひとのものを古典的などと批評する人は常に自ら最近の國字論に注意して、その頭を古典的に墜らぬやうにすべきであるといふ事を御忠告したいまでである。

二　嘲笑と威嚇

本項の前半で野上氏の述べてをられることは約めていへば『靜かに議論を進めて行きたい』といふのにあるから別に論はないが、それの後半部で私の嘗て述べた事に對して論及してをられる事は一應私の口から辯解して置く必要がある。

漢字廢止に對する野上氏の態度が極めて齒ぎれが惡いといふ事については、私も新聞で述べて置いた通り(『併し野上氏が事實その通りに考へてをられるならばどうも致し方のない話しであるが、と書いてある』)また野上氏御自身もいはれる通り、これは人の性質による事だから問題にす

る程の事はないが、こゝで氏が、如何にも私が『一般に將來起るか起らないか解らない夢の樣な事を研究するのは無用である。その樣な閑事業には一切手を出さない方が得策だ』と斷言でもしたかの樣に書き替へて『このお考へは全然誤つてゐる』と批難してゐられるのは誠に以て心得ぬ話である。全體この事について私が何といつたのであるか當時の新聞を今一度讀み直して見られたい。

『…………若し漢字の長所と缺點とが丁度相匹敵するのであるならば、國字改良は現狀に波瀾を起したり、移り變りの抵抗を呼び起したりするだけ損な話であるから、その樣な閑事業に一切手を出さない方が結局得策だといふ事になるから所謂重要な問題ではなくなつて仕舞ふ。』（大正十年五月十五日東京日日新聞）

右の拔き書きが示す通り、『若し……ならば』といふ前置きのある私の議論に對して、野上氏の攻撃が全く的外れの議論であるといふ事が、頭のいゝ同氏に分からない筈がないのに、どうも不思議な話しである。

右の樣な次第であるから、從つて氏が最後の所で述べられた『海軍でさへも假りに某々國と戰

ふ場合を想像して議論を進めてゐるではないか』といふ比喩はテンデこの場に持ち出すべきものではない。何となれば『若し……ならば』の前置きがある以上國字改良といふ未來事件は起すべからざるものであらう、起すべからずと認めた以上、その人の議論の範圍においてはまたこの事件は起らないと見るべきであるからである。然るに某々國と戰ふといふ様な事に關しては、戰爭といふ未來事件のおこる事については相當の確からしさがあるものである。それ計りではない、たとひ假りに兩者共その事件のおこる確からしさが同一であつたとしても、起つたといふ事が國家に及ぼす影響は、決して同様のものといふ事は出來ない。

三　野上氏の實驗

この前も私が述べて置いた事であるが、假名とローマ字との比較で最も要用な事は讀み易さの問題である。書き方の難易といふ事も研究を要する問題ではあるが、それは寧ろ次等以下の事に屬する。何となれば、書籍や雜誌の事を考へても、數萬人の讀者に對して著者はたつた一人である様な場合が多く、また人類生活において大多數の人は彼れが讀む程は字を書かないのが通例で

ある。しかも今日ローマ字國において、書き方の遲速をあらそふ樣な舞臺は總てタイプライターの天下である。

日本心理學雜誌第一卷第四號で野上博士が發表された『假名とローマ字との書き方の速度に關する研究』は、この次等以下の問題についての研究であるといふ事を念頭に置きつゝ、これから私はそれの批判を試みるであらう。

野上氏の實驗は、その大部分について氏も承認してゐられる通り左記の特徵を持つてゐる所の不完全な實驗でゐる事は注目にあたひする事といはねばならない。

（イ）書き方の難易の內、書き方の遲速だけについての實驗であること。

書き方の難易といふ事はそれの速度の外なほ疲勞の程度までもふくんでゐる。しかしてこの點における片假名の要用な缺點は、それの線が切れ切れである爲に、始終ペンを上げたり下ろしたりすることが必要で、それが――特に早い書き物をする場合などに――思ひの外手をつからせるものだ。これはローマ字を書きなれてゐて、たまに片假名を書くときによく氣のつく事である。

（ローマ字國字論二一七ページ）

（ロ）被驗者が少數であるばかりでなく、總て被驗者としての資格が不充分で、假名に有利な方向にて片寄つてゐること。

博士の報告によれば、被驗者は博士御自身の外、楢崎、岩井の二文學士合計三名であるが、三名共すべて日本人であるばかりでなく、被驗者の張本人が假名論者であられるといふ事は、この實驗成績を餘り價値のないものにしてしまつた樣に思はれる。一方は小供の時から書きつけてゐる假名、片一方は中學以後しかも稀にしか書かないローマ字の事である。丸で練習の程度がちがふ。またタトヒ練習程度が同一であつたとしても、一方は幼い時から書き出したものだ。年をとつてからならつた一年は若い時の一年には敵はない。私は洋行までもされた野上博士の歐字に堪能であられる事については夢疑ふものではないが、それ程までに歐字に堪能な方は、それ以上にまた假名の早書きにも特別に堪能な方らしく想像されるのはどうし下さるのか。常識から考へて、これ等三人と丁度正反對な境遇にある歐米人を三人つれて來て、同一の實驗をした上で、兩者の成績を平均するのでなければ少くとも公平なやり方とはいはれまい。

（ハ）該實驗が、長い文章を書く事について行はれたのではなくて、第一種の實驗は假名の

一字あてについて、また第二種のものは假名の五字あてについての書き方の速度であること。

この點に關して野上氏は、櫻根博士の批難に色々と辯解してをられるけれども、これは櫻根博士の説の方が正しい。何となれば、野上氏の行はれた實驗からでも、第一種の實驗に比して第二種の實驗成績が明らかにローマ字のつゞけ書きに適してゐることを示してゐる。ローマ字の特長は長い文句のつゞけ書きに便利な樣に出來てゐる點であつて、字の實地の使ひ途がまたその方であるから、一字づつの實驗や、精々五字位の實驗は實際の比較にならない。

長い文章を書く事にすると、英文でローマ字書きになれてゐる人、必ずしも日本語のローマ字綴りに好成績であるといふわけに行かないのは勿論の事である。

(二)博士の擧げられた成績——片假名書記時間の一〇〇に對して、ローマ字は一六二、一八七、一五五、一六四、一五二などゝいふ——は文章中に出現する各字の度數 (frequency) を度外視した計算であること。

各字の出現度數を計算に入れることにすると、右の成績が多少ローマ字に有利となるらしく思

はれる。氏は『この成績より何れの方向に變るか分からない』といつてをられるけれども、これは度數表（frequency table）について調べて見ればすぐ分かることである。一例を擧げれば、野上氏の實驗においてすら片假名の二五・四デルタ費つたのに比して一六・〇デルタ時間で書き終つたローマ字のoは、野上氏の計算においては總ローマ字數九十四の内十回しか出現してゐない（卽ち〇・一〇六）けれども實際の文章におけるものはもつと出現度數が多くなつてゐる。

現在の文體から出したものは、總字數五九四二に對して八九〇字卽〇・一五〇となる。漢語の比較的少いもの卽話し言葉が主に使つてある Seiyō Monogatari と謂ふ本から出したものは總字數四四二六二に對して五五七五字卽〇・一二六となる。なほこの問題については他日更に精細なる研究にとりかゝりたいと考へてゐる。

（ホ）博士の實驗は濁音、半濁音、拗音及び促音については行はれてをらないこと。

これ等の場合にローマ字が著るしく有利となる事については博士御自身も認めてをられる所である。但これについて博士は、日本語においてはこれ等の音は全體の音の約一割をしめるに過ぎないやうにいはれたが、これは餘り正確な統計とはいへない。今私の手許にある統計によると、

總字數二萬三千二百六十七の內濁音だけでも二千三百二十字卽ち丁度一割あるから、それになほ半濁音、拗音（これが仲々多い）及び促音を加へると博士のお考へとは餘程相違してくるにちがひない。

さて以上述べた樣に、博士がこの實驗において、特に統計にあげる事を回避された點の殆んど全部がすべて、博士の得られた成績を、それと反對方向——ローマ字に有利な方向——に偏倚させる性質のものである事は特に留意を要する所である。勿論その內の或物の如きは偏倚させる分量からいへば僅なものである場合もあるけれども所謂塵も積もれば山となるで、偏倚量の總和は決して輕視すべき分量ではない。『不完全な實驗』といふ意味にも色々あるが、博士のはそれがローマ字に不利となるやうに偏したる不完全である事は遺憾にたへない。

右は博士の實驗に對する批評であるが、それは兎も角として、雜誌『太陽』における本項の博士の主張は要するにつぎの數句を出でてをらない。

『不完全ながらも兎に角私の方には實驗の成績が二つ程持ち合はせがあるのに、君の方では幾らかでも私の實驗の結果と反對になりさうだと思はれる實驗的若しくは經驗的の何等の根據をも示

されないではないか。君の方で示さない以上僕の方の勝ちだ』

これに對しては私達はたゞ一言答へればよい。『私の方にも野上氏のと反對の結果になる樣な實驗の二つや三つの持ち合せはあるが、その樣な不完全な實驗の成績をいそいで發表する所の勇氣を殘念ながら私共は持つてをらない。不完全なものを輕々に發表して世を誤る事を恐れるからである』と。

四　文字の纒まり

この項目で博士の强辯してをられるのは左の點である。

(イ)假名がローマ字にくらべて『纒まり』の惡い事は自分も認めてゐる。

(ロ)併し、讀み方の難易を規定するものは、字の「纒まり」の他になほ字數の多少がある。しかして假名の方が一般にローマ字にくらべて字數の少ないのは周知の事實である。

(ハ)ゆえに、私は敢ていふ。現在の假名を以てしても、ローマ字を用ゐるよりは讀み方だけにおいても決して劣つてゐるといふ證據はない。

この論は何の事はない、纏まりが惡いといふ假名の缺點は、字數が少いといふ利益で丁度救濟し得るから讀み易さの點ではまづ兩者甲乙ないといふのに外ならない。果して事實はさうであらうか、私共には信ぜられない說である。

全體讀み易さを比較する場合に、字數における幾何の減少が、「纏まり」の幾何に匹敵するものと考へ得るのであるか、この邊において野上氏の認定は餘程自說に有利な樣に解釋してをられる。野上博士のいはれる字數とはそも〳〵何の事であるか、若し「イヌ」を二字とかぞへ Inu を三字とかぞへて Inu の方が一字だけ多いからローマ字は讀みにくい（假りに「纏まり」の程度は兩者同一と見て）と斷定されるのであつたならばその御研究の荒つぽいのにおどろかざるを得ない。これは博士の御專門である心理學の初步に書いてある通り、字數の問題よりは寧ろ讀視野の問題である（これには單位字形の大小といふこともあはせて考へる必要があるが、それは後述する）。しかして人間は橫視野（ローマ字は橫書き）の方が縱視野（この場合の野上氏の論では假名は縱書き）よりも稍々大であるといふ事は暫く大目に見るとしてもローマ字書きの方が假名書きよりも長いといふ事は何を以て斷定し得るのであるかうけたまはりたい。

この點において最も滑稽なのは雜誌『解放』の四月號に出た早大敎授本田淺次郎氏の假名論である。氏は『假名の方が字數が少いだけ、それだけローマ字で書いた文章よりも短くて紙幅を取らない筈である。論より證據だ、左の二文章をくらべて見よ』といはれて次ぎの二例を出されたけれども、御覽の通り、論より證據は却てローマ字の方がみじかくて紙幅を取らない結果になつて仕舞つた。

一、ここ　え　はきだめ　を　すてるな。

Koko e hakidame wo suteruna!

二、うえき　の　えだ　を　をるな。

Ueki no eda wo oruna!

眼の衛生といふ點から見て假名の何號とローマ字の何號とを比較するのが適當であるかは輕々しく論斷する事の出來ない問題である。たゞ漢字交りの今日のものに對しては、ロンドン・タイムスの重要記事に使つてゐるといふ九ポイントのローマ字活字は日本の五號活字即ち一〇・五ポイント活字よりも遙に良好であるとの事である（醫學博士井上達二氏の調査に據る）。兎に角假名

論者の多くがこの點まで突きつめて研究することをしないでたゞ漫然とローマ字は假名にくらべて字數が多くなるからよみにくゝなるだらう位の見當をつけて論を立てゝゐられるのは考へが淺い。

視野の問題については第六項で再說する。

なほこの項目で野上氏の曲解が三つ程あるから左に列記しておく。

一、氏は福永氏及び多くのローマ字論者に大なる誤解がある。それは「纏まりのよい文字は常に讀み易く、離れ勝ちなものは常に讀み難い」といふ獨斷論だ』といふ風な事を書いてをられるが、これはまた飛んでもない濡衣を着せられたものだ。いやしくもローマ字を口にする程の人が『ローマ字は纏まりがよいから常に――印刷が不鮮明でも小さな活字を使つても、綴りがいくら長くても、また暗い所で讀んでも、眠い時に讀んでも、常に――讀み易い』などゝいふ馬鹿氣た事を考へる氣遣ひはない。讀み易くなるためには色々樣々な條件が必要なのであるが、われ〳〵は「まとまり」といふ事を研究する場合には他の條件は暫く不變なものとして議論を進めてゐるだけの話しなのである。

二、氏はまた私共のいふ所の「拾ひ讀み」といふ言葉を眼球が一々各字の上で停留する事を指すのだと解釋してゐられるが、決してさういふ意味ではない。讀書の際の眼球運動が飛躍的であることはよく心得てゐるが、眼球の停留回數と停留時間の比較的大なるものを指してわれ〳〵は「拾ひ讀み」と名づけてゐるのである。吾々がＨｕｎｅ ｇａ ｈａｓｉｒｕといふローマ字の縦書きを讀む場合でも眼球は一字々々の上で停留してゐる譯ではあるまいけれどそれを横書きにしたHune ga hasiru に較べて前者の方を「拾ひ讀み」と稱してゐるのである。

三、最後の所で氏が『福永氏や田丸氏などの考へてゐるやうに、現在の假名にはまとまりが少しもなくて一々ひろひ讀みをせねばならぬといふのは全然事實に反した考へである』などゝ書いてをられるのは至つて迷惑な話しである。私にしても田丸博士にしてもそんな事をいつた事や考へた事は一度もない。今一度昨年の東京日日（五月二十日）を出して見ればわかる通り、『假名の方は一字一字の粘著力が各方面に殆ど均一にあるかはりにその力が三方に分散してゐるために各方向の粘著力は弱い。從つて假名は一字一字が離れ離れの字たる事を免れ

ない』と述べたまでで、多少のまとまりが假名にもある事は充分認めてゐる所なのである。博士がこの樣に少しづゝ私の述べた事を書き替へて議論を立てゝゐられる部分は前の所にもあつたがこれは何も博士が故意にされた事ではなくて恐らくは博士のそゝつかしい性質――いひ過ぎた言葉であるが、博士は餘程そゝつかしいお方であるにちがひない――の然らしめた仕業であらうとは思ふけれども、かういふ事はなるべく注意していたゞかなければならない。何となれば、昨年私の反駁文が新聞に出てから既に一ヶ年を經てゐる今日では餘程の熱心家でなければ當時の新聞を保存してゐる人があるまいと思はれるからである。

五 「福永氏の實驗」

この項で野上氏の述べてをられる事に對しては前項で盡きてゐる。また氏は私がスラスラとローマ字文を讀み上げる事について色々と批評してをられるけれども、あの實驗は當時の書き物でもことわつて置いた通り、私が左まで重視してゐない所のものである。併し左の二つの事だけは今でも私は斷言し得ると信じてゐる。

（イ）私がローマ字文を讀んだ經驗は未だ極めて淺くて殆んどいふに足らないものであるけれども、今日ではスラスラとこれを讀む事が出來る。

（ロ）これに反して假名の方はどうしてもローマ字文を見た場合のやうに讀み得ない。

六　ローマ字の進化

冒頭において博士は『この點にもまして福永氏にお考へを願ひたい事は、氏の議論中に、假名文字は種々不完全な點があるために改良の試みが多くあるが、ローマ字には目下改良案などはないから、假名にくらべて完全なものだといふやうなお考へが或ひはあるのではなからうかと思はれることである』とことわつて色々な事を詳しく論述してをられるが、これは氏の臆測であるからどうでもよい様なものの一應私の考へを述べて置く必要がある。

いくら私がローマ字に熱心であるといつても、現在世界で使つてゐるローマ字卽ちアルファベットが人類理想の最高文字であるとは決して考へてはをらない。この事は野上博士が古典的（クラシカル）だと評せられた田丸博士の『ローマ字國字論』一五六ページにも載つてゐる所である。從つて今日歐

米諸國にそれの改良が考案されてゐるといふ事があつても別におどろく事は少しもない。たゞ野上氏は、山下芳太郎氏や高尾謙一氏の様な假名字形の改良家が假名にローマ字の様な性質を付與する事について腐心してゐられるのである――つまり改良假名論者はローマ字を目標としてゐるのだ――といふ事を承知されゝば事足るのである（山下氏著『國字改良論』及び高尾氏著『ニホンジ・ケンキュー』參照）。また私が『ローマ字は(中略)歐米諸國では永年の間不都合なく行つてゐる』といつた言葉にした所が、それが『われ〳〵が假名に對する程の不都合無く』の意味である事は文章の前後の關係から充分にうかがひ得る筈ではないか。尤もこの事は氏も最後の所で『歐米人がローマ字に不滿足の程度などにおいてわれわれが日本の假名に對すると差異があるかも知れないけれど』と斷わつてをられるから深く追究する事は避けるが。

『スズリバコ』とSuzuribakoの例にした所が私の述べた『ドイツ人が不都合なしに讀んでゐる』は總て假名に較べていつたまでの話しであるのに、氏は如何にも私が綴りの長さを讀み易さに無關係なものと認めてゐるかの如くに解釋して、一綴り三十一字からなる所のドイツ語の例を引合ひに出されるなどは餘りに極端な話しである。

それは兎に角、この所でこの前博士の述べられた事—— Suzuribako は『スズリバコ』にくらべて二倍近く讀みにくい——は誤りである。新聞の活字でいへば Suzuribako は長さ十三ミリ、スズリバコは十二ミリであつて大差なく、殊にエルドマン及びドッヂ兩氏が自國語の横文を讀んで測定した所によると、讀書運動中の眼球の一停留に對する平均讀視野の横徑が約廿四ミリであつたといふ話しである（松本博士『實驗心理十講』二五一頁）。

最後に私は野上博士のいつてをられる、讀みにくいローマ字について一言してこの項を切り上げたいと考へる。サンフオルドの實驗によれば o, u, a, n, c, s, e, z. などは讀みにくい側のローマ字となつてゐるけれども、彼れの實驗は一字一字露出してその讀みにくさを計つたのであるから、實際の文章を讀む場合にこの成績をそのまゝあてはめる事は穩當でない。何となれば彼れの實驗による所の優等字計りを六つ並べたものよりも、右にかゝげた劣等字をも適當にまぜて六字としたものゝ方がズット讀み易いといふ場合が少くないからである。從つて一字一字の試驗に落第した劣等字必ずしも不可でないのだ。

七 『分け書き』

本項において博士の述べてをられる事は私に對する御答辯ではないから多く述べる事を避けるが、それの冒頭において氏が述べてをられる『(前略)隨つてローマ字が今日までそれ等の點について改良を加へたやうに、假名もまた改良を加へる事は充分に可能であり、この改良を加へさへすれば、その點についてはローマ字と何等の區別がないやうになることは當然である』といふ事は――これとおなじ意味の言葉は氏の議論のこゝかしこで見受けられるが――氏が頭の中に左記の二つの間違つた考へを持つてをられる事から起こつてゐるものと見受けられる。

(イ)將來いつかはキット假名もローマ字の樣に進歩したものになる時代が來るだらう。そしてローマ字の方はその間は足踏をして居て吳れるだらう。

(ロ)假名がローマ字に比して根本的に相違して居る點は字數の多いことである。併しその多いと云ふ事は――ローマ字の廿六字(日本式は十九字だけ)に較べて四十八字(野上氏は拗音も一字で表はし度いと云ふ案を持つて居られるから、さうするとあと二三十字は增す事

になる）もあるといふ事は——文字の改良と云ふ上に少しの困難も與へない。右の內（イ）の考へが間違つてゐる事は博士自身が『歐米に現在のアルファベットの改良運動があるといふ事を福永氏は知つてゐるか』といふ前項の言葉でもつて充分に反駁してをられるから最早問題はない。しかして（ロ）項に對しては曾て私が新聞紙上で述べた言葉をもう一度繰かへせば充分であると考へる。

『（前略）ローマ字に字數が少いと云ふ事の利益は實にこの點にあるので——習ふのに暇が費らないと云ふ事などは之に較べれば實に問題とするに足らないのだ——假名の樣に數多い字が各れも簡單で見分け易く、しかも粘着力に富むといふ三拍子揃つたものになる事は（ローマ字に較べて）困難である』

八　假名遣と排列の方向

本項で假名遣ひに關して說いてある事は別に私から述べる必要はない。たゞ假名の橫書きについて一言辯じて置く必要がある。建築の設計圖に假名の橫書きがしてあつた爲め土間と窓と取ち

がへたといふ風な事件を博士は『極めて特別な場合に、極めてみじかい語の場合にのみ起こる事だから、こんな例から一般の場合の結論を引出すことは出來ない』といつてゐられるけれども、私はこんな些細な事件から一般の結論を引出す様な意志は毛頭持つてをらない。ただ博士が『假名がその性質上たてにも横にも書けることは、寧ろその一つの長所であるともいへる』とまでもいつてゐられるから、それは矢張り寧ろ缺點として取扱ふべきものであるといふ事を示したまでに過ぎない。しかもローマ字においては決して起こらない間違ひで、假名の場合には假令稀にでも起こる間違ひ、人類生活の上から見てどちらが優れてゐるかいはずと知れた話しである。

九　日本語を完全に表すか

諺に『唐紙(たうし)、唐紙(からかみ)假名で書け、醫者と石屋は文字で書け』といふ事がある。即ち前者は日本語を表す上において漢字の缺點を、後者は假名の缺點をいひあらはしたものである。ローマ字では「Tôsi と Karakami」、Isya と Isiya、正(まさ)しく區別が付く。この意味においてローマ字が漢字や假名にくらべてより一段完全に近く日本語を表現し得ることはさの疑ひもない事だ。

今日正式の書き方においては拗音を示す『ヤ』は特に小さい字を使はない事になつてゐるといふ事は周知の事實である。が併し今日の規定はどうでもよいとして、野上案の樣に『ヤ』を小さく書くといふ事は、土岐氏のいはれる通り、最小活字法則から見て感心しない計りでなく體裁も決してよいものではない、殊に電報文などでは、醫者を呼んで石屋が驅けつける事――建築家の病氣の時などは大いに警戒を要する――が矢張り起こり得るのであるから、これはどうしても間に合はせの策たる事を失はない。

野上氏は第二案として、拗音は出來るなら一字であらはしたい――促音の『ツ』の事についてはどういふお考へであるかよくわからないが――といつてををれるが、これならば拗音については勿論、私が以上述べた意味の範圍においては、假名の缺點は除かれる譯である。これは氏の學げられた足利氏の外に東京の小森翁も實施してをられる事だから、それの可能性は認めて上げなければならない。たゞこゝでも氏が考へちがひをしてをられるのは『新字を作つたために字母の二三十增すことは一時の學習さへやり遂げれば何でもない』といふお言葉である。假名に字數が多くなるまたは多いといふ事の弊害を單に字の學習といふ方面――殆ど問題にするに足らない方

面――から論じてをられるのは心得ない話しである。第七項の終りで私が述べた事を熟讀していたゞきたい所である。

この項目で野上博士が私共の主張してゐるローマ字の日本式綴り方をほめて下さつた事は誠にあり難い譯であるが、併し博士には未だ日本式綴り方がよくのみ込まれてをらない樣に思はれるのは殘念な話である。綴り方の約束が極めて簡單に覺えやすいといふ事も、たしかに日本式のすぐれた點ではあるけれども、それにも增して日本式のよい點は――ヘボン式にくらべて――矢張り日本語を表はすといふ上においてゞある。氏は『日本語を表はす』といふ事を、單に『日本音を外から聞いてそれを現はす』ことだけに解釋してをられるけれども、われ〳〵のおもに論じてゐる點は日本語の內面的性質――殊に文法上の――を現すといふ所にあるから、ヘボン式綴り方よりも一層完全に近く日本語を現はすといふのである。この事は前にかゝげた『ローマ字文の研究』に詳しく述べてあるからついて見られることをおすゝめする。また土岐氏のいはれた『假名よりも一層完全に近く云々』は『ローマ字國字論』の改訂版に詳しく書いてある。

一〇　外國語の攝取

前置きで述べておいた通り、この項目で野上氏の述べてをられる事は日本式ローマ字論者の立ち場と一致してゐるから別に論ずる事はない。氏がこの點において私共と同一意見を持つてをられる事は私共にとつては大なるよろこびの一つである。

一一　その他の些細な點

(一)ローマ字がやさしいといふのは、この前も述べて置いた通り綴り字までも込めてやさしいといふのである。それを博士は未だに『日本人何千萬が一生の間に讀み書きをするたびごとに字數及び綴字のために大なる損失をする』などゝいつてをられるのは妙な事である。兒童が ka を覺えたが最後、ka 全體を見て『カ』を感ずる筈であるから、その後の一生涯常に綴り字になやまされるなどゝいふ事は起こる筈がない。

(二)嘗て氏が『英語の Strength といふ字の如く母音の前にも後にも三つづゝの子音が付いて

ゐるやうな例は日本語には決してない』と斷言されたのに對して私が『八百貫(Happyakkwan)はどうか』と反駁した事がある。氏はこれに對して『八百を表はすのに ppy の三つの文字を使ふのが抑々ローマ字論者の便宜上した事である』と逆ねぢをくはされたが、さういふ論法をとると Strength の ngth も英國人の便宜上した事で ng 及び th 各一字でもよいといふ事になるから『三つ宛の子音が付いてゐる』といはれた氏御自身の意見がこはれて仕舞ふ理である。

なほこの所で氏が『これは福永氏が餘り音聲の事を研究してをられない事を示してゐる』といはれたのはどうでもよいとしてすぐその次ぎに『この場合の促音即ち日本語で「ツ」の字を以てあらはさるゝものは、決して二つの p や k が重なつたものではなくして音の中絕である(中略)それを二つの文字を重ねて書くのはローマ字論者の便宜に定めた事であつて、實際の音とは無關係である』と斷言されたのは一應尤もらしく聞こえるけれども未だお考へが足りない。氏の樣にそれを音の中絕と見るならば當然『發達』は Ha'tatu と書き『八百』は Ha'pyaku と書くべきものであらうけれども、この兩者を發音する場合にその中絕直前の口及び舌の形を調べて見ると『發達』の場合には口は僅に開き、舌端は上顎の前方に密著してをつて明らかにTの子音(父音)を出

す形ちとなつてゐるにかゝはらず、『八百』の場合にはロは全く閉ぢて舌は上顎に觸れずして明らかにｐの子音を出す形ちを採つて中絶してゐる事に氣が付くであらう。ゆゑに中絶前の形を前記の様に兩者共同様の Ha' でもつて表はしてゐるのは適當でない。これは田丸博士の『ローマ字文の研究』にも書いてある通り、寧ろ Hat'tatu, Hap'pyaku とするすべきであらうけれども日本語としては（'）がなくてもまぎれるおそれがないから、それを略して Hattatu, Happyaku と書くことにしてゐるのである。なほ日本式綴り方と音聲學（Phonetik）との關係については『ローマ字文の研究』について見られたい。

(三)氏は次ぎに『ローマ字に字數が少いといふ事は、索引などを作る場合に非常に便利であることは、「ローマ字引」と「イロハ字引」との便利さを比較して見ればすぐにわかる話しである』と述べた私の語尻をとらへて、『試みに反問したい。索引を一生涯の内一度でも作る人は何人あるか、氏が書き方よりも讀み方の大切なる事を說かれた所に、讀者は多くして著者はたゞ一人だといはれた事は丁度この索引の所にも應用される』と逆襲されたのはイヤハヤこの福永恭助何とも申し譯がない。野上氏の全文を通じて、これはと思ふ個所はどこにも見當らないが、こゝだけは

たしかに參つたのである。「索引を使ふ場合に」といふべき所を誤つて私が「索引を作る場合」といつてしまつたのである。尤も常識のある人なら、『ローマ字引とイロハ字引との便利さを比較して見れば云々』といふ後半句から判斷して、私が使ふ場合の事を指してゐるのであるといふ事位は見當が付きさうにも思はれるが、それは第三者のいふ事で、現に野上氏の樣に解釋してゐられる方がある以上、書きちがへをした當の責任者たる私は、たゞ平あやまりにあやまるより外に致し方はない。

本項の終りの所で氏が『若し馴れの程度が同一であるならば、イロハ字引もローマ字引も便利さに變りはない』といふ意味の事を斷言してゐられるけれども、私共職掌柄、萬國船舶信號書などを引つけてゐるからこの事には充分の確信を以て野上說の誤りである事を斷言してはゞからない。お望みとあらばこれこそ幾十、幾百、幾千の統計でも提供する事が出來得るのである。

(四)タイプライターの問題については、博士はなほ多くの誤解と不案內とを持つてゐられるらしい。これは一度博士が本物のタイプライターを御覽になられゝば、御自分の考へが誤つてをつた事にすぐ氣付かれるにちがひない。六十餘の押し釦を持つてゐる西洋のタイプライターの大文

字小文字と數字と記號とがどんな風にならべられてあるかの實況を一見されゝば、こゝに書いてある疑ひは氷解する筈である。

次ぎに、これは野上氏もいはれる通り誠につまらぬ事であるが、私は自分の述べた事はどんなこまかな事にでも無責任であり得ないといふ意味においてお答へする。曾て野上氏が新聞紙上で、『今日でも西洋出來のタイプライターをそのまゝ用ひて字面だけを假名にしさへすれば立派に假名のタイプライターが出來る。今日普通の西洋の印字器の鍵（押しボタン）の數は四十六七あるから丁度それに假名を配置するにも都合がよい』といはれたことに對して私は『四十六七といふ押しボタンの數も怪いが云云』と述べたことがある。この『怪い』が餘程お氣に召さなかつたと見えて氏は『かやうな輕率な言葉は避けられた方がよかつた、現に京大文學部のローヤルの印字器キーの數が四十七、文字のみのキーが四十二ある』と述べてをられるけれども、これは却て私の言葉が輕率でないといふことの證明にしか役立たない、即ち四十六七といふのは間違ひで四十二が本統なのである。假名を配置する事を目的とする以上、（そしてタイプだけを假名に改造する事を考へる以上）殘餘のキー五個（Margin Release, Back Space, Shift Key, Shift Lock, Sh-

ift Key――ローヤルについていふ）に何一つだつて當て嵌め得るものではない。いくら京大文學部のローヤルだつて、Margin Release の鍵を押して眞逆、字が出てくる筈はあるまい。しかしこゝで最も不思議なのは博士がなほ筆の勢ひで『ウエリントンはたしか三十ぐらゐ、私が座右に使つてるるハモンドは三十六のキーがある。印字器も種々の種類がある』と書いてをられる事だ。そもそも博士はもともと何を論ぜんがために普通四十六七あるといはれたのか。脫線とは蓋し斯かる事を指すのである。

次ぎに、わが國字として、日本式ローマ字を採用すると、それの字數は十九字であるから、假名を使つた場合に比して字數が二・六分の一に減少する結果、日本式ローマ字のタイプライターは假名のタイプライターにくらべて押しボタンをさがす上において時間をはぶく事が出來るのは自明の理である、この事について野上氏は『福永氏は假名採用の不利な點の一として印字機でもライノタイプでも印刷電信機でも外國で立派な發明があつたとき、たとひそれを假名用に改造し得たとしても、日本かぎりのものが經濟上世に行はれるやうになる事は多少困難でもあり云々といふ事を擧げられたが、さうだとすると十九字のタイプライターを作るといふ事は少しく當を失し

てゐる』と述べられたが、これは私共の使つてゐるタイプライターを御存じない氏にとつては誠に無理からぬ疑ひである。

たゞ今私共の專ら使つてゐるタイプライターは「日本式コロナ」といふものであつて、英文や佛文を打つものをそのまゝ使つてゐるのではない。勿論英文用のものをそのまゝ使つて使へぬ事もないが、日本式ローマ字には「日本式コロナ」が最も工合よく作られてゐる。かういふと、そんな日本特有のものは經濟上世に行はれまいと御考へになるかも知れぬが、これはローマ字用のものを假名用に造り代へるといふ程の大改造はしてないから經濟上の點では普通のコロナと少しも變つてゐなくていづれも同一値段で賣つてゐる。內輪の御話しを申し上げれば、昨年「日本のローマ字社」は「日本式コロナ」の方を英文用のよりも五圓程廉くして朝日新聞に廣告した所が、米國コロナ會社の代理店からお目玉を頂戴したといふ程のものである。なほ「日本式コロナ」として、日本式ローマ字に使はない文字の始末などについては、これだけの說明ではお分かりになれぬ所もあるにちがひないから、野上氏にしても讀者にしても、一つそれの實物を購求される事をおすゝめする。それの第三回の荷は先日「日本のローマ字社」についた計りであるから。

電信については、野上博士は全く門外漢でゐられると見えて、『論ずるまでもなく字數の少いだけ假名はローマ字に比して利益である』などゝ間ちがつた事を書いてゐられる。ローマ字の利益は特に電信の方面で顯著なのであるから、私は機を見て『電信と國字問題』といふ標題の下にそれに關する意見をおほやけにしたいと考へてゐる。

(五)外國との關係において博士はローマ字が世界共通の文字であるといふ事の利益を全然無視して『今更特に眞面目に答へる必要を認めまい』といふ風な不眞面目な言を吐いてをられる。私にはいせると、度量衡なればこそ世界共通の必要があるので、文字は全く別なことである』とは實におどろき入つたるお言葉である。この事については私は昨年十一月の中央公論誌上で「外國語ののさばりこみ」といふ標題のもとに稍々詳しく論述して置いたからついて見られたい。

一二 む す び

A——去年の論戰から丁度まる一年經つてゐるからN博士は何か新らしい研究でも發表されたのかと思つたら、これぢや唯去年の議論を蒸し返したといふだけぢやないか。

B――相變らず例の書き方の實驗を楯にとつてね。

A――一體全體N博士の主張する假名の正體はどれなのだらう？

B――さあそれだ、一番困るのは。或時は片假名說であつて見たり、また平假名と兩方共採用するがいいといつて見たり、さうかと思ふと改良假名說に變つたりするから誰しもその正體を見屆けたものは無い。先づ幽靈みたいなものだらうよ。

A――詰りまあ善意に解釋すればいづれいつかは――千年も經つたら――自然と立派なものになるから、その時出來上つたものが博士の假名なのだらうな。

B――そこだ。博士の假名はまだ完成しない理想のもの、それに比較されるローマ字は現實のもの、そこに博士の假名とローマ字との比較論に根本的の矛盾が潜んで居るのだ。併しその方はまだ好い。『醫者』と『石屋』の場合になると拗音は一字で表はすことにすれば紛れる心配は無いと答へて置き乍ら、タイプライターの印刷速度の比較の處へ來ると、拗音一字說などは考へた事も無いやうな顏で、假名の字數を四十六七に數へてローマ字に對抗させる筆法にはホトホト閉口だ。孰れにしても自分で主張する假名はこれならこれといふ事を具體

的に定めて貰はなければ議論がし難くて困る。

A——瓢箪鯰といふ奴かね。捉まへ處の無いところが議論上手と云ふのさ。君の樣に何でもテキパキと片を付けようとすると却つて議論に負けるよ。

B——それはさうと、昨年の議論の時出たことで今度氏の答辯されなかつた事は凡てN氏も自說の誤を認めて居られるものと受取つて然るべきものだらうか。例へば縱讀み横讀みの問題だとか『日本語の純正を害す』だとかいふ事にした處で。

A——それが君の惡い癖だ。人をそれ程迄も追窮するものではない。全體今度の文章にした處で凡て針を含んでるぜ。

B——さうかね。書き直すとまた意を盡さないといふ事になるし……まあ今度だけは御免を蒙つて矢張りこの儘出す事としやう。言ひ廻し方が下手だから隨分言ひ過ぎたと思はれる個所もあるだらうが、兎に角僕はN博士を私共ローマ字黨や日本の恩人だと思つてるよ。少くとも假名國字論は迚もローマ字國字論にかなは無いといふ事を世の中に知らせる機會を與へて下さつた點に於いて。

Ａ――それ、その物の言ひ方だ。君の一番悪い癖は。（十一年七月大阪毎日所載）

儒教とローマ字

――思想の善導は日本文を透して――

今は故人となられたが、法學博士高橋作衛氏は嘗て貴族院で、『(前略)斯くの如く國民の思想が動搖しつゝある今日、苟も大臣の訓令ともあらうものを時流に阿つて口語體などで發表して、思想の動搖を煽り立てる樣な行をするとは誠に怪しからぬ』と謂ふやうな意味を述べて、時の文部大臣中橋德五郎氏に喰つて掛つた事があつた。其後中橋氏の創設した臨時國語調査會は、それ等の議論には一切お構ひ無しに着々と漢字制限の具體案を作成し、尙引續いて口語體に關する研究に沒頭して居る。さうかと思へば一方では、漢學振興に關する建議案は今春の議會を通過して、大木鐵相、江木千之老始め貴衆兩院議員を以て組織された「大東文化協會」と呼ぶ漢學振興團は少からざる豫算を擁して昨今頻に活氣を呈して居る。而して

六月初旬東京に開催された全國中等學校長會議に於ける中等科の漢文廢止論も之等の人々から多大の壓迫を蒙つたやに聞き及んでゐる。元來、國字改良系統に屬する議論は、ローマ字國字論にまれ、假名論乃至漢字制無論にまれ、凡てこれ國民一般の使ふべき日用文字を如何にすべきやの問題を議して居るのであつて、漢學專攻の專門家養成を目的とする「大東文化學院」とは毫も杆格すべき理由を見出さないのであるが、世には往々兩者の運動を相對立させて考へる誤解者が少く無いのは遺憾に堪え無い。若し夫れ「坊主憎くけれや袈裟迄憎い」式に、自己の狹隘な趣味や感情論から出發して、互に他を排斥する者があつたならば、共に談るに足ら無い人物と言はなければならい。呉々も斷つて置くが、他日吾々の理想が實現して、我國が「ローマ字の日本」となつた曉でも吾々は專門家の漢學研究を毫も排斥しない計りで無く、寧ろ共れの奬勵を望む者である。

次に掲げる論文は私が嘗て或る漢學者及漢學で頭の固まつた人々の集會席上で述べた一節である。ローマ字論者の主議方針をよく呑み込んで居られる人々に對しては勿論釋迦に說法の類であるが、反動思想流行の折柄、漢學に對する私共の見る所を一應明かにして置く事は

決して無駄な事ではあるまいと思はれる。因に、此講演に對する聽衆を、右の「大東文化協會」に屬する人達と假想されることによつて讀者は一層私達の考へる處を捕捉する事が出來ると謂ふことを附け加へて置く。

一

これ迄各種の人々に對して國字改良を宣傳して來た私の經驗に據ると、ローマ字論者の吾々にとつて一番の苦手とも稱すべきは、何と云つても漢學で頭を鍛へられた貴君方である。併し乍ら、吾々にとつて有力な味方も亦あなた方の中から出て來る事が決して少く無い。それと謂ふものが詰り、皆さんがローマ字に反對されるのは『ローマ字を採用しては國家の爲めにならない』と謂ふ考が基となつて居るのであるから、若しローマ字が國の爲めになると謂ふ事さへ認められれば、却つて熱心なローマ字論者に變られるためである。此意味からして私共は、今日の我國に多く見られる、自分一身の事だけしか考へない處の其日暮しの新らしがり屋――此の手合は何れも判を捺したやうに、ローマ字に贊成するのでも無ければ反對するのでも無い――に較べて、皆様

のやうな手酷(てごは)い反對論者に却つて多大の敬意を拂つて居る次第である。兎に角、日本の文字を換へると謂ふ事は吾々日本人にとつて極めて重大な問題である——日本人が自分自身で解決を着けないで、誰がそれを考へて呉れるだらう?——から、國の前途を思ふ人は必ず賛成か反對か孰れかの態度に出なければ嘘である。さう云ふ意味に於いて私共は此問題を丸で他人(ひと)の仕事か何ぞの様に眺める人々に較べて、寧ろ皆様のやうな手酷しい反對者に少からぬ共鳴を感じて居るのである。

二

さて、漢學で頭腦を鍛へられた人々の意見の內にも色々な類があるが、皆様に共通した代表的意見とも云ふべきものは多く次の様な形で顯はれて居るやうに思はれる。

『ローマ字の色々な利益は認めるが、併しそれ等は概ね物質的のものであつて、精神的の方面では却つて容易ならぬ不利がある。吾々は今日ですら日本人が忠とか孝とか謂ふ精神——卽儒教の精神から段々離れて行く事を恐れて居る。それが若しローマ字の世の中となつた曉

には、恐らくは之等の精神は日本人から絶滅して仕舞ふ事になるであらう。日本乃至日本人が蒙る處の此大失損は物質的の利益などでは迚も償はれ無い』

成程これは苟も國を憂ふる者の當然起す可き疑惧の念である。祖先から引繼いだ美しい精神はどこ迄も後々に正しく傳へなければならない。が併しあなた方に共通なこの御意見にはも少し突き詰めて方へて見る點が殘つて居りはしないか。さう云ふ議論には何か誤解、誤謬と云ふやうなものが無いか。吾々はそれを今、次の二方面から吟味して見る必要がある。

第一　外國文の飜譯と云ふこと。

第二　ローマ字日本語と儒教の精神。

（「ローマ字日本語」とは「ローマ字文に使ふべき日本語」と謂ふ意味であるが、とりも直さずそれは本統のいいいい日本語と謂ふ事に外ならない）

三

諺に「所變れば品變る、浪速の蘆は伊勢の濱荻」と云ふ事がある。殊にこの、所の變り方が日

本と外國と謂ふやうに著しい場合には、品物——眼に見えるものも、見え無いものも——の變り方もそれに相應して著しいものである。從つて國民或は民族の思想と謂ふものも國々によつて多少の差違の起るのは怪しむに足ら無い。

次に問題に立ち歸つて、一般にどこの國の書き物でもこれを日本語に飜譯する場合に、原文と些の相違も無いやうに書き替へると云ふ事は決して出來るものでは無い。何故なら、既に思想が日本と外國とで前述のやうに違つて居るからには、其思想を表はす處の國語にも相違があるのは當然な事であるから、外國文にある樣な言葉の意味に丁當度て嵌まる處の日本語が常に必ずあると云ふ事は望まれ無い話である。即外國文の飜譯といふ事はもともと難しい筈のものであつて、原文の本統の意味や味を知り度い人は飜譯文に依ら無いで、その原の外國文がすら／＼と讀めるやうに外國語の研究をしなければならないと云ふ結論に到着する理である。

併し乍ら此處で私は一言斷つて置かねばならぬ事がある。それは、原の外國文の本統の意味や味を知り度い爲めに外國語の研究をしなければならない人は或る特別な種類の人だけであつて、日本人の全部がそれが爲めに外國語（しかも澤山の種類の外國語）を習ふと謂ふ事は必要な事で

も將又出來得べき事でも無い。一般の日本人は當然飜譯文の方で我慢す可き性質のものである。

完全な飜譯と謂ふことの望まれ無いのは既に述べた通りであるが、それでも、世の中の實際の役目に差支ない程度に之を飜譯する事は左迄難かしい事業ではあるまいと思はれる。この事は、近頃我國でマルクスやクロポトキンやラッセルやの飜譯物が餘程强い力で國民の思想に動搖を與へて居るのでも窺はれるし、尙又それ等の或種類の發賣に對しては我國の官憲が嚴重な取締をして居る事實からでも證明し得られる。何となれば、官憲の取締るのはそれの國民思想に及ぼす影響を認めて居るからである。而してそれは言ふ迄も無く、飜譯の成功を是認することに出發して居る。

四

扨次に、以上述べた事柄が儒教の場合に當て嵌まるかどうか、當て嵌るなら其程度はどんなものであるかを述べて見る。

第一 私は、儒教を實際の用向――卽儒教の精神を傳へて國民を教育陶冶すると謂ふ事――に

差支への無い程度で日本語に飜譯するといふ事は充分可能であると信ずる。

　これは前の項目で述べた事柄から考へて當り前な事であるが、昔の塾などの實際も此の樣な有樣であつたかと思はれる。吉田松陰であるとか、藤田東湖であるとか云ふ先生にした處で、凡て皆其當時の日本人の話す處の日本語を使つて、忠孝の教義を口述したものに違ひ無い。而して私共の唱ふるローマ字なるものが、耳で聞いて判る日本語なれば何んなものでも遺憾無く書き表はし得るものである事は皆さんの疾くに承知の事である。

第二　儒教は元、支那から傳はつたものではあるけれども、その精神――例へば忠孝の精神の如きは本家本元の支那では今日殆んど見ることが出來ないに拘らず、我國ではこれが全く日本化されて居ると謂ふ以上（諸君が怖れて居るのも、實は全く日本の道德となりきつて居る處の此の精神が日本人から逃げ失せる事にあるのではなかつたか！）、それは今日では日本の思想であつて決して外國の思想ではない。而して、日本人の思想は當然日本語で言ひ表はす可きものであり、且又言ひ表はす事が出來るやうに日本語を發達させなければならない。

詰り、儒教の場合は之を「外國文の飜譯」又は「外國の思想を傳へる」と稱すべきものでは無

くて、それは今の世の中で、日本だけに見られる處の日本人の思想を言ひ表はすと謂ふ問題でなければならない。

五

議論を改めて『何故(なぜ)現代の青年が論語のやうなものを讀まなくなつたかと云ふ事を靜に考へて見ると、私は次の二點をその原因に擧げることが出來る。

第一　世の中が變つて來たために、論語にあるやうな思想其物が歡迎され難くなつたこと。

第二　論語が今日の青年否日本人の大部分に難しくて讀み難い處の漢字で書いてあること。

これ等の內第一の原因はローマ字の力で直接どうする事も出來無いけれども、第二の原因はローマ字の採用と共に忽ち除去し得る處のものである。

扨始めに立歸つて『ローマ字を採用すれば忠孝の精神が絕滅に歸して仕舞ふ』と云ふ說は全くの杞憂に過ぎ無い計りで無く、それの採用は却つて此精神を弘く民衆に植ゑ付けるに妨げとなる處のものを除き得るのであると云ふ事に皆樣は氣付かれたと思ふ。儒教の有難さは決して漢字の

形式にあるのでは無い、その精神にあるのである。而して論語のやうなものを判り易く讀み易いローマ字日本語に飜譯して、日本人を儒教の方に引き込むと謂ふ仕事は是非論語を詳しく研究して居られる處のあなた方に御願ひしなければならない處である。此點から見ても皆さんが私達の仲間――日本ローマ字會員の一人となられることを切に御薦めする次第である。

附言、尙此外に「忠」とか「孝」とか謂ふ漢字共物に有難い意味があるのだといふ議論に對しても私は相當の說明を附け加へることを忘れなかつたけれども、その事に就ては別に又改めて書く折があると信じて、本稿から省くことにした。（大正十二年六月十四日）

新帝都のスタイル

彼のラフカディオ・ハーンはローマ字反對者である。彼れの著書を讀んで、『西洋人すら日本の國粹の年と共に凋落するを悲んで居る』といふ世の國粹保存論者に此一文を呈する。

一　ビアード博士の美觀論

震災當時は往來や庭先きにも臥し、玄米の粥も有難く啜つた身だ。神樂坂や道玄坂の灯を見て一時は世にも美しい街だと眼に映りもしたが、時經るに從つて心にゆとりが出來てくると段々贅澤な氣分も起きてきて、今日此頃になつて帝都復興問題がやかましく論ぜられるに連れて、都市の美觀といふ事を人々が考へるやうになつたのは誠に尤もな話である。

あの事が起ると、世間では俗に「大風呂敷の後藤」と稱へる處の、そしてその實ハンケチ位の大きさのケチな計畫しか持ち合はせの無かつた、その後藤東京市政調査會長兼復興院總裁の招電

で逸早く、遙々と燒野ヶ原に馳せ參じた市政調査顧問のビアード博士は、帝都の尊嚴及美觀と云ふ事に就いて次のやうな意見を、會長を經て日本國民に披瀝したと云ふことである。

曰く『歴史の舞臺は大西洋より太平洋に移りつゝあります、日本はこの舞臺に於て立役を務めるでありませう。而して東京は多くの印象深い場面の舞臺となるのでありませう。それ故に日本の帝都としての特異性を持たねばならぬ事は極めて重要な事柄であります。貧弱なる帝都は列强の間に伍して國家の威嚴を傷けます』

又別に曰く『新帝都は如何なる價を拂つても氣品を備へることが必要である。而してその氣品と、帝都としての特異性を表現する形式は、日本固有の美術と建築とに據るべきである。日本の美術家と建築家とが日本の帝都を西洋風の設計と建築とを以て非凡なる品位を與へる點に於て歐米の美術家や建築家を凌駕し得べしとは信ぜられない。日本に於ける歐米の模倣の大部分は失敗にして滑稽であり常都の權威を下降せしめまた外國旅行家に何等の興味をも與へざる結果となるだらう。今日の丸ノ内式は米國第三流の都市程度の品位しかない』と。さうしてその具體案として博士は左の四項を擧げて居られる。

一、凡ての新公共建築物に明白なる日本趣味を加味すること。
二、凡ての新紀念碑を純日本式とし、西洋式なる石又は青銅紀念碑を斷然排斥すること。
三、街路及公園の設計に際しては舊東京の美觀と品位とを出來得る限り保存すること。
四、上記事項實行の爲めに日本美術家及建築家を委員として任命すること。

上品で而も堂々たる都を造ることに就てはもとより私は異論はない。而して又、都市計畫に就ても、帝都復興に際しても心から東京のため帝都のためを思つて、該博な知識と豐富な經驗とを提げて助言者としての最善を盡して下すつたビアード博士に對しても私は厚き感謝の意を抱いて居る者である。が併し新帝都を所謂日本趣味で飾れといふ所の博士の所説に對しては今遽に贊意を表する事が出來ない。

二　西洋人の批評

日本の愛好者として知られて居る或米國人が持前のフランクネスを曝け出して云つた。

『私の可愛い日本よ！　お前は何だつて又そんなに私達の眞似——而も下手な出來損ひの眞似な

んぞをしたがるのだ？　私は小泉八雲の本でかねがねあこがれて居たミカドの國を見物に來たのに、其處には最早私の望むものは一つも見られはしなかつた。猿眞似の日本人よ！　お前達は何故又、アノ美しいキモノを捨てて、お前達のやうな足の短い胴長に少しも似合はない洋服なんぞを着けたがるのか？　歐洲の美術に革命を起さした雪舟や北齋の國の人が巴里指して東洋風でない繪の修業に出掛ける者何十人何百人といふのは、これは又どうした事か？　私の國でも二流三流所のビルヂングや、文化住宅といつては安つぽい洋風擬ひの建築を建てゝ喜んで居るお前達の氣が知れない。自分自身の持物の美しさと價値を知らぬ今の日本人の情ないことよ！　私達はもう今日、日本へ來て見且學ぶべき何物をも見出さない！』

世の所謂國粹保存論者達よ、かう云ふ風の僞らざる西洋人の批評を聞いて『それ見たことか、貴樣達のやうな外國かぶれの西洋模倣屋の、その本家本元である處の西洋人こそ却つて此のやうに日本の西洋化を嘆いて居るぢやないか。西洋でも本當に日本の爲めを思ふ人は日本の國粹を賞めて居るのだ！』などと見當違ひの結論を作り上げてはならない。暫時私達の言分に耳を傾け給へ。

一番先きに考へるべきことは新日本の理想は如何といふことだ。新日本人は、春の櫻と秋の紅葉とさうしてフジヤマとヨシワラとゲイシヤ・ガールとミヤコ踊りとを見物に來る處の西洋人殊にお隣りの米國人の落して行く小金を目當として東洋の隅に小さく生きて行くことを國是(?)とすべきや。それが爲めには東洋趣味といはうか彼等の謂ふ所の日本式特異性なるもの丶極端なる發揮が極めて必要であつて、觀光客の好奇心もそれによつも滿たされ、從つて國に落ちる金高も大に増して來る理である。それとも又柄にも無い謀叛氣を起して泰西第一流所の文明國の行ふ所を我も行ひ而も尙彼等と伍して少しもひけをとらぬやうに、手つ取り早く云へば、テニス界の熊谷や球突きの山田浩二や洋畫の藤田君や醫者の野口英世氏の如き行き方に倣ふべきやと云ふのだ。

我尊敬すべきビアード博士が、たとへ日本の風物を愛好するの餘とは云へ、其意見の中に「骨董品としての日本」を餘り多く見て新日本の精神を深く了解されないやうな言葉を吐かれたことは殘念の極みである。はじめから『日本の美術家と建築家とが日本の帝都を西洋風の設計と建築とを以て、非凡なる品位を與へる點に於て歐米の美術家や建築家を凌駕し得べしとは信ぜられな

い』と云つて博士は日本人の腕前を否定して掛つて居られるのではないか。

尤も、打眺めた處事實歐米殊にヤンキーの貧弱な模倣だらけな此國を見ては、日本最屓の西洋人が右のやうに思ふのは一應も二應も無理からぬ話であるが、『歐米の美術家や建築家を凌駕し得べしとは到底信せられないから』といふ前提から出發して居る意見に賛成することは、たとへそれが眞實國粹保存の意義に適つて居ても、又日本人にその能力のあるなしは別としても、吾々日本人の到底堪へられる處ではない。

詮じつめれば、彼等異人の眼には日本人はまだ小供なのだ。小供は小供らしくして其特異性を發揮して居れば大人に好かれるのである。處がだ、日本といふ其小供がどうあつても大人の眞似がして見度くて堪らないのだから彼等から見て誠に始末に了へない。親父の帽子を被つてガバガバな靴をはいた態は滑稽にして失敗だと見へるかも知れない。併し小供本人はそれで居て仲々得意なのだからどうも致し方が無い。

その小供は物心が付いてから色々と大人の眞似をして見た。政治に經濟に教育に司法に軍事に藝術に。そして僅計りの取除けを除いてそれ等の大部分が概ね成功をかち得たのだから決して笑

ふ譯には行かない。私の專門の海軍に就ても、最初は英國から御雇ひ教師を招聘して、西洋の眞似をして作つて見た日本海軍は、物の美事に支那もロシヤも打ち破つて仕舞つたのではないか。

其當時はまだ、立派な軍艦は國內では造る事が出來なくて外國殊に英國の造船所に注文するのが例になつて居たのだが、それが今日では扶桑、山城、伊勢、日向と云ふ具合に、凡て日本の技術家の設計と建築(?)とを以て造られつゝある計りでなく、遂には三大海軍國の一に位して、海軍休日(ネバルホリデー)の前の最後の大戰艦「長門」及「陸奥」は設計工事威容共世界に冠たる代物だと迄言はれたではないか!

最後に吳々もビアード博士に御斷りして置くのは、新帝都建設に當つて、新都が外國旅行家に興味を與へるや否やと云ふ事を餘り問題にすることを謹んで頂き度いと云ふ事である。申す迄も無く今日迄外國の觀光客が年々我國に落して行つた金額は相當の高に登つて居るであらう。併し外人の落して行く金で暮して行くために、外人の好尙に迎合するやうな都市を作れと云ふことを思はせるやうな御意見を採用するには古來日本人の頭(づ)は餘りに高い。ジヤパン・トーリスト・ビユローの仕事やお寺のやうな奈良ホテルを建てゝ漫遊外人の意を迎へて居る鐵道省邊りの仕事を見

て日本人全體の理想を曲解してはならぬ。

而して又假令日本の現狀がその理想の半ばにも到達して居なくても。

要するに西洋人の批評といふものは一般に、己れを一段高い處に置いて――丁度大人が子供を見るやうな態度を以てなされた處のものであつて、せいぜい善意に解釋しても、日本をただ小さな可愛らしい國、自分達の好奇心や趣味を滿足させて呉れる處の珍らしい國として殘して置き度いと思つて居るに過ぎない。それは西洋人として誠に無理からぬ希望であり、尙又この程度の日本贔屓でも日本を理解する外人の少い今日では日本にとつて誠に有難い位の人達ではあるが、旣に我國及國民を一段と見下げてなされて居る所の彼等の日本趣味保存論を聞いて百萬の味方を得たやうに自惚れる所謂附の國粹論者こそは誠に以てお芽出度い限りではある！

三　新日本の表現が第一

役者が西洋人である場合は勿論の事、たとへそれが日本人である場合でも、西洋に居て日本の芝居を見せつけられた時は誰しも一種いやな感じのするものである。それの原因は彼等の所謂

日本風(ジヤツパニーズ・スタイル)と稱する風俗から來るのであるが、西洋人の役者の場合には多く日本人の生活に對する無智から、そして又日本人の演ずる場合には同じやうに無智な觀衆の趣味に迎合するために故意(わざ)と仕向けられた結果、登場人物の風俗習慣は恐ろしく畸形的な日本の代表である。吾々日本人の今日の生活とは勿論似も付かね場面であるが、さりとて歌舞伎に現はれるやうなものとも違つて居て寧ろ吾々には支那の様式の濃厚な臭味がする處は、日本贔屓の西洋人が建てる日本風茶室(ジヤパニーズテイーハウス)と稱する建築物とよく似て居る。

　さて、舞臺に於ける此風俗や裝置が本物の日本とは似も付かないので、吾々日本人には物事を正當に表現して居ない處から來る一種いやな感じ――腹立たしいやうな心持ちがするものであるが、それで居て觀客たる西洋人には拍手大喝采と來る程充分滿足なのだから實に世の中は面白いものだ。

　日本人としてこの變挺な氣分を味ふ一番簡易な方法は、今は丸燒けとなつて仕舞つたから何とも取り返しが附か無いが、震災前ならば横濱は辨天町邊りの西洋人相手の店へ行つて見ることだ。Japanese silk store とか Japanese curios といふ看板のブラ下つて居る店には、勿論廣重や歌麿

やのイカサマ物も澤山並んで居るが、それよりも日本人の眼にも curious に感ぜられるのはキモノと稱する西洋寢衣の出來損ひに「ヨコハマ繪」と稱する珍妙なペンキ畫である。

ビアード博士の謂ふ所の「日本趣味」がこのキモノやヨコハマ繪や乃至は奈良ホテル式建築物の程度のものであるかどうかは遂に私の知るを得なかつた處であるが、帝都復興に從事する官民諸君が若し、上記のやうな日本趣味を公共建築物にとり入れるのであつたならば、それは近代の堅實なる日本人の趣味の正當な表現としては餘程懸け離れたものであることを忠告しなければならない。

彼等の「日本趣味」の多くは日本人にとつては實は支那趣味であつて、日光の東照宮のやうなゴテゴテした裝飾は簡明直截單純淡白を尙ぶところの吾々日本人の趣味とは本質に於て相容れない所のものであつて、其點で新時代の日本人は寧ろ泰西藝術の或物に多大の共鳴を感じて居はしまいか。

尙又復古的藝術の採用も此際斷然と斥けるべきである。何となれば今日の日本人は最早昔の日本人とは違つて居るから、それに對してハラキリ時代以前の藝術を望むのは望む方が無理である

計りでなく、强ひてそれを表現しようとすればそれは何等の誠意も認められない力の弱いものになつて仕舞ふ筈である。虚僞は常に藝術ではあり得ない。

復興の大業に當る諸君よ。諸君の藝術的標語は新日本の表現である。而してこれが表現に必要なるものは、たとへそれが泰西藝術の採用となつて表はれて來たとて諸君は毫も憚る處はない。その昔吾等の祖先が模倣した支那の藝術が、今日となつて多くの日本愛好者を驚かして居るやうに、他日諸君の採用した泰西藝術が換骨奪胎して世界に誇るところのものとなつて顯はれ出た時に、諸君の子孫は諸君の達識と聰明に對して感謝の辭を惜しまないであらう。本質に於て特異性を持つ國民はやがては泰西美術をも日本化しないでは置かないから。(中央公論大正十三年二月號)

ローマ字論者とエスペラント

A――此頃エスペラントの素晴しい勢はどうだい。「公論」や「改造」のやうな大雜誌が每號エス語論を載せ出したぢやないか。處で君の方の景氣はどうだい。

B――ローマ字の事かね？　着々やつて居るよ。いづれ國家が正式にそれを採用するのも程遠くはあるい。

A――「程遠くはあるまい」は心細いね。もつと積極的に猛烈な運動を始めたらどうだ。政府に向つても國民に對しても。

B――着々やつて居るよ。が併しこの問題ばつかりは氣永にやらなければいけない。成功をあせることは寧ろ大禁物だ。特に線香花火の國民に對してはね。

A――熱し易く冷め易いからと云ふのか。その國民性を旨く利用して掛らなければ宣傳は落第だよ。兎に角マア慥りやつて貰はう。處で今日は一つ問題があるんだ……と謂ふのは外でも無い

が、君達ローマジストはエスペラントに就いてどう考へて居るのかね。

B——アヽ大變結構なものだと思つてる。

A——議會の大臣の答辯見たいな返答だね。木で鼻を括つたやうな挨拶は此際御斷りだ。

B——惡意にとられては困る。細かい事を言つたら多少不滿足な點もあるだらうが、大體に於いては僕は國際補助語の必要な事を痛切に感じて居るのだから、エスペラントに不賛成であると云ふ道理が無い。現に吾々の仲間にはエスペランチストが澤山に居る。日本エスペラント社のO君からして日本ローマ字會員だよ。

A——これは初耳だ。エスペラント主義とローマ字主義とは氷炭相容れ無い筈ぢやなかつたかね?『英語の勢力を今日無視する譯には行か無い』と云ふのが君達の立場ぢやなかつたか。

B——大變な誤解だ。それはローマ字論者の內でも偏つた連中の云ふ事で、所謂ヘボン式ローマ字卽英語風のローマ字を唱へるM氏一派の說さ。僕達のはどこにも偏ら無い日本式ローマ字さ。

A——矢つ張り偏つてるぢやないか、日本式だなんて。

B——揚足をとつちやいけない、日本の國字の綴り方が日本語の性質に合ふやうに日本式に偏

つて居るのは、當然過ぎる程當然なことだ。何？　それがエスペラント主義に合致しないと云ふのか。さうぢやない。エスペラントと云ふのは、エスペランチストも云つてる通り國際補助語なのだから國内語の問題には不干渉の立場にある。

A――さうかしら？　ぢやこれはどうしたんだい、莫哀山莊主人の意見は。

B――何んだそれは。成程日日新聞の切拔きか。例の隨想漫錄だね、山莊主人は何と言つてるかね。

A――いゝか、『我國の文字や言語は根本的に不便不利がある』そこ迄は君の云ひさうな事だがそれから先きが違つてる、『然らばどうしたらよからう？　ローマ字にするか、假名に改めるか、いづれも駄目だ！　やむなくんば第二國語としてエスペラントを採用し、之を義務教育課目中に加へる事になれば遠からず日用語となるだらう』とあるぜ。

B『――ローマ字も假名も駄目だ！』と云ふ理由は別に書いてないやうだね。『やむなくんば』は意味深長だが、山莊主人未だよくエスペラントの主張を御存知無いらしいね、そんな口吻では。いつだつたか「公論」でエス學會のI君が建部學士に對して言つてたぢやないか、『エスペ

ラントは國語を排斥する世界語ではなくして、國語の外に立ち之と兩立する國際語である』と。一國の言葉を替へると謂ふ事は、僅か計りの單語の改正なら兎も角、impossible の事で無いにしても、それは、next to impossible な事だ。

A——一寸待つた。英語に偏らないと云ふ君がさう續け樣に英語を連發するのは穩當で無いぞ。

B——仲々急所を衝くね。だがこれに就いて面白い話がある。例の森有禮卿だね、あの人が明治の初年に駐英公使をしてた時、莫哀山莊主人と同樣な考から『日本語の使用を嚴禁して之に代ふるに將に世界語たるべき英語を採用してはどうか』と云ふ事に就いて有名なロード・ケルビンの友達でオックスフォード大學の博言學者マックス・ミュラー博士の意見を求めたと思ひ給へ。その時ミュラー先生の答へたのが今僕の言つた英語なのだよ。

A——成程……地中海はマルタ島のやうな小さな島でさへ、英國政府があれ程英語の普及に努力して居るのに、マルタ人は決してマルタ語を捨て無いからね。

B——それよりか君、大英國の御膝元のスコットランドでも英語を使はない所があるよ。民族

と言葉と云ふものは根強い關係のあるものだ。

Ａ――處でさうなると日本語は替へられず、さりとて習ふに難しい日本語をいつまでも使はせられる日本人は宿命的に發展を封ぜられて仕舞つた格だね。さうだとすると烏渡悲觀せざるを得ない。

Ｂ――早まつちやいけない。山莊主人や森有禮卿の難しい難しいと云つてるのは實は日本語共物が難しいのではなくて、日本語を寫す國字が難しいのだ。例へば「サクラ」なら「サクラ」と云ふ語（ことば）にした處で、兒童がそれを覺える事の難易は英語の cherry や佛語の cerisier に較べて少しの相違も無い――いや寧ろ「サクラ」の方が日本人にとつては易しいと云へる位だ。唯どうもいけないのはそれを寫す文字だ。櫻と云ふ文字が兒童の教育を阻害し國民の發展を閉塞するのだ。だからそれをローマ字で Sakura と書くことにすればこれは苦も無く解決の附く問題なのだ。僕等はそれを今君達に薦めて居るのぢやないか。ちつとも日本の前途を悲觀する事は無い。

Ａ――待て待て、君の云ふのは「サクラ」とか「うめ」とか云ふありふれた言葉に就いてこそ當て嵌るけれども漢語と云ふ奴は矢つ張り難しいよ。

B——いや漢語必ずしも難しか無い。「ヒコーキ」と云ふ漢語は aeroplane より難かしいと云ふのか君は?

A——それは難しいさ。「ヒコーキ」の「ヒ」は「飛ぶ」を示し「コー」は「行く」の漢音で「キ」は「機械」の「機」だと云ふ事を覺えるのは生易しい事ではない。

B——君の言つてる事は語源を教へる場合の話だ。語の教育に一々語源から說き起こしてそれを分解的に教へる事必ずしも無用だとは云はないが、それは兒童教育にはなくてもがなの事だ。「ヒコーキ」と云ふ全體の言葉があの空を翔る飛行機の事を指すのだと教へればいい。言葉といふものはさう云ふ風に語其儘のものを棒暗記するのが一番大切なのだ。

A——さうか知ら? 語を分解して教へたり又語源其物がいつも眼に見える様な漢字の「飛行機」で「ヒコーキ」を教へた方が聯想とか印象とか云ふ方面が强いから言葉を早く覺える効能がありやしないかね。

B——聯想や印象が多少强くなる事は事實だが、さう云ふ言葉の教授法は近代はもう廢れたよ。その方面を主として教授をすると語の音や抑揚に對する注意が自然と疎になつて仕舞ふ。

基礎教育では語源を教へたり字を書いて見せたりしない方がいい。殊に漢字などを使つてる間は。

A――似たやうな事は誰からか聞いた事がある。さうだ、親類の娘が佛英和に通つてるが、近頃は英語を教へるのに矢張り字を見せないさうだね。それで生徒はめいめい假名でいろんな符號を作つて心憶えにしてるさうだ。

B――僕達の中學時代には cotton は「コットトン」、other は「オットハー」とやつたものだ。

A――大分脱線氣味だから一先づもとに戻らう。そこで「ヒコーキ」はまあ知れ渡つた言葉だからいいとして、軍隊あたりで使ふ言葉には隨分難かしい漢語があるよ。物乾場の事を「乾燥場」と云つたり、君帳面の事を「手簿」と云ふんだからね。新兵は隨分苦勞してるぜ。

B――それは事實だ。併しそれ等の語は廣く知れ渡つて居ない言葉だからこそ難解なので、漢語である故に難解だとは必ずしも云へない。

A――漢語排斥屋の君としては少しお可笑な說ではないかね。漢語は卽準外國語だと云ふから廣く日本人に知れ渡つて居ないと云ふ事それ自身と同じ意味を含んぢや居ないかね。

B――だから『必ずしも』と斷つた次第だ。日本化しない漢語なんか少しも庇(かば)やしないさ。

A――それに尙漢語には同音異議の語が多くつてね。軍旗、軍紀、軍器、軍機、聞いただけぢや何の事か薩張判りやしない。これ又日本語が難しいと批難される點だね。

B――そんな言葉を使ふ人が惡いのさ。軍旗はチャント聯隊旗と云ふ立派な言ひ方がある。軍紀だつて軍隊の紀律とかたゞ紀律とか云へばいゝ。大抵の場合は特に「軍」とか「軍隊」とか云ふ意味を含ませる必要はない筈だから紀律で充分な話だ。軍器は勿論武器とか兵器とかに言ひ換へる。軍機か、そりや軍事の祕密とするさ。何長つたらしいつて？　長つたらしくたつて間違へるよりはマシだ。それに大抵の場合は軍紀同樣で、たゞ祕密で充分用が足りるのだよ。さう云ふ風にやつて行けば少しも不都合はない、所謂吾々の Kotoba-naosi と名付ける奴で、今吾々は着々と實行して居る。詰り國語整理だね。これさへ仕遂げればもと〳〵日本語の本質は立派なものだから少しも心配する事は無い。全體日本語としては寧ろお客樣の位置にある漢語の而もそれの一部分に不都合があるからと云つて日本語全部に愛憎を盡かすのはチト早過ぎはしないかね。

A――それなら君は漢語の整理が可能だと思ふか。變挺な漢語が濫造されるのは君、軍隊計り

ぢやないよ。近頃新聞に出る新熟語を見給へ、まるで滅茶だ。

B――そこだよ君。漢字を國字としてるからこそさう云ふ風になるので、ローマ字はそれを救ふ上にも効果があるといふ事に就いては去年僕は「公論」に書いといた筈だが。

A――あれは讀んださ。それなら未だ外にある、日本語には英語のI(アイ)に相當する言葉が「ワタシ」、「ワタクシ」、「オレ」、「ボク」……などゝ幾つもあるのはどうだ。それらを覺えるだけでも日本人は餘計な苦勞をして居るのだ。英語なら目上の人にだつて目下の人にだつてI(アイ)一つで濟んでゐるぢやないか。

B――それも多ぎ過れば國語整理で篩分(ふるひわ)けさへすれば片付く問題だ。但し此處で一寸言つて置く事がある。日本人の物言ひが目上の人と目下の人とで違つて居るのは言葉共物の問題ではなくて實は思想の問題なのだ。よくいへば長上を敬ふ、惡く云へば階級思想の旺盛な人種が、それに相當した思想表現法を持つて居るのは少しも怪しむに足りない。若しさう云ふ思想共物がいけないと云ふならばそれは少し問題が違ふ。

A――思想共物に就いても、もつとデモクラチックにならなければならないが、それにしても

今使はれて居る言葉は近代人の思想以上に複雑だよ。

B――そんなのがあつたら即國語整理さ。何？　整理をしても多少は殘るつて。それは仕方が無い。近代人の思想だつて矢張り敬語の少し位は殘し度いのだもの。

A――それだけ矢張り歐米語に較べて複雑さが殘つて居る事になる。

B――それはどうも致し方が無い。民族や國民がそれを好むのだから。例へば外國語には男性、女性、中性などがあつて、名詞計りでなく動詞から形容詞まで主格の性の變化に從つて變るのがあるが、それも其國民の好き好きだから仕方が無い。そんなのに較べても君は日本語の方が複雑だと云ふのか。

A――いや、複雑必ずしも悪くはないと僕は思ふね。餘り簡單すぎて look も see もたゞ「みる」一つしか持たないのは思想の幼稚なものとして決して感心された話ぢやない。

B――これは君にも似合はない議論だ。複雑な方が好いと云ふなら目上の人と目下の人とで言ひ廻し方や言葉が違ふやうな發達をした方がズツト思想が複雑なのぢやないか。

A――いや、そんな方面で複雑なのはいけない。ものと科學的に複雑なのでなければ。

B——そんな事を云ふなら日本語の「ほそい」、「こまかい」、「せまい」、「ちひさい」などに對する英語や獨逸語や佛蘭西語を捜して見給へ、一概にそんなことはいへない筈だから、尤も日本人の知識や思想に非科學的な處は澤山ある。それを振興するためにも國字改良の必要がある譯だが、兎に角今日我國は主に西洋から文明を輸入して居るから舶來知識や舶來思想を言ひ顯はすのにウマイ日本語譯が無いのは事實だ。これも**國語整理**でやる仕事の一つだ。

A——何んでもかんでも國語整理に押し付けて仕舞ふのが君の手のやうだが、全體君の所謂「國語整理」でやる仕事は何んだい？

B——人に依つて「國語整理」の解釋が多少違ふだらうが、僕は次のやうに見て居る。

（イ）今の日本人の知識や思想に較べて、**不足して居る言葉を作ること**。

（ロ）同音異義の漢語や字を見なければ判らないと云ふ様な漢語を直したり、よい本來の日本語があるにも拘らずそれを捨てゝ外國語や漢語をとると云ふ惡風を直すこと。

（ハ）今日の日本人の知識や思想に較べて、**多過ぎる言葉を削りとること**。

A——文體の問題はどうなるかね。

B――言ふ迄も無く、口で言ひ耳で聞く通りの話し言葉風さ。これで國語問題も國字問題も一擧にして片が付く譯だ。

A――それには尙、今日新らしい言葉の作り方を新聞記者や文學者の勝手氣儘に放任してあるが、あれは禁止しなくてはなるまいと思ふがどうか。

B――ローマ字を使ふ樣になればこれ迄のやうに只漢字を二つ三つ並べて新熟語を作ると云ふ風な惡習は自然と無くなるらしく思はれるが、それにしても國家が何か「國語整理制定常設委員會」と云つた風な組織を設けて世の中を指導する必要があるね。「プロパガンダ」を陸軍だけが一時「普傳」と譯して居つたやうな事を避けるために。尤も委員の選び方にはよく氣をつけなきやならはいがね。外國は皆さうやつて居るのだよ。

A――段々話が變つてエスペラント問題はそつち退けになつて仕舞つた。さつき君は『多少不滿足な點はあるが』と云ふやうな事を云つたがエスペラントのどこに不滿足があるのかね。エス語が「何處の國にも偏らない中立語」だと云ふのが嘘で、東洋人から見れば「著しく歐米に偏つた中立語」だからと云ふのかね。

B――それは事實だ。エス語は英國人が聞けば餘程英語臭くとれるし、又獨逸人が見れば獨逸語に似て居ると云ふし、佛蘭人には佛語が過分に採り入れてあるやうに思はれるに拘らず、日本人から見ると此感じは餘程薄い。それはザメンホフが東洋の事を忘れて居つたからで、當時の世界の大勢がまだ人々の注意を太平洋方面に向ける迄になつて居なかつた故もあるが、併し偶然と云はうか言語學上日本語の優れて居る爲めであらうか、エスペラントの單語こそは歐洲に偏つて居るだらうが、その文法が餘程日本語に似て居るし、發音から云つても外の外國語よりも日本人に納得され易い。たゞそれの綴り方が一字一音と云ふ事に囚はれ過ぎて符號の多過ぎるのは色々な點で不便が多からう。印刷體で丈の低い字の上にも丈の高い字の上にも山形(accent circonflex)が附いて居るのなども實際問題としてはどうかね。ja, ju, jo, も矢張り ya, yu, yo, を使つた方が萬國的性質を餘計持つ事になりはしないかね。こんな事は大體論から云へば勿論些細な問題でどつちでも好いやうなものの、どつちでもよければ成るべく好い方を採ると云ふのが僕等の考だね。此邊をイド語(Ido)がどうやつてるかしら。兎に角僕は精しく研究して居ないからハッキリした事は今言ひ難いが。

A——主義に於いて國際語に贊成して居乍ら精しく研究して居ないとは君にも似合はないね、ローマ字問題の時そんな物言ひをする人を君は猛烈に批難する癖に。エス學會のO君などは熱心なものだと云ふぜ。マダムを貰ふのにもエス語をやると云ふ事が條件だつたと云ふぢやないか。

B——誤解してはいけない。僕は國際語問題を省みないと云ふのぢや決して無い。個人に就ても社會生活があり、國家に就いても國際生活がある限り此の問題の重要さは決して失はれない。これから大に研究にとりかゝらうと云ふのだよ。併しこれ丈けの事は君の耳に入れて置く必要がある。と云ふのは、君達の言ひ草に『今日の日本人の生活には自己の充實といふ事が忘れられて居る』と云ふ一節があるね。例へば住宅を建てるにした處で、これ迄の日本人は、客間のやうな滅多に使はれない室の床柱に數百金を投じて家族は北側のジメ〳〵した陰氣な部室に燻ぶつて居る。また自分達は豆腐のおからに澤庵の尻尾位でお茶漬サラ〳〵と濟まして居るのにお客様には二の膳附の御料理だ。盆暮の贈答品に金を掛けるのも同じ筆法で、交際費に許り力瘤を入れて自己の生活の充實と云ふ事に甚だ冷淡であると云つた風な思想が今日多くの生活改善論者の主張ではなかつたか。之は誠に左もあるべき事で、自己の生活を後廻しにして置いて交際に力瘤を入

れ過ぎるのは慥に不眞面目なやり方だ。それに共鳴する君が、日本語の問題即日本人自身の問題を後廻しにして外國人と交際する場合に始めて必要な――廣く世界と附き合ふと云ふ事を決して輕視して云ふのではない。世界的日本と云ふ事を重く見ればこそ吾々は世界共通の文字と云ふ事を大切にするのだが――國際語の問題に努力しろと僕を責めるのだつたら聊か當を得て居ないと思ふ。尤も人各々好む處ありで、エス語界のO君やI君やN博士やK博士が、それの普及に生涯を抛つて居られる事が間違つて居ると云ふのではない。間違つて居ない處か人類の幸福と云ふ大きな眼から見て有り難い事だと僕は思つて居る。併し日本國民全體を目標として議論をし宣傳をする場合には、誰が何と云つても、日本語ローマ字問題が第一でなければならない。この意味で今日中等學校でやつて居る英語の代りにエスペラントを教へろと云ふ「公論」のI君の說には贊成だが、小學校にそれを課すべしと云ふ莫哀山莊主人の主張には贊成が出來ない。少くとも小學校にローマ字を課すると云ふ事がそれに先んじて實現された上でなければ。

（中央公論大正十一年九月號）

頻々たる用語の改正

——國立國語研究所設置の提唱——

一

上下兩院を通じて今度の議會で多少問題視されたものの一つに例の恩給法改正案があつた。而してその結果恩給の內でも、從來甚だしく不遇の位置に在つた癈兵の恩給が著しく增加せられた事は既に誰しも承知の通りである。處で此癈兵の恩給增額運動に關聯して、私共國語の整理を主張する者の立場から見て、一つ面白い現象が顯れたと思はれることがあるから今それを話のきつかけとして私が平生考へて居ることを述べて見度い。

面白い現象と云ふのは外でも無い、一つは、恩給增額もさる事ながら、「癈兵」といふ名稱はいかにも癈兵を侮辱した名前であるから、何かもつとよい外の名稱に改めて貰ひ度いといふ事で、も

一つは、元來恩給と云ふものは、近代の解釋に從へば、在職中官吏が消耗した處の精力に對する補償であるからそれを要求するのは退職官吏の權利であつて、決して政府から恩惠的の意味で支給されて居るのでは無い。從つて「恩給」と云ふ用語を之にあてて居るのは妥當で無いからよろしく之を「退職俸」とでも改正すべきであると云ふ意味の議論が出たことである。而も之等の意見は恩給增額運動者によつてかなりの眞面目さと熱心さ——これ等の名稱を改正して吳れれば恩給增加の要求額を多少減らしても差支ないと彼等が考へて居るのでは無いかと思はれる程の熱心さ——をもつて唱へられたといふ事は特に注目に値する點である。

二

「監獄」と云ふ名稱が昨年突然「刑務所」に改められた。其傍杖を喰つて海軍の監獄も今度「刑務所」と云ふ名前をとることになつた。當時山岡刑務局長談として新聞紙の報じた處によると、此用語の表向きの改正理由は、主として「監獄」と云ふ名前が世人に與へる感じが良くないからだとの事である。名稱を變へたら監獄臭くなくなるだらうと云ふのである。成程これは一應賢い

思ひ着きであつた。「ケイムショ」なら鳥渡話せる。一度位はいつて見てもよささうな氣がする程であるし、又前科者でも「ケイムショ」で暮して居たと言へば體裁も餘り惡く無い。改正の目的がちやんと達せられて居る。當局も旨い事を考へたものだ。が併し、さう云ふ事を狙つて用語の改正を敢てする事が果して正當なものであるかどうか。

三

人種差別の撤廢をベルサイユ會議に持ち出した日本の國内に、同胞の一部に對して差別的待遇をするのは不當であると言つて起つたのが水平社の所謂水平運動である。この事あつて以來、人々は假初にも「エタ」や「新平民」や「特殊部落」や「部落民」などと云ふ言葉を口にする事を愼み出した。水平運動の起ることは誠に尤もな次第で、國民がこれ等の人々を特殊扱ひにする事の不當な事は今更申す迄も無い。併しこれ等の言葉に替へるのに、近頃新聞紙上で見受けるやうな例へば「小數同胞」であるとか、「水平社の人々」だとか、「水平運動を唱へる人」などと云ふ言葉を以てする事が果して幾分でも差別的待遇を撤回したといふ意味になるであらうか。かう言つ

た事柄に就いて私はこれから段々と話を進めて行き度い。

四

このやうに用語が頻りに改正されることが、先づどう謂ふ影響を國内に及ぼすかと云ふ點に就いて私共は一考して見なければならない。司法省が「監獄」を「刑務所」に變へる事によつて、第一に司法系統の法令文書乃至看板などを書き直さねばならぬが、それは先づ譯なく出來たとして、次に同じ政府部内に於て陸軍省や海軍省の管轄する處の「衛戍監獄」や「海軍監獄」はどうするか。今度の場合のやうに政府部内がよく統一協調して陸軍も海軍も司法省の改正に倣つた場合は好いけれども、通例各省殊に陸海軍省の如きは自省の尊嚴(?)を保つ上からして輕々しく他省の改正に追從しないのが通例である(その活きた例は第一〇項に擧げてある)。さうなると此處に於いてか本來同一であるべきものゝ名稱が二つ出來ると云ふ事になつて國語の不統一を惹き起すから、日本と云ふ大きな眼から見て不都合である事は申す迄も無い。さりとて如何に協調や統一が大切だからと云つて、物によつては他省の勝手に定めた用語に——殊にそれが「監獄」を「刑

務所」に變へるやうな程度のものであつては尚更ら（併し寛大なる陸海軍はこの度は司法省案に從つたのである）――盲從するといふ事は苟も相當の見識を持つた各省の能くし得ざる所である。

五

以上は單に司法省對陸海軍の話を述べただけであるが、斯かる改正の爲め一番迷惑を感ずるのは恐らくは文部省系統かと私は考へる。國定教科書に載つて居る「監獄」と云ふ言葉は――そんな言葉が事實國定教科書に載つて居るかどうかは私の知る處で無いが、今はたゞ「監獄」といふ一例をかりて私の言はんとする所のものを述べて居るのである――文部省が好むにせよ好まざるにせよ悉く司法省の改正に連れて改正を餘儀無くされて仕舞ふ。更に一般國民に至つては國民と云ふ國民が――泥棒やスリの類に至るまで悉く――皆言語生活に於いて改正を強ひられるでは無いか。及ぶ處の大なる、實に用語の改正に若くは無い。愼む可きは實に用語の改正である。

六

今日專制國以外に於いては一般に、政府は議會の協賛なくして豫算の變更を行ふ事を許されないのが通則である。併し事豫算に關係が無ければどんな事でも政府は勝手にやつてよいと云ふものでは無い。それは餘りに重金主義の思想であつて、政府はよろしく豫算に對すると同樣の精神をもつて政治に當らなければならない。而して今處に私の述べて居る言葉の問題の如きに對しては殊更ら此精神が必要である。吾人の祖先が廣く日本民族に言ひ繼ぎ語り繼ぎして殘した處の言葉を吾々が受け繼いで使用するのは吾人の榮譽であると同時に日本民族としての權利である。この權利を國民若しくは國民の代表者に諮かる事無しに任意に奪ひ去ることは官吏として越權の振舞だと言はなければならない。

さて、これ程重大な用語の改正が單に一局長や一課長の鳥渡した思ひ付き位で起案されると云ふ事に就いても吾々は大に注意を振り向けなければならない。勿論これ等の改正案が勅令として表向きに世に顯れる迄には相當の機關によつて篩に掛けられて居るに違ひあるまいけれども、機

關係者が又言葉といふ事に自覺の薄い人の集りである計りでなく、斯かる場合にあつては常に起案者の所謂原案なるものが過分に尊重されるのは官界事務の常であるから、此點に就ても私は最後に述べようとして居る所の國語の研究統一機關の設置を望んで止まない次第である。

七

私は旣に、(イ)用語改正の愼重にすべき事と、(ロ)國民の言語生活に大關係のあるこの用語を政府殊に一局長一課長の單なる思ひ着き位で無造作に變更することの不可なる事に就いて述べた。併し乍ら若し之等の改正が相當有意義のものであるならば、制度上の事は暫く別として、改正の實質的効果の上からして吾々は相當贊辭を呈することを惜む者では無いが、その結果たるや用語界に一大混亂を與へただけに止まるやうな事は無いかどうか?

再び話は前に戻るが、「監獄」と云ふ名稱が「刑務所」に改まつた時、人々は新らしい名稱が古い「カンゴク」と云ふ言葉の持つて居るやうな一種いやな感を起こさせないかのやうに誰しも考へる。これは事實である。私とても其事實は決して否定しない。併しさう云ふ事實を狙つて用語

の改正を試みるべきものだらうか。それを調べるために私は今一度元に戻つて、新用語が吾々にいやな感じを與へないのはどう云ふ譯であるかをもつと突き詰めて吟味して見よう。

「監獄」があのいかめしい赤煉瓦の塀を連想させるのに、「ケイムショ」にはもつと好い響きがあるやうに感ぜられる事實はどう說明するかと云ふに、これはよく考へて見れば誠に下らない話で、それは單に「ケイムショ」と云ふ言葉が耳新らしくて人々の耳にまだよく馴染ない爲めに、その言葉の持つて居る本統の意味に對する感情が湧き立たないからである。其の證據には、「ケイムショ」も度々使ひ慣れて、人々が實際刑務所にもはいつて見て、散々刑務所生活の苦役を嘗めて來る程の年月を經れば、自然と誰しも「ケイムショ」の發音を聞いただけで身震ひするやうになるに違ひ無い。此事實は其昔「牢屋」と云ふ言葉から今日の「監獄」に改まつた當座、當時の人々が「監獄」と云ふ新用語に對してどう感じて居つたかと云ふことゝ、今日の「監獄」が持つ處の感じとに照らして少しの疑も無い話である。

今私は「刑務所」と云ふ語を例にとつて話をしたが、これは强ち「刑務所」には限つた事ではない。「エタ」といふ語が「新平民」に變つたとき、人々は大層立派な語だと思つたに違ひ無い。

その立派な「新平民」も既に使ひ慣れた今日では昔の「エタ」と大して變つた內容を表現する語とは思はれなくなつて仕舞つたではないか。

約めて再說すれば、改正された新用語は、人々に耳新らしい間だけ——卽言葉本來の任務をまだ充分に果して居ない期間だけその特徵（感じが惡くないと云ふ特徵）を保有して居るものであつて、それが言葉として充分役立つやうになれば漸次其特徵を失つて矢張り改正以前の古い語同樣のものになつて仕舞ふものである。畢竟この意味に於ける用語の改正は全く意味を成さない。

八

前々節で私は政府乃至官吏が、國民若しくは國民の代表者にはかる事無しに勝手に用語を改めることの不都合を責めた。併し飜つて考へるに、これは強ち役人計り惡いのでは無いらしい。事實はもつと根深い根柢を持つて居る。それは實に國民が又斯かる改正を好む處に根ざして居るので、此見地からして政府の改正はよく民意に叶つて居ると言ふ事が出來るかも知れない。

「產婆」と云へば誰にも解るのに、それが「助產婦」と改められて仕舞つた。今日では「小僧」

の事を「小店員」と呼ばなければ誰も働いて呉れない。一昨年、下級船員が團結して「大工」、「油差し」と云ふ名稱は吾々船員の人格を無視したものだから、それ等をそれぞれ「船匠手」、「機械手」と改正して貰ひ度いと云ふ要求が船主側に持出された。「擾兵」も同じ理窟だ。或所では「職工」を「工務員」に改めて居る。さうかと思へば「電話交換手」を「女子通信事務員」と呼び換へて女子供を嬉しがらせて居る當局もある。又一昨年の始であつたか、「巡査」と云ふ響きが人民に與へる感じがいかにも巡査らしくていけないから之を「警手」とかに改めやうと云ふ案も出たが、これはどう云ふ理か立消えになつた。「大工」や「油差し」と云ふ名前が若し下等に聞こえたとしたならば、それは之等の名稱が人格を無視して居るのではない、乃公自身の行ひが人格を無視させるのである。無實の罪を着せられる言葉こそ好い面の皮だ。荘子曰名者實之賓也と。實に名言である。

九

當局や資本家にも狡い所がある。給料は仲々上げられないから、國民の言葉といふものに對す

る無自覺を利用して、名前だけを變へて嬉しがらせて居るのである。併し名前を漢語臭くしたり「、、員」と直しさへすれば偉いものにでもなつたかのやうに安心して居る國民の無自覺共物が何よりよろしく無い。

とは云ふものゝ言葉に對する無自覺と云ふ段になると當局も資本家も共に一般國民と同一程度にある。『國民の無自覺を利用して云々』は私の言ひ過ぎかも知れない。何となれば無自覺なる者が無自覺なことに就いて他人を利用すると云ふ事はあり得ない道理だから。

十

既に述べたやうに我國では各省は各省で官吏の獨斷によつて勝手に用語の制定及變更をやるし、新聞は又新聞で思ひ思ひの譯語を作るから、同じ物又は事が色々の名前になつて居て、今日の日本語は不統一そのものである。同じ軍隊であり乍ら同一物を陸軍では「機關銃」と呼び、海軍では「機銃」と云ふ。飛行機射擊砲のことを陸軍は「高射砲」と稱へ、海軍では「高角砲」と云ふ名稱を附與して居る。而して又陸軍の三等主計正は海軍の主計少佐である。若しそれ陸軍の

「手簿」（手帳のこと）「中徑」（直徑のこと）や、醫者の「裏久後重」の類に至つては實に沙汰の限りである。

一體全體國民（或は民族）が互に同一國民であると信ずるためにはお互が使ふ處の言葉が同一でなければならないものである。鹿兒島の人と青森の人と會つて薩派り話が判らないといふやうな事では未だ日本は言葉に於て充分に統一されて居ない證據である。言葉が統一して居ないと云ふことはとりも直さず國家或は民族として充分なる統一を缺いで居ると云ふ事に外ならない。坊間に日薩會話篇と云ふ本があると云ふ事實を私はたゞ笑つて濟ます譯には行かないと思ふ。

このやうに既に我國では地方々々で言語が區々になつて居るのに、更に別な方面から陸軍は陸軍、海軍は海軍、文部は文部、遞信は遞信と云ふ具合に用語を異にして居るのだから堪らない。人は軍隊を稱して特殊部落と云ふ。それには勿論誇張した意味も多少含まれて居るが、人をして此感を懷かしめる最大原因の一つは實に一般社會との言語の相違にあると言つても決して過言ではあるまい。

十一

かうなつて來ると上田萬年博士の言はれた『日本人には國語的良心が無い』と云ふ言葉を私はつくづくと考へさせられる。言葉は思想表現の手段だから、謂はゞ思想の道路だ。この思想の交通機關である處の道路をめいめいが勝手に掘り返し、こねくり返して、後は野となれ山となれでは思想の交通機關はバッタリと停止するより外に致し方が無い。そこで町には道路課と云ふものがあつていたんだ個所は人夫が道普請をする――この人夫を修路夫と呼ぶのだから堪らない！――事になつて居る。それと同じ事で國家は思想交通の道路たる國語の修理をする處の機關を設置する事が必要ではあるまいか。町の道路課が道の修理計りでなく新設をも司つて居るやうに、この機關の任務は國語の整理、改良、統一の外、國語の創造にも及ぶべきは言ふ迄も無い。機關は朝野の學者名士數十名を以て組織し、之を內閣直屬として、少くとも政府部內に對しては各省をして其制定に係る用語の使用を强制する權能を與へ、尙國民一般に對する自覺を促すところの宣傳機關をも兼ねた一大研究組織であつて欲しい。今日は食物に對しても國立營養研究所の設立を

見た時代である。文化の基調であるべき國語に對して國立國語研究所設置の提唱をするのは今日正に其時を得て居ると考へる次第である。（中央公論大正十二年六月號）

話の種

漢語婦

難解な漢語は、これ迄軍隊の專賣のやうに言はれて居たものだが、一歩（ひとあし）病院にはいつて見るとこれは又別世界！ 試に看護婦の使ふ言葉を氣を付けて聞いて見るがいい。「オカン」（惡寒）は「さむけ」、「ユシ」（油紙）は「あぶらかみ」、「コツ」（骨）、「ゼツ」（舌）は「ほね」と「した」の事であり、「ハンコン」（瘢痕）は「きずあと」の事、「熱發する」は「熱が出る」ことで、「ホーゴースル」（縫合する）が「ぬひあはせる」こと、「バツシ」（拔絲）が「絲ぬき」、「ゲンウン」（眩暈）が「めまひ」、「ケツシンがカンセンスル」（欠伸が感染する）は「あくびがうつる」といふことだとはサテモ々々。

依て曰く、爾今看護婦は漢語婦に改むべきこと。

新語譯語の粗製濫造

――逍遙坪内博士の所論を讀みて――

一 時文の混亂

雜誌「早稻田文學」一月號は「所謂漢字節減案の分析的批判」と題する逍遙先生の長論文を掲げた。この論文の本旨とする所は、さきに臨時國語調査會が選擇した常用漢字千九百六十二字と稱する漢字節減案に對して博士の見る所を開陳せられたものに相違ないが、あの論文が前後四回に亙つた長意見を一纏めにしてかゝげられてあつたせいか、博士の意のある所を的確に捕捉してそれに對する私の考へを述べて行くことは、實の所私としてかなりの困難を感ぜざるを得ない。そこで私は眞正面から博士の國語國字論に對する所見を申し述べる事をやめて、この私の書き物では、博士が最も懸念し最も疑惧し最も解決に困難を感じてをられるらしい、從つて博士の論文

中博士が一番力瘤を入れて書いてゐられる、そしてなほまた最も強く私の興味をひいた所の『近來の孟浪杜撰を極はめた新語、譯語の濫造を如何にすべきや』といふことを當面の論題としつゝ傍ら他のこまかな議論に觸れて行き度いと考へる。そしてそれはまた丁度博士が世論について知ることを望んでをられる點らしく思はれるのであるから。

前置きはその邊で切り上げるとして扨、明治維新この方ズーッとさうであつたが殊に世界大戰以來、所謂「東洋の日本」がいつまでも東洋の片隅に治まりきれなくなつて世界の檜舞臺に乘り出して來ると共に外國との交通が愈々頻繁を加へて來たのにつれて、これまで日本になかつた新しい事物や思想や知識やが續々とこの國に入り込んだことはすでに普く人の知る通りである。しかしてそれと同時にこの事が、この新輸入物に對してそれを言ひ表はすべき新しい言葉の發生を促したこともまた多辯を要しない。所でその新語發生の仕方が從來頗る好い加減な行き道をとつてゐたといふのは、それの大部分が彼の貧弱にして不正確な漢字知識の持合はせしかない(『そして言葉といふものの本質を摑んでゐない』といふ文句を附け加へたい)現代人士が當座凌ぎの間に合はせに造り上げた代物だからなのであつて、その結果たるやいはゆる新語なるものゝ多くが

孟浪杜撰を極はめて、たゞ時文の混亂を招くのに役立つだけであつたといつても左まで大げさな物いひではない。

以上のやうな事柄について坪内博士があの長論文で述べてゐられることは、よく事實を穿つてゐると私にも思はれる。

二　混亂の原因

前述のやうな時文の混亂を、（甲）漢字の無制限に使用されてゐる事に歸さうとしてゐる芳賀博士や保科孝一氏などの觀察と、これに反して（乙）否々それは現代人士が漢字知識に缺乏してゐる事が原因であるから、漢字の節減は益々この風を助長するにちがひないと見られる坪内博士の說とは誠に面白い對稱であるまづ坪内博士側に立つて考へて見るのに、博士のいはれる通り、古典知識に乏しい現代人士が筆をとるに當つて、その思想なり觀念なりをいひ現すに相當した成語なり熟語なり譯語なりが既に立派に存在してゐるといふ事を知らないで——知らなければ先輩に質すか辭典について調べて見るべきであるがそれもしないで——手つ取り早く手製で間に合はせる

といふ事實は決して見逃すことは出來ない。併しながら漢字節減がこの事實に對して如何なる交渉を持つてゐるかについては、博士がアッサリと思ひ込んでをられる以上に突き詰めて吟味して見る必要がありはしないか。

漢字知識の缺乏といふ事は漢字節減から起こる當然の結果であるが、その漢字知識の缺乏が新語譯語の粗製濫造と交渉するのは左の二點においてである。

(一) 漢字知識の缺乏は通例漢語知識の缺乏と比例するから、さういふ狀態に置かれた後代の人士は、ある思想なり觀念なりをいひ現すに相當した立派な成語、熟語乃至譯語の既に存在してゐることを知らないから、別に自分の手でわざ〳〵無用な新語を造ることを企てるやうになる。

(二) 漢字知識に缺乏した人士が有用及び無用な新語、譯語を造る場合に、手つ取り早く自分の知つてゐる狹い範圍の漢字を組み合はせて濟まして置く。材料の少いものゝ內からかき集めてろくな語が出來る道理がない。

以上は坪內博士の『時文の混亂は漢字節減の實行により倍々助長せられる虞がある』といふ意

見を、今少しく立ち入つて分析的に取調べて見た私の解釋であるが、この解釋が若し當つてゐるとすると博士は、博士の觀察が相當時弊に觸れてゐるに拘らず、なほ進んで吟味し考察すべき他の諸點を逸してをられるやうに思はれる。

第一に、今假に漢字が極度に節減された場合――例へば常用漢字數が百字とか五十字とか乃至は廿字とかいふやうに殆ど音字專用にも等しい程度に――を想像して見るのに、さういふ時代に育つた大多數の人々の漢字知識といふものは極度に缺乏してゐるに違ひない。この場合例へば廿字や五十字の漢字しか知らない人達が坪内博士の所謂『知つてゐるかぎりの漢字を臨時に組み合はせて用を辨ずる』といふ事が果して起こり得るかどうか。音字專用時代の人々の大多數について、知つてゐるかぎりの漢字を組み合はせるといふことが全く考へられないのと同樣に、漢字について知つてゐる範圍が或程度を越えて狹くなればなる程、博士の患へてをられる狀態は却て起こり難くなるのではないか。この意味に於いて、あの論文で博士が『漢字が使用されるかぎりは、それがどんなに減少されてもこの趨勢は改正されないであらう』と述べてゐられることは、語勢を强める積もりで書かれたものとしても少々言ひ過ぎた御言葉といはなければならない。しかし

て前述の相反する二つの傾向をかね合ふ點が節減漢字數を三千字にした場合であるか、一千字にした場合であるかは今遽に明言することは誰しも困難とする所であらう。

第二に、芳賀博士もいはれた通り漢字及び漢語知識の豐富な人々、いひかへれば古典に精通してゐる人々程博士のいはゆるペダントリーから好んで難解の漢語をもてあそんで人々をこまらす癖があるといふ事實は誰しも見逃がすことは出來まい。勿論この場合は新語譯語の濫造といふ事にはならないけれども、さういふ死語にも近い、殊に日本人にとつて外國語とも感ぜられる代物を持ち出すことは時文の混亂を招くといふ點において宥すことは出來ない。

時文を書く上において最も愼まなければならない事の一つは外國語の濫用といふことである。勿論特別な場合に、特別な人人を相手として書く文章の中に外國語をさし入れることは深く咎めるにも當らないが、廣く一般日本人を相手として書く日本文には外國語の使用を極度に遠慮すべきであるといふことは、單にそれが日本文であるからといふ理由だけでも當然要求されることでなければならない。而してこの事は準外國語ともいふべき漢語に就いてもいふことが出來る。

漢語必ずしも外國語だといふのではない。「流行する」や「說明する」や「消化する」やは今日

誰でも口にする言葉であるからそれを人々が歸化人のやうに取扱つたとて私共はにはかに『時文を混亂させるものである』とはいはないであらう——それすらも私共は「はやる」、「ときあかす」、「こなれる」にあらためた方がよいと思つてゐる程であるのだが今は暫く讓つて——けれども、今日の人々にとつて寧ろ耳新しい難解な漢語を擔ぎ出すことは、たとひ由緒正しい支那の古典にあつた言葉だといつても、それは矢張り時文の混亂を來たすものと見て斥けるのが至當である。さういふ意味において私は博士の論文の中にある「侏離鴃舌」などといふ語も日本文としては避けたいと思つてゐる。

第三に、考へなければ、ならない事は、これからの世の中において新語や譯語が必ずしも漢語となつて現れてくるとは限らないといふことである。勿論博士の指摘される通り、知つてゐるかぎりの漢字を臨時にくみ合せるといふやり口の人が今後と雖も相當おほいことと想像されるが、國語に對する國民の自覺といふものが植付けられるに從つて段々本來の日本語でつくることを企てるやうになつてくるであらうといふ事を見落としてはならない。Probability といふ數學上の言葉が陸軍や海軍の彈道學の方では「公算」と譯され、哲學や心理學や醫學などではおほく

「蓋然性」として使はれ、また或方面では「確率」や「惑是」といふ言葉になつてゐたにかゝはらず（「公算」、「蓋然性」、「確率」そして「惑是」！ あゝ何といふ國語の混亂不統一であるか！ 私は博士と共に國語のためにそれを悲むものである）近ごろ「たしからしさ」といふ言葉が段々勢力をしめて來たのもその一例であるが、Strainを「歪（ひづみ）」と譯したのなども當を得てゐる。しかして本來の日本語でもつて新語、譯語がつくられるかぎり漢字知識の缺乏といふことは毫も博士の心配の種になり得ないといふことはこゝにあらためて申すまでもない話しである。

ついでながらこゝで私として坪内博士の御熟考を願ひたいことは、漢字知識の缺乏といふことと漢語知識の缺乏といふこととの區別についてゞある。この二つの間には勿論非常に密接な關係があるといふものゝ、博士が考へてをられるやうに不可分のものでは決してない。漢字と漢語――といふよりは寧ろ一般に字と語――とは本來の性質上全く別なものである。都會にそだつた近ごろの子供はまだ學齢にも達しないものでも「ヒコーキ」、「ジドーシャ」、「モーレツ」などといふ語を知つてゐて、自分でも盛んに口にするし、なほまた人のいふのを聞いてもその意味をよく了解してゐる。坪内博士の論文にある『子供や無學者でも「悲觀」だの……といふ言葉をふんだん

に使ふ』といふのもそれである。しかもこれ等の子供はそれらの語を假名で「ひかうき」、「じどうしや」、「まうれつ」と書くことも知らなければ、勿論漢字で「飛行機」、「自動車」、「猛烈」と書くことなどはゆめにも知らない。これは漢語知識はあつても漢字知識が皆無だといふ例であるが、それと反對に、時勢にうとい漢學者が「勞兵會」を「兵を勞する會」と解釋したり「印字器」を「印刷器械」と取りちがへたりしたならば今度は漢字知識はあつても漢語知識にとぼしかつた場合といふことが出來る。

このやうな譯合であるから、たとひ漢字節減が實行されて人々の漢字知識が貧弱になつたとしても漢語知識さへ豐富にたもつことが出來たとしたならば、その時代の國民が新語、譯語をつくる場合に、旣に立派な成語、熟語、譯語の存在してゐることを無視して無用な新語を造るといふことは起こる筈がない。要する問題は字知識の多少ではなくて語知識の多少に存するのである。

語知識の多少といふことになると私は矛を逆にして漢字を敎へることが今日如何に兒童の語敎育をさまたげてゐるかについて博士に一言しければならない。日本の小學校が歐米のそれに較べて、毎週三時間と廿分だけ餘計な時間を國語敎育に振りあてゝゐながら、それでゐて讀本で習ふ

語數（字數ではない）が、例へば第三學年についてミユンヘン市の教科書とくらべれば、彼の四萬八千語に對してわれの僅々九千九百語に過ぎないといふ事實が、如何に漢字國においては字を教へるといふことが語の教育を阻んでゐるかを雄辯に物語つてゐる。從つて漢字節減といふ手段が國語教育におけるこの缺陥を救濟する上に役立つといふことは見やすき道理でなければならない。

以上四項にわたつて述べたことによつて、坪內博士對芳賀博士保科氏の兩論は、坪內氏側に幾分の眞理は認められるとしても大體において、漢字節減は時文の混亂を招來するものでないといふ芳賀保科氏側に軍配をあげなければならないことはおほくの讀者の看取された所であらうけれども、たゞ一つ私が坪內博士側に立つておほくの世の漢字節減論者にいはねばならぬことは文章の中に假名書きの增加するといふ點である。去年の大震災直後東京におけるおほくの新聞紙がさうであつた如く、漢字の數を節減すればする程書き物の中に假名書きの所が殖えてくるといふことは卽ち假名國字論の缺陥を帶びることであつて、これはあらゆる點において本案の成立をさまたげると同時に、一方本案に忠實な人々をして或ひは無用な新熟語を作る方にみちびく素因とな

らないともかぎらないといふ二點は漢字節減論者のひとしく攻究せねばならぬ所であらう。

三　救治策如何

兎に角今日の狀態は時文の混亂を來たして國語の正當健全な發達をさまたげてゐるから、これはどうにかして正しき道に引戾さなければならない。それには眼前に展開してくる枝葉末節的な現象にかゝり合つてゐては徒らに勞を增す許りであるから、どうしてもわれ〳〵はその眞因を探つてそのよつて來る所に向つて治療投藥を施すより外に名案はない。しかしてわれ〳〵は前節において時文混亂の原因を漢字の無制限な使用に歸すべきやまたは漢字節減はかへつてこの風潮を助長するものなりやについて吟味を遂げることによつて、どうやらその眞因をさぐりあてたやうに思ふ。

曰く眞因の第一は義字の使用であり、その第二はわが國の造語が無政府狀態にあることである。しかもこの二原因にさかのぼつて救治策を施すことは極めて簡單容易である。卽ち義字の全廢、音字の專用及び國立國語研究機關の常置である。

義字の全廢、音字の專用はわが國字問題當然の歸結であつて、義字、音字の優劣論は最早今日の問題ではない。この點について私は坪內博士の『私は國家永遠の理想としては寧ろ音字の專用を主張するものである』との言を頗る心强く感ずるものである。しかしてなほまた博士が『時文混亂の弊根は主として義字と音字との併用（福永曰く、この併用を重く見ると義字專用が是認される形ちになつて工合が惡い）に存すると思ふ』や『外國における造語の趨勢は、さすがにわが國ほど激甚でなく、またその造語が決してわが國のやうに亂暴狼藉ではない。なぜであらう？主として耳に訴へる音字本位の國柄だからである』などと述べてをられる所から見て、第一の點ではあきらかに博士が私共と同一主張を持つてをられることがうかゞはれる。

斯くの如き立派な根本的救治策の所有者たる坪內博士がそもそもまた何を懸念し、何を疑惧し、何がゆゑに解決に困惑してをられるのであるか。弊根の存する所を自ら正視されながら』そして、その私の懸念し、疑惧してゐることは、年を追つてます〳〵はなはだしくなるばかりである。しかも今日に及んでもまだ誰れもそれを曾てあきらかに說破しない位だから、無論その救治策を述べた例はない』とは何とした物いひか！　思ふに博士は理論上音文字採用の避くべからざるを認

められつゝもなほ後朝の分れを惜しんで未練を義字に殘してゐられるのではあるまいか？

音字の採用が博士のいはゆる『知つてゐるかぎりの漢字を臨時に組み合はせる』ことを根絶させる上において偉功を奏する事は申すまでもないが、それにも増して大切なことは、現在の日本語にある、耳で聞いただけでは何の事が分からないといふ語（重に漢語）が段々と驅逐されて、日本語が正當にして健全な方向に發達するといふことである。

一體、現在の日本語ではおもな語が漢字で書かれるために、耳で聞いただけではわからない語がはなはだおほく使はれる。現に電報や電話で誤解や行きちがひが起こつたり、講義、演說の類で聞きなれない漢語に出會はしてまごついたり、議會や裁判所の辯論で速記者がとんでもない漢語を書いたりすることはあまねく知れわたつた事實である。このやうに、言葉の本體といふべき談話や演說や講義の場合に、日本語が言葉の役目を完全に果してゐないといふその缺陷は何によつて生じてゐるかといへば、言つて分らない語も漢字で書けば分るからである。從つて漢字のやうな義字を國字として使つてゐるかぎり、日本語のこの缺點は救はれる時がない。私はあらゆる機會を利用して世の人に對し、銘々が語の選び方に氣を付けるやうにとときすゝめてゐるけれども

實をいへば、社會全體といふ多數の人に對して別段差しあたつての必要を感じない改良事業を、特別の機會を與へるといふこともなく、單に日常の注意によつて望むといふのは無理なことである。いや〳〵、それは人に對して望むことが無理だといふばかりではない。それを口癖のやうにやかましくいふ私自身でさへ――諸君が少し氣を付けてよまれたならば――この書き物でさういつた語を使つてゐることを、讀者諸君は發見されるであらう。

以上のやうな次第であるからして、かういふ日本語の缺點を救ふ根本的解決策としては、それをあらためることが是非必要であるやうに仕向けなければいけない。卽ち聞いて分からない語は、書いたのを見ても矢張り分からない樣にしなければいけない。いひかへれば、書いた日本語が口でいふ日本語と成るべく同等なものでなければいけない。而してこれは文字自身に意味を持たせてある義字を廢して、口でいふ音をそのまゝ書き表はす方法、卽ち音字を使ふことによつて初めて完成されることである。

既に述べた通り、音字の單用は坪内博士の理想であるから、これらの點については博士もまた私共と見る所を同じくしてをられることゝ信ずるが、博士の論文の或部分を讀むと、或ひは故伊

澤修二氏が「ローマ字ひろめ會」を脱會したことや、或ひはまた五十嵐力氏が假名やローマ字に失望したといふことなどが擧げてあつて、博士の音字論は未だ甚だしく不安定なものらしく推察されるのは口惜しい極みである。

五十嵐氏が假名だけの文章を見て落膽したといふ事には相當の理由があつて、今日假名ばかりの書き物が流行しないといふ一事だけでもその理由は推し測られるが、『私はまたローマ字使用を理想と思つたこともありました。そして暫く二三のローマ字の雜誌などを讀んで見、またをり〳〵ローマ字で手紙などを書いて見ましたが、暫くではあるが實際書いたりした結果すつかり失望してしまひました。そしてローマ字で書く日本文といふものは書くにも讀むにも容易なものでないことを悟つたやうな氣がします云々』といふやうな五十嵐氏の杜撰な物いひを聞いて『五十嵐君は、學者らしく、着實な研究及び試驗の後に斯ういふ意見に歸著されたのだ』といふ風なことを書いてゐられる坪内博士の音字理想論の正體は果して何物であるのか？

ローマ字で書く英文や獨文や佛文や伊文やスペイン文は果して書くにも讀むにも容易なものでないのであるか。日本語をローマ字で書いた場合とイタリー語をローマ字で書いた場合と、どこ

にどういふ相違があるのであるか。成人である五十嵐氏一個人が、暫く二三のローマ字雜誌などをよんで見たり、また折々ローマ字で手紙を書いて見た僅ばかりの經驗でもつて、頭のよい知識慾の旺盛な兒童が、漢字や假名を習ふかはりに、小學校の一年からローマ字を習ふ將來の狀態をどうして豫想し、輕々に判斷する事が出來るか。兒童に實際的教授をやつて見たのでもなく、心理學的實驗を經たのでもない、ホンの暫くの實驗が、學者らしく、著實な研究及び試驗だとは人を誣ふるも甚だしい。博士並びに讀者諸君、遲疑し逡巡されてはならぬ。今日の錯雜、混亂、不統一を極めた國語と習ふに難く忘るゝに易き國字の苦惱から國民を救ふ根本的解決策は音字特にローマ字の採用を措いて外に策はない。

四　國立國語研究所の常置

國語の混亂と不統一をまねいた一方面の原因が、言葉といふものについて知る所の少い現代人士——文士、記者、學者、官吏など——の任意の製造に放任してある所に存することについては既に述べた。從つて混亂せる狀態から時文を救ふ第二の策として、新語、譯語の濫造に對する干

渉及び取締といふことが當然考へられる。

一體わが國では國家が、干渉すべからざる所に干渉して個人の自由を脅かしてゐる點もないでもない――其點で月夜公園のロハ臺に於る青春男女の怨恨を買ふ査公も少くないと聞いてゐる――が、さうかと思ふと一方においては、放任すべからざるものを放任して顧みないといふトンチンカンな所もある。凡そ國語は國家統一の政策上首位に置かるべきものであつて、各國共國民教育の第一歩は國語教育よりはじまるのを見ても、なほまた征服國民が新占領地に對する國語政策を見ても肯かれる。近ごろ人々頻に國民思想の統一を說くが、國語の統一をわすれて國民思想の統一がどこにあるか。

放任の不可なることは誰しも認むる所として、それならばいはゆる干渉及び取締は如何にすべきかといふに、まさか拙い新語、譯語のつくり手を刑罰に處することも出來ない。最良の策は**國家が正確なる模範を示すこと**である。國立國語研究機關の常道については、私は昨年六月、雜誌中央公論を藉りて意のある所を述べたから、今ここに再說を略するが、官民擧つて速かにその實現を見るやうに努力せられることを望む次第である。

五　將來の造語方針

時文混亂の救治策について述べた私は、更に進んで將來の造語方針について一言すべき羽目になつた。以下順次述べることは即ち他日國立國語研究機關が設置された場合に、該機關の造語上採るべき方針の一端について掲げたものであるが、同時にまた一般國民の常識として是非心得て置かねばならぬことゝ信ずる。

第一に氣を付けねばならぬ事は、前にもちよつと述べて置いた通り、出來得るかぎり素直な本來の日本語でもつて新語または譯語を造るべきことである。この事は問題が日本人に聞かせる(或ひは讀ませる)日本語を造ることにある以上當然に要求さるべきであるといふ一般的原則からや、または國語の擁護などといふ精神的の意味合から許りでなく、實際日本人の心持ちに一番シックリと合ふのが英語でもフランス語でもドイツ語でもなく、なほまたエスペラントでもイドでもなく、或ひはまた漢語でもなく、本來の日本語だからである。

このやうな考への下に、今多く使はれてゐる言葉を調べて見ると、今日の國語界の趨勢が少し

くその筋道から踏み外れてゐるのではないかと思はれる節が少くない。例へば「ひながた（雛型）」といへばよい所を「模型」といつたり、或ひはまた「モデル」などといふ英語を使ふ類ひであるが、なほこの外に氣の付いたのを少し許り擧げれば、

「ねぢ廻し」を「囘螺器」または「スパンナー」
「遠めがね」を「望遠鏡」または「テレスコープ」
「針金綱（はりがねづな）」を「鋼線綱（かうせんかう）」または「ワイヤ・ロップ」
「覺え書き」を「備忘錄」または「メモランダム」
「色文（いろぶみ）」または「艶文（つやぶみ）」を「艶書（えんしよ）」または「ラブ・レター」
「すわり」を「安定」または「スタビリティー」
「寫し」を「謄本」または「コッピー」
「窓掛け」を「カーテン」
「繪具」を「顏料」または「ペイント」
「手輕な」を「簡易な」または「シンプルな」

などと呼び變へて得意になつてゐるなどは著しい例である。

右に述べたやうな私共の主張に對して少し問題になるのは坪內博士の論文中の左の二句である。

『(前略) 制限內の漢字だけでは新語は造りにくゝはないか。(中略) それとも嘗て某氏がいつたやうに、新語は總て「いろは」で造ることにして、「國體を組織する」は「くみあひをつくる」或ひは「くみあふ」或ひは「こむぱる」として適當であらうか? 「水成岩」を「みづでできたいは」と粗末な定義式にして、例の「霍亂(かくらん)」を「シリヨリクチヨリハクヤマヒ」と譯し、「太政官」を「オホイマツリゴトノツカサ」と譯した時代へ逆戻りして當然であらうか?』(繁を防ぐため博士の擧げられた例を多少略してある)

また曰く、

『語を擇ぶには音の强弱や緩急や淸濁を、殊に他の語と結び付いた時に起こる節奏(リズム)の當否を考へ合はさねばならぬものだ。明治初期の假名專用論者や、あるローマ字論者のやうに、「汽車」を「ムシケグルマ」、「鐵道」を「クロガネミチ」、「電信」を「エレキノフミヅカヒ」で濟まさうとする

のは、いふまでもなく時代錯誤だ』と。

いくら私共が、本來の日本語を尙ぶといふたとて、「水成岩」を「みづでできたいは」だとか、「汽車」を「ムシケグルマ」などと飜譯して得意になつてゐる程まだ耄碌はしてをらない。吳々も誤解なきことを望むのは、私共の言ひ分が、出來得るかぎり本來の日本語を使へといふのにあることで、やむを得なければ漢語を採り入れることも、原語主義に據ることも却けるものでは決してないことは後に述べるところを見てもわかる。併しながら、漢語採用や原語主義に移る前に、今一度踏みとまつて、坪內博士並びに讀者諸君に申し上げることがある。苟くも日本文を書く人が、否一般に日本語を使ふ人が、本來の日本語の中で工合の善ささうなものを搜して見ることを一度もしないで――その勞を惜しんで、忽ち外國語そのまゝを使つたり、または自分の知つてゐる範圍の漢字を組み合せて、勝手な新語、譯語を濫造したりして時文を混亂させることは、日本語にとつてその發達に對して決して忠實なる所以ではない。この意味において私は鐵道省の小役人の仕事らしい「出勤時間（ラッシュアワー）」も、坪內博士の論文中に散見する「節奏（リズム）」、「談話語（コンバーセーショナル）」、「俗語（コロキャル）」「卑語（スラング）」、「方言（ダイヤレクト）」、「混沌（ケオス）」、「紛亂（マッス）」も今一段の工夫を要するものだと信じてゐる。

こゝまで述べた序に私は、日本人の造語能力について言及する必要を感ずる。「海岸にころがつてゐる栗」にもたとふべきものだから「はまぐり」(蛤)といふ言葉が出來、薄暮のころ行人の顏がよく見分けがつかぬところから「たそがれ」が出來、手を延ばした時の快い氣持ちが卽ち「たのし」(手延し)となり、さては「銀ブラ」を生み、「パンヂウ」を拵へた日本人が、「水成岩」を「みづでできたいは」などとよび換へることを想像されるとは、何と日本人の造語能力を侮辱された言葉であらう! 勿論私は博士の擧げられた「赤化」、「左傾」、「協調」、「委讓」、何々……などといふ漢語を、今博士の目の前で右から左に、素直な日本語に直すことの困難を知らないのではない。殊に小學校以來、本來の日本語を俗語などとさげすんで、それを使はせまい使はせまいとする所の間違つた教育を受けた私共にとつて、それが並み大抵の骨折り仕事でないことをよく知つてゐる。がしかしそれは、困難な仕事ではあるけれども、決して出來ない相談ではない。

曾てドイツで、國語がラテンやグリーキの爲めに亂された――今、日本語が漢語に亂されてゐるやうに――のを、第一流の文藝家が片田舍を遍歷して言葉の掘出しをして正しき道に歸したといふ。シルラーがスイスの山奧の名もない田舍から素直なドイツ語を探して來て使つた言葉で

さへ、何百といふ數にのぼつてゐるといふ。斯くして今日のドイツ文學の勃興を見たのであるといふ。

これは常々私の考へてゐることであるが、所謂今日の「教育のある人」の使ふ言葉には、餘程濁つた所があるやうに思はれる。教育が間ちがつてゐるからである、といふよりも寧ろ、さういふ間ちがつた教育を必要とする社會が間ちがつてゐるからだ。さういふ間ちがつた教育に割合害はれてゐない田舍の人々或ひはさういふ教育を必要としない社會に住んでゐる人々は素直な言葉を知つてゐるものだ。たゞしい日本語、よい日本語は今日都會ではあまり聞かれない、却て吾々は所謂教育のない田舍の人たちからをしへられる所がおほい。教育が間ちがつてゐるからである。

それは兎も角、我國でもこのやうにして、昔からいひ繼ぎ語り繼いだ言葉を搜し求め得たとき、國語はその混亂狀態を脱してはじめてたゞしい道に歸ることが出來るであらう。國立國語研究所はまづ第一にこの仕事に著手すべきである。廣く國民の間から適當な新語譯語を募ることも勿論同時にいゝ。

博士の言葉の内今一つ聞き流して置くことの出來ないのは、博士がアチラコチラで、『新語をいろはで作る』といふやうな事を書いてをられることだが、これは少しく可笑な物いひである。『漢字を組み合はせて言葉を造る』といふことでさへ、嚴密にいへば『漢語を組み合はせて……』といふべきである――「石油」といふ漢語は「石」といふ語と、「油」といふ語と組み合はさつたものでなければならない――のに「みづでできたいは」といふ言葉が、いろはでつくられた言葉であるとは、何の事であるか全く意味をなさい。「みづでできたいは」は「みづ」、「で」、「できた」、「いは」の四つの日本語でつくられた言葉であるといふ以外に、それはいろはでつくつた言葉でもなければ、abcでつくつた言葉でもなく、勿論漢字でつくつた言葉ではない。自體、語を字でつくるなどといふことがある道理がないのである。

尊敬する坪内博士が、このやうな看易き道理を御存知ない筈は勿論なく、あの御言葉はたゞ世俗一般のいふ所にならつて使はれたことゝ察するが、私は決して博士の言葉尻を捕へて兎や角いつたり、人のあげ足取りをして快哉をさけんでゐるものでない。あゝいふ物いひが代表する世俗一般の文字と言葉に對する無理解を罵るのである。

俗語と新語、いづれが人々に理解され易きやの問題については、博士は奇妙な解說をしてゐられる。曰く、『すべて新語は、殊に濫造される新語の如きは非常に難かしくて憶え難いやうに思はれるが、子供や無學者に取つてはどちらもおなじことだ。「ずるい」も「狡猾」も「不得要領」も「判らない」も（他の例は略す）習つたり憶えたりする上には差等はない。（中略）一概に俗語なぞを理解し易いものと假定してゐる論者はこの理をわすれてゐるのである』と。私自身もまたその俗語などを理解し易いものと假定してゐる論者の一人であるが、その私達が『俗語の方が子供や無學者にとつて判り易い』といふのは、生まれてはじめて「ずるい」と「狡猾」とに、或は「わからない」と「不得要領」とに出くわした場合を指してゐるのではない。それにもかゝはらず博士が、子供や無學者が、はじめて「ずるい」と「狡猾」との二つの言葉を習ふ場合の難易に大差ないことを述べて、『子供や無學者にとつては、俗語も新語もおなじことだ』といふ風な結論をみちびいてゐられるのは寧ろ滑稽に近い。

俗語とはすなはち通俗の言葉である。通俗の言葉はすなはち廣く國民の間に知れ亘つてゐるといふ點において、いひかへれば、小兒や田舍者や老爺やにとつて既知の言葉だといふ點におい

て、一般からいつて耳なれない非俗語よりも理解しやすいのは知れた話しである。これを事實に照らして見ても、「狡猾」では何の事か解らないが、「ずるい」ならすぐ解るといふ子供や無學者はザラにある。この事實は首をかけても私の保證する所である。

本來の日本語についてはその位にして、造語上第二に採るべき方針としては、やむを得ない場合には漢語を採用するもさまたげないことである。しかしこの場合注意すべきことが凡そ四つある。卽ち、

(イ)、坪内博士の主張通り、この場合傳統的文學に使はれてゐた既存の漢語に優先權を與へて無用な新語を一切つくらないこと。

(ロ)、同音異義の漢語はさけること。

(ハ)、短かすぎる漢語もいけない。

(ニ)、新漢語に對する發音と、言葉のあげさげを示めすこと。

無用な新語をつくつて時文の混亂をまねくことの不可なる事については博士も力說された所であるし、なほまたこの書物でも一應うたつて置いた所であるから、重ねて述べることを避けるが、

この點で私は「監獄」といふ言葉を「刑務所」にあらためた司法當局の措置を常々苦々しく思つてゐるにかゝはらず、坪内博士の論文には「刑務所」を是認してゐられるらしい口吻が見えるのは殘念な話しである。

同音異義の漢語は卽ち、耳で聞いた場合にはわからなくて、字を見てはじめて了解するといふ漢語で、「文化」、「文華」、「分科」、「分火」、「文科」、「分化」などの種であるが、これは言葉の本體が音であり響きである以上當然排斥されねばならぬ言葉である。

次ぎに、漢語は簡潔だといふ點においておほくの愛好者を持つてゐるらしく想像されるけれども、餘りに短い言葉は語として意味の不明な場合がおほく――書く時は別として――それはまたいふ人の心持ちからいつても多少物足りないものであるから、適當な長さにすることが必要である。例へば「忠」といふよりは「忠義」や「忠實」に、「孝」といふよりは「孝行」とした方がよい。みじかすぎる言葉が、いふ人の心持ちから見て如何にも物足りない感じがする顯著な例としては私は重ね言葉のことをこゝに擧げて見たい。

ひとの話しを、よく氣を付けて聞いてゐると、餘程教育のある人の話す場合でも、次ぎの様な

重ね言葉を口からすべらせることが少くない。

『一番最後に殘つた人は……』

『多年の宿望が漸く達せられた』

『早く決心をきめる必要がある』

『よく熟考してから御返事を致します』

『今の現狀はどうなつてゐるか？』

『本統の實戰だつたらそんなことはしない』

『自分の私宅からかよつてゐます』

『私はそれを非常に熱望してゐる』

なぜかういふ現象が起るかといふに、「最後」や「宿望」や「決心」や「熟考する」や「現狀」や「實戰」や「私宅」や「熱望」やが餘りに簡潔すぎて、使ふ人の心持からいつて甚だしく頼りなさを感ぜられる――それ等が丁度「後」や「望み」や「心」や「考へる」や「狀態」や「戰爭」や「うち」や「希望」やと大差なく感ぜられる――からであつて、卽簡潔に過ぎることの不

可なる事を裏書きして居るものである。

最後に是非一言せねばならぬことは、言葉をつくる人として、新語、譯語をこしらへたならば、それの發音と、音の抑揚とを示すことを忘れてはならぬといふことである。これは言葉の本質が、音であり響きであり、その本體とすべき所が談話や講義や演說にあるといふ以上、當然なされるべきことであるに拘らず、それが今日までわが國で忘れられてをつたことは迂濶千萬な話しである。畢竟それといふものは言葉を眼で見るべき文字と混同してゐたからにちがひない。「攝政宮」を「せつせいのみや」と讀むべきか、或ひはまた「せつせうのみや」と讀むべきかといふことが問題となつたり、「博士」は「ハカセ」がただしいか「ハクシ」が本統かなどといふことが繰りかへされたりするのがそれである。しかしてその由つて來る所が、たゞ字だけを示して、言葉を示さないとこから起ることは申すまでもないが、要するに一面からいへば、漢字といふものに言葉を寫す能力の缺けてゐる證據だといふことにもなる。

全體、政府がある用語を制定して、それを官報によつて國民に公布するときでさへ、この注意を兎角怠り勝ちであるのは甚だ心得ぬ話しである。「監獄」を「刑務所」にあらためたときに、政

府は果して新名稱が「ケイムショ」であるか「ケイムジョ」であるか「ケイムドコロ」であるか「キャウムショ」であるか「キャウムジョ」であるか「キャウムドコロ」であるかを公布したかどうか。この點で私は、先般海軍當局が「海軍用語」なる書き物を出版するに當つてとつた所の所置の用意周到なことを賞讃しなければならない。該書には、「用語」といふ欄と「用字」といふ欄とが分かれてゐて、その用語欄にはただしい發音を明示してある。これはまた明らかに海軍當局が語と字との何たるものであるかを判然と區別してゐる證據として私の最も愉快とする所である。たゞ私がこの書き物に對して難を書いて點睛を缺くの憾を感ずるのは音の抑揚を示すことをはぶいたことである。音の抑揚をわすれて發音といふことを考へることは、外國語の場合は勿論のこと、日本語においても極めて古い考へ方である。

例へば、前に擧げた Sessyô といふ語にしても、第一節を揚げて Séssyô と發音すれば「殺生」となり、それをあげずに發音すれば Sèssyô (折衝)となる類で、揚げ下げの相違が全く別な言葉に變化することから見ても、これは打ち捨てゝ置くことの出來ない重大問題である。人によつては「國語の發音のあげ下げは所によつて區々になつてゐて手がつけられない」といふものもあるが、

私はその區々になつてゐる原因が、從來あげ下げについて人々が無關心であつたことに存することを思はずにはゐられない。

新語、譯語を造る第三の方法としては、本來の日本語や漢語に譯するのでなく、原語を適當に日本化させて採り入れるのが都合がよい場合もあつて、今日「ランプ」、「マツチ」、「アルコール」、「ヂヤスターゼ」、「インキ」などが普く使はれてゐる。しかしこれらの語を今日「洋燈」、「燐寸」、「酒精」、「消化素」、「墨汁」などと呼びかへる必要の毫もないことは勿論なことであるが、原語主義を採用する範圍については、實際それぞれの言葉に當つて見てきめるより外に致し方はない。

六　字と語

坪内博士が、漢字節減論者に對して述べてゐられる言葉の中に、『或ひは彼等は「字」といふことにその心を占斷されて、字と語とが密接に表裏してをり、到底引離して取捨さるべきものでないことを、ふと遺忘されたのではないか？』といふ一節がある。この項目では、まづ私はこの

事について一言して次ぎに細田氏の議論といふものに觸れて見ることにしたい。

字と語との間に密接な關係のあることは申すまでもないが、それは字から語を見た場合の話しだけであつて、語の方から字を見た場合には餘程その趣きがちがふといふことを、博士は果して意識してゐられるのであらうか？　語は思想、知識をいひあらはす一手段で、字はその語を寫す記號である以上、語を離れて文字が存在する道理はないけれども、字を離れても語は嚴として存在するものである。世界人類の歴史を繙くまでもなく、字が發明される以前において、既に語が立派な發達を遂げてゐたことが何よりの證據ではないか。畢竟この意味において、博士のいはゆる『字と語とは到底引離して取捨さるべきものでない』との御言葉は大變な誤解だといはなければならない。

「さくら」といひ「うめ」といひ「いぬ」といひ「ねこ」といふとき、どこに「櫻」や「梅」や「犬」や「猫」といふ文字の隨行することが必要であらう？　漢語だとて矢張りおなじことである。「ヒコーキ」といひ「ジドーシャ」といふ時、「飛ぶ」や「行」や「機」や「自」や「動」や「車」を思ひ浮かべる三、四歳の子供がどこにあらう？　子供計りではない、成人だとて矢張りおなじ

ことである。ある語(漢語)の意味も言葉も十分知つてゐながらどうしても、それをどう書くかゞ思ひ出せないといふ場合があるではないか！　或人は『語源の知識を斷たれてはサツパリ譯がわからなくなる』といふ。『路上の人々へ』とかいふ本にもさういふ馬鹿氣た事が書いてあつた。考へても見るがよい、「さくら」といひ「ねこ」といひ、その語源を知つて初めてその言葉を語り、それを理解する者が何處にあるか？「はまぐり」も「たそがれ」も「たのし」もおなじことだ。更に進んで「洗濯」や「飛行機」や「自動車」のやうな漢語だとて少しもちがはない。語源を知ることは興味のあることだ。併し一般の人々が、ふだんそれを知らなければ言葉が通じないといふ性質のものではない。一般の人々は、あの空を翔る「ヒコーキ」全體を指して「ヒコーキ」と憶えてゐるだけであつて、自分の口にする「ヒ」や「コー」や「キ」が、どういふ手つゞきによつて作られたかなどいふことには關(あづか)り知らないのである。

　次に坪內博士が『同君の所論中の最も傾聽すべき點である』と稱してかゝげられた、東京女高師教授細田謙藏氏の所論に至つては、字の教育と語の教育との區別を全くわきまへてをられない暴論であつて、あゝいふ樣なものに坪內博士が傾聽してをられるものだとしたならば、私は『國

家永遠の理想としては寧ろ音字の單用を主張するものである』と斷言された博士の國語國字觀の根柢を疑はざるを得ない。

細田氏は次ぎのやうに書いてをられるのである。

『漢字は總數四萬七千六百八十一字、ローマ字は廿六字、假名は四十七字といへば、多寡の差甚だしきが如くなるも、その實、漢字の四萬七千六百八十一字は、字たると同時に語なれば、それだけの字を知ることはそれだけの語を知ることに相當す。かの英語は、その「ウェブスター字典」にをさむる所だけにて十二萬語……なりといふ。（中略）字數過多の說は取るに足らざるなり』

細田氏の論は『ローマ字や假名は、字は成程やさしいかもしれないが、別に語を教へる必要がある。所が漢字ならば字卽ち語だから、字を教へるに骨が折れても、語の教育の方で勞がはぶけるから、結局この論はどつちともいはれない』といふのにあるらしいが、果してさうであらうか？『それだけの字を知ること』は果して『それだけの語を知ること』に相當するだらうか？

今こゝに、「さくら」といふ日本語も、それを寫す「櫻」といふ漢字も、なほまた Sakura とい

ふローマ字も知らない幼兒があつたとして——卽ちこの小兒は語も字も「さくら」については知る所がない——今その子供に「櫻」といふ漢字を書いて見せて、これが「サクラ」といふ支那の文字であること、いひ替れば(イ)「櫻」は「サクラ」と讀むべきこと(ロ)「サクラ」は「櫻」と書くべきことの二つを敎へたとしたならば——以上が字の敎育であるが——それだけで果してこの子供は「櫻」といふ字を見て、あの春に花さく櫻を想像することが出來るであらうか？

申すまでもなく、語は語として別に敎育されなければならない。卽ち「さくら」といふ日本語は、春に花さくあの櫻のことを指すことばであるといふことを、字の敎育の外に敎へて置かなければならない。しかして通例、語敎育は字敎育に先だつて施行されるのが順序であるけれども、時として、兩者同時に行はれることのあることは申すまでもない。私は、細田氏が學校で漢字を敎へられるときに同時に語の敎育もあはせて行はれたとして、そしてそれまでも漢字敎育の內に込めて仕舞はれたとて——用語上の形式論は別として——敢て深くとがめるものではない。問題はそんな所にあるのではなくて、細田氏が、「漢字は字數が多過ぎるからいけない」といふ吾々音字論者の主張を正解してゐられない所にあるのである。

『春に花さくあの樹のことを「さくら」といふのである』といふ語教育は、私共の理想の世の中でも、今日と同様に必要なことであることに變りはないし、その難易とて大差はない――理想の世の中では難解な漢語が少くなつて來て語教育も大變樂になるといふ風なこともあるが、それは暫く擧げないとして――が、さて次ぎに、その「さくら」といふ日本語を書き記す段になると、漢字の「櫻」は、ローマ字の Sakura や、假名の「サクラ」にくらべて、教育上または習得上大なる難易があつて、その事が今日の國語教育上の一大障害物となつてゐるのではないか！ 讀むにも書くにも難しい、そして何千といふ數のある、しかも最もおどろくべきことは、その一字々々に呉音、漢音、唐音、と外に二種や三種の訓の付いた讀み方の多い漢字を習ふことがやり切れないといふのではなかつたか！ 若しそれ、細田氏の論の中で、漢字と音字との字數の多少についての比較などに至つては、殆ど兒戯に類する御研究であつて、今時の人に對して、「櫻」は一字だが「さくら」は三字、さうして Sakura は六字だなどといつたならば、小學生徒でもその抽象的な比較法に失望するであらう。

七　むすび

漢字節減問題――といふよりは寧ろ一般に國字、國語の問題に對して、世論が冷淡であることや、今回の漢字節減が無造作に成立したことや、漢字の取捨存廢に關する標準やについては、ローマ字論者たる私としてなほいふべき甚多くを持つてゐるけれども、ゆゑあつて今は述べない。臨時國語調査會の取り極めに對しては、批難すべき點も決して少くはなからう。併し、この書き物で私が指摘したやうな方面から、坪内博士なり細田氏なりが、該案を攻撃されるのであつたならば、私は寧ろ調査會側に立つて大に辯護する必要を感ずる次第である。

とはいふものゝ、坪内博士はもともと「音字の單用」を理想とせられる御方で、根本において吾人と主張をおなじくせられる以上、枝葉の論は左まで問題視するに足り無い。私として、要は、坪内先生の論を借りて、自己のいはんと欲する所のものを述べたに過ぎない。勢の趣く所いふ所往々過激に走り、先輩に對し敬意を失した個處も少くないかも知れない。博士の寛恕を乞ふ次第である。（大正十三年二月東京日日新聞所載）

電信と國字問題

一　汽車より遲い電報

世の中が變つて來ました。ローマから東京へ飛行機が飛んで來ようといふのです。無線電話の受話器を耳に當てさへすれば、安樂椅子にフンゾリかへりながらでも音樂會（コンサート）に出席する事が出來るやうになりました。さて、この樣に何でもかでも變る、目まぐるしい世の中に、獨り泰然自若として舊態をあらためないものの一つに「日本の電信界」があります。

私の知つて居る、或役所の某高官が過ぐる日御用あつて九州へ出張されました。御用終つて某高官は、誰でもがする通り、出先から東京の自宅へ「何日の何時歸る」の電報を打つたと思ひなさい。ところが、その電報はどうでせう！　佐伯榮養博士を信じ切つてゐるこの高官は山北か國府津あたりでくばられた「御夕食の用意出來申し候」といふ食堂車のビラ紙などには眼もくれ

ず、歸宅後の團欒を樂みに、ペコペコなおなかをかゝへて郊外の住家まで食慾を持つて歸つて見ると、これはまたどうしたといふのでせう？　おうちではお夕飯の支度は勿論の事、風呂もあひにくたてゝないといふ始末です。若しもこの高官がクリスチャンでなかつたならば、奥樣や女中の頭の上にはかみなりが落ちて、たづさへて來た岡山の水蜜桃も、神戸の瓦せんべいも、靜岡のわさびづけも疊の上にたゝきつけられたにちがひありません……と思はれるころを見計らつてその電報が屆いたのです。つまり汽車よりもおそい電報といふ事になります。

と私がこの話しに色々と綾をつけて書いても、そんな話し位には今更どうにも、ビクともなさらない程左樣に、電報の延著はこの國では當り前な事になつてしまひました。この外なほ電報といふ電報が日本では誤字脫字のおびただしいものである事は誰しも先刻御承知の通りです。

全體、世の中が進歩すればする程何事でも段々便利になつて行くのが通則です。ところが日本の電報だけは丁度その裏を行くのだからたまりません。私たちのもつと若かつた時には「汽車より遲い電報」などといふ事は藥にしたくてもなかつたのに、今日では「至急報」か「官報」でなければ全く急場の役に立たないやうになつてしまひましたといつても決して大袈裟過ぎはしませ

ん。昔便利だつたものが世の進歩につれて却て不便になるといふ、そこにこの話がいとぐちを開くのです。

人によると――殊に田舎の人や年寄りなどになると今日でも、配達夫の『電報ッ！』といふ聲を聞くと、電報を開かない内からもう胸をドキ〳〵させるのがあります。何事が身内に起こつたのかと案ずるのでせう。それといふものが從來、電報使用の範圍が『父危篤スグ歸レ』だとか、『金送レタノム』だとかいふ異常の事變が起こつた場合にかぎられてゐたからであります。

ところが、時勢は變りました。世の中は今までテクであるいてゐた人も電車に乘り田舍にも縱横に線路が敷かれ、高速度の電車が出來、自動車が走る、飛行機が飛ぶ、誠にせはしい世の中になりました。かういふ世の中に通信だけがひとりテクで濟ましてゐる譯にはどうしたつて行きますまい。電信を利用する人が昔にくらべて激增したことは遞信省の統計を調べに行かなくてもわかる事でせう。

勿論遞信省だつてこの趨勢を見てたゞポカンとあそんでゐた譯ではありません。時勢に應ずるやうに設備の改善や從業員の增加をやつてもをりませう。併し當局の施設以上に電信の利用者が

ふえて來たのだから仕方がありません。今日大會社や大商店が發送接受する通信は大抵電信によつてゐて、書き物による通信卽ち手紙は單に照校の意味で後から出されてゐるのに過ぎないといふことです。しかも、その電報文の一通の長さが一千字に達するもが少くなく、五六百字のものはザラにあるといふのだからたまりません。ところで、針金のこの大需要に對して、遞信當局の施設も改善もいはゆる當座しのぎの間に合せ策計りで『燒け石に水』と一般、いつも根本の改善策に觸れてゐないやうなきらひはないでせうか。

總てかういふ問題が起こつた時、よその國の事情を調べてそれとくらべて見るのが大變參考になります。西洋だつて今日、電信利用者の激增した事は日本とおなじことです。いや寧ろその增加の割合は日本よりズツト上であるに相違ありません。にもかゝはらず日本だけがひとり非文化的な通信狀態になつてゐるのはなぜでせうか。この原因を探究してそれの對應策を一つ講じて見ませう。

尤も電信による通信狀態が非文化的なのはひとり日本にかぎつた譯ではありません。殊にヒドイのはお隣りの支那です。支那の文字は卽例の漢字ですが、あの數おほい漢字にはとても一「トン

ツー、トンツー」のモールス符號などをあてはめる事は出來ません。そこで支那人は考へました。各の漢字に數字番號を付けて、その番號で電報を打つのださうです。これがためには電報を打つ方もひく方も各その番號の元帳である所の電報字引を備へてゐて二度の飜譯手つゞきを經なければなりません。だから電報を打つにも讀むにも大變な手間がかゝつて、あの國では電信が決して早いものゝ部類にははいつてをりません。

そこへくると不完全ながらも兎に角假名といふ音文字を持つてゐた日本は餘程の仕合せでした。日本では西洋のＡＢＣに倣つて「イロハ」にそれ〴〵モールス符號を當て篏めなほ足らぬところは色々と考へて兎も角五十幾つかの「トンツー」の組合せを作つて、それによつてやす〴〵と電報を打つ事も讀む事も出來ます。たとへばローマ字のＡのモールス符號である「・ー」は假名の「イ」にＢ（ー・・・）は「ハ」にＣ（ー・ー・）は「ニ」に當て嵌めるといふ具合に。

併しながら、その「やす〴〵と」はたゞ支那の狀態にくらべていつたゞけの話です。目を轉じて一たびこれを歐米諸國のそれにくらべて見たらどうでせう。前にも述べた通り、日本のは延著、誤字、脫字で困りぬいてゐるではありませんか。それなら日本の電報と西洋の電報、全體何處に

このちがひの源が潜んでゐるのでせう？　勿論原因として考へられる事はたゞ一つではありません。彼れ等のが多く私立會社の營利事業になつてゐるといふ事も考へなければなりません。日本では何事も豫算の緊縮々々で針金を增設したり器具を買ひ入れたりする事が出來にくい點もあるでせう。またわが國の電信從事員の給與が歐米にくらべて少いため技倆のすぐれた人達を多く呼び集める事が出來にくいやうな事情もありませう。併し彼我相違の根本は實に文字の相違にあるのではないかと私は考へるのです。いひかへれば彼れがローマ字を國字としてゐるのに對してわれが假名を電信用の文字として使つてゐるといふ事が日本の電信界をして今日の振はない狀態を齎した最大理由ではあるまいかといふのです。この問題にして充分な解決を見ないかぎり、遞信當局の努力も施設もひつきやう當座しのぎの彌縫策に終つて、數年ならずしてまた再び西洋とくらべて一大空隙を見るに至るでせう。

二　電信字としての假名とローマ字

話しは暫く脇道にはいりますが、京大教授野上文學博士は昨年六月號の雜誌「太陽」誌上で、

「假名とローマ字」の標題のもとに私共のローマ字論を反駁された事がありました。當時私は博士の議論に對して、大阪毎日及び東京日日紙をかりてローマ字論者の主張と立場とをあきらかにして置きましたが、たゞ一つ電信用文字として兩者の優劣を比較研究することをわざとひかへて置きました。あらためて別に詳述するのが好都合だと考へたからです。で今日は野上博士に對するお答をかねて私はこの問題を述べて行きたいと思ひます。野上博士はたゞ漠然と次ぎの様に斷言してをられるのです。

『電信に就ては論ずる迄もなく字數の少ないだけ假名はローマ字に比して利益である』（太陽六月號一二六頁）

電信の事については、まことに失禮な申し分ではあるが、餘りお取調べになつた事のない博士が、問題を淺く考へられて右にかゝげたやうな斷言を敢てされたのは一應も二應も尤もな話しではありますが、これは人々のよく考へちがひをする點ですから、私は――私とても矢張り素人の一人に過ぎませんけれども――この問題を、通信速度、教育及び機械の利用といふやうな見地から研究して見ませう。

三　通信速度の比較

『最もおほくの場合において、假名ならば一つで濟む所をローマ字では字を二つ書かなければならない。從つて、モールス符號を使ふ電信では、ローマ字式は假名式にくらべて長たらしいものになつて、電報を打つのに二倍の時間がかゝる』といふ議論は私共が世間でよく耳にする所のものであります。この說をとなへる人はあながち野上氏のやうな假名論者計りではないと見えて、ローマ字贊成者の內にも矢張り同樣な誤解をしてをる人があります。

「世界文字學」といふ本の著者、高橋龍雄といふ方はローマ字贊成者の一人であられるが、その著書には矢張り野上博士と似た樣な事を書いて、しかも次ぎの樣に議論をむすんでをられます。

『……から電信の上で假名文字がローマ字に優つて居る事は西洋人も認めて居る處である』（同書一九一頁）

またおなじ本の一九五頁には、

『日本の假名文字が電信用の文字として世界に較べ物の無い便利なものである……云々』

とまでも假名をほめてあります。ローマ字が果してこれ等の人々の說くやうに、假名にくらべてそんなにつまらないものなのでせうかしら？

『姉病氣便船アリ次第歸レ。』

これは或畫家が伊豆の大島へ寫生旅行に出掛けてゐた時に東京の自宅から打たれた電報であつて、勿論ホンの一例としてかゝげたものですが、說明の便宜上私はこの例の文句から假名書きとローマ字書きの通信速度の比較をして見やうかと考へます。くれ〴〵もことはつて置きますが、私は僅一つや二つの例から一般に適用する結論をみちびく意思は毛頭持つてをりません。たゞ話しの上の都合から、このやうな、電報文としては寧ろありふれたものを持ち出すのが大層具合がよいと考へたまでの事です。

わが國の電信の規定によると右の電報文に對する假名のモールス符號は左の通りです。

ア　ネ　ヒ　濁　ヤ　ウ　キ

ヒ　濁　ン　セ　ン　ア　リ

－－・－・ シ　－・ タ　・・ 濁　・－ イ　・－・・ カ　－・－－－ エ　－－－ レ

右の符號から次ぎのやうな統計がとれます。

文字の數……………………………二一
長間隔の數…………………………二〇
長符の數……………………………四二
短符の數……………………………三八
短間隔の數…………………………五九

電信の規定によると、長符の長さは短符の三倍、亦長間隔は短間隔の三倍で且短符と短間隔とはおなじ長さですから、今假りに短符一つを打つにt秒時間をつひやすものとすれば、右の文章を假名式のモールス符號で打つ（または聞く）のに要する時間は次ぎの計算で出てくる筈です。

(3×42＋38＋3×20＋59) t ＝283 t秒

右とおなじ電文をローマ字（日本式綴り方のローマ字を使ふ）で書けばそのモールス符號は次

ぎの通りになります

a	n	e	b	y	o	o	k	i		
・－	－・	・	－・・・	－・－－	－－－	－－－	－・－	・・		
b	i	n	s	e	n	a	r	i	s	i
－・・・	・・	－・	・・・	・	－・	・－	・－・	・・	・・・	・・
d	a	i	k	a	e	r	e			
－・・	・－	・・	－・－	・－	・	・－・	・			

右の符號から次ぎの統計がとれます。

文字の數……………………………二八

長間隔の數…………………………二七

長符の數……………………………二五

短符の數……………………………四二

短間隔の數…………………………三九

假名の場合とおなじ理窟で、ローマ字式のモールス符號で前記の文章を打つ（または聞く）に要する時間は次ぎの計算で求められる譯です。

、$(3\times 25+42+3\times 27+39)t=237t$ 秒

さて、この二つの統計を見ますと、右の例ではおなじ文句を假名式で打つ場合には 287t 秒もかゝるのに、ローマ字式ではかへつて 237t 秒で濟むといふ結果になつてゐます。これは別に私の計算に手品を使つたのでも何でもない、たれが、いつ、どこでやつて見てもこの結果が出てくる筈です。例の萬有還銀説などゝ同一視せざらんことを望みます。

とはいふものゝ、前にもおことはりした通り、これは僅一つの電報例から導いた結果であるに過ぎません。從つて上記の數字には實の所、餘り大した信用を置く譯には勿論まゐりません。この文章例はローマ字式に偶々有利な一例であるに過ぎないともいひ得るので、私は議論の公平を期するため更に進んで第二例、第三例……等實際の電報例およそ二六〇通について統計をとつて見ました。今こゝにその計算を前の例に從つて一々列記するのは繁雜に過ぎますので、それは一さい省略して、統計から得た所の結論だけを直に述べる事にすると左のやうになります。

假名式もローマ字式も殆んど同じ時間で打てる。

以上述べたのは單に理論上の計算に基いての話しですが、世には往々實地にあたつて見ると机

上の計算通りに行かないものがあります。そこで議論の萬全を期するため私は海軍水雷學校で實地に電鍵を押して電信を打つて見た實驗の成績を書き添へて置きます。御存知でない方もあらうと思ひますが、海軍水雷學校は海軍における水雷術計りでなく電信術の教授及び研究をかねてゐる學校なのです。

實用通信文數百通ヲ日本式綴リ方ノローマ字文ニ直シ送信時間ノ長短ニ就キ在來ノ假名式ト比較實驗ヲ行ヒタル成績左表ノ如シ。

	字數	送信時間（「デルタ」單位）
假名式	八〇四七	一〇九二六・七五
ローマ字式	一一八八四	一〇五七四・五九

右の表で、時間の單位「デルタ」が一秒の何分の一にあたるかを發表する事は私にゆるされてゐない所ですが、假名式とローマ字式との送信時間の比較をする場合にはこの統計だけで充分な筈です。

なほこまかな事を申せば、前記の統計では、ローマ字式の長音符を有する文字例へば「ô」や

「ū」のやうなものはいづれも「oo」（—— —— ——　—— —— ——合計25t秒）や「uu」（— — —　— — —合計17t秒）と母音字を二つ重ねて打つ事にして計算してありますけれども、若し將來ローマ字式電報を採用した場合に、これ等のかはりに單一の符號例へば現に西洋で使はれてゐる「ö」（— — —— ——）合計13t秒）や「ü」（— — — ——合計11t秒）を「ō」及び「ū」のかはりに流用するといふ風な取極めを設けることによつて——この取極めは極めて必要なことであると同時に可能なことである——右にかゝげた統計は更に一層ローマ字式に有利な數となる譯です。日本語において「ō」や「ū」の出現度數（frequency）は決して輕視すべき數ではありませんから。

右の統計でも一つ斷はつて置くべき事は語間の問題です。語間は一語一語の間隔の事で、電信の規則によると短間隔の五倍だけあける事になつてゐますさ。うして、歐文電報が必ず語間をあけることにしてゐるのとおなじやうに、日本語をローマ字で書いたローマ字文の電報も語間をあけるのが本統です。所が前にかゝげた『姉病氣便船あり次第歸れ』の電報も、水雷學校における統計もこの事を考への外において計算してあります。しかしてこの大切な語間の事をなぜ私が計算の外に置いたかといふ理由は極めて簡單です。それは、私たちの意見では、語間をあける事は

假名式の電報でも必要だと見てゐるからです（この大切な事がわが國では從來行はれてをりませんが）。若し假名にいらないものならローマ字文の時にもいらないものだといへるでせう。從つて假名式とローマ字式との電信文の送信速度の比較をする時にはこの事を暫く計算外に置いても差支はありません。なほ語間をあける事については私は大いに世人の注意を促したいと思つてゐる事がありますから「分け書き」といふ項目で再説することに致します。

話しはそれからそれへと大分專門的なことに深入りしましたが要するに、從來おほくの人々が想像してゐたやうにローマ字式は長たらしくて假名式よりも暇がかゝる――約二倍も――といふ事や電信用として假名文字が世界第一であるなどゝいふ事は眞赤な嘘で、特別にどちらが優れて居ると云ふ程の相違は、モールス符號を介して行れて居る我國今日の電信の仕組みに於ける通信速度の上に顯れて居ません。

四　通信手敎育の難易

既に述べた通り、わが國今日の電信のやり方は、發信局にあつては受け付けた通信文をモール

ス符號に飜譯して送信し、受信局では送信されたモールス符號を受話器または現字機の音響機によつて耳で聞きながら假名に再び飜譯し直す所のいはゆる音響式の受信を行つてゐる——一部になほ舊式な紙テープに現れる現字機受信を墨守してゐる所がないでもないが——のですが、このモールス符號を覺えるといふ事は存外厄介な仕事であります。遞信省關係の電信員養成所でも、陸海軍の通信手教育においても大部分の時と力とを費すのはこのモールス符號を覺えることにある有樣です。何故かといふのに、送信の際にもさうですが、殊に受信即ちモールス符號を假名に飜譯する時が一番技術を要します。一分間に八十字乃至百字位の大速度(?・)で送られるモールス符號を耳で聞き分けて鉛筆を走らすのですから電信從業員も並大抵では勤まらない譯です。電信の競技會などに出席して見ると、中には迚も人間わざとは思はれぬ程の腕や耳を持つた通信手に出あはす事もありますけれども、全國に散在する多數の從業員にとつては、これは慥に生易しい仕事でないにきまつてゐます。誤字脱字のあるのも實はやむを得ない事だともいへませう。

所が今日の電信從業員は、假名式のモールス符號の外なほ別にローマ字式のモールス符號を覺える事を餘儀なくされてをります。これは陸軍や海軍の電信兵でもおなじことですが、遞信關係

の電信局では殊に、國內でも歐文電報を取扱ふ事になつてゐる關係上どうしてもローマ字式を覺える必要があるといふ次第です。そこで、電信にローマ字を採用する事はこの點卽ち通信手の敎育といふ上において利する所が少くないのであります。今そのわけをいひませう。

假りにローマ字の數を二十六字とし、假名を四十八字とすれば――電信の方ではこの外になほ數字符や記號符を覺える必要があるけれど略算して――日本の通信手は今日、歐米の通信手が二十六覺えれば濟む所を七十四卽ち約三倍だけのものを覺えなければならない事になつてゐます。しかもそれがたゞの三倍ならまだしもの事、假名のモールス符號の內約 48－26＝22 だけはいづれも、ローマ字に與へられたモールス符號にくらべて複雜で、覺え難くて、忘れ易くて且紛れ易いものであるといふ事は特に注目にあたひする事柄です。何となれば、假名式のモールス符號といふものは明治のなかばごろ當時の頭のよい人たちが、西洋の「アルフアベット」のモールス符號に準じそのまま「イロハ」を當て嵌めていつて、とう〳〵當て嵌め切れずに殘つた約二十二字には、前の二十六の符號にもつていつて短符や長符を添加して作り上げた代物なのですから。

わが國の電信にローマ字式を採用するといふ事によつてわが國の通信事務に從事してゐるもの

の全部が、このやうにむづかしい假名のモールス符號を覺える勞力と時間がいらなくなるといふ事は通信手教育といふ見地から見て決して小さな事ではあるまいと私は考へるのです。

五　機械の利用

其一、タイプライター

一般文書特に早書きを要する文書の筆記は今日總てタイプライターの受け持つ所となつてゐるのは歐米ローマ字國の狀態です。ペンや鉛筆や筆の筆記よりも第一美しくて讀み易く體裁がよい、第二に印刷が早い、第三に寫しが澤山に取れる等の利益があるからで、人によつては今日の泰西文明はタイプライターのおかげだとまで極論するものさへある位です。過ぐるベルサイユ會議のをり、憐むべき漢字兼假名國たるわが國の全權隨員が、數百ページに亘るベルサイユ條約の大冊子を渡された時、これを邦文に飜譯する勞もさる事乍ら、飜譯文を淸書して多數の全權及びその隨員等に配るためにどれだけの苦心をしたか。夜もろくろくねむらず複寫紙をさし込んで鐵筆を動かし、手首がしびれるまで書きつゞけて出來たのが漸く數十枚、とれる寫しが精々三枚か四枚

に過ぎない。戰勝國の日本の全權が『飜譯はまだ書き上がらないか、まだ出來ないか』と催促してゐる頃は、戰敗國たるドイツ側ではタイプライターでたゝかれた美しいドイツ文の飜譯を前に並べて早各條項についての審議を終り、聯合國側に對する回答の會議を開いてゐたといふ話です。

思はず話がまた横道にはいりましたが、只今は一般文書に利用されたタイプライターの効能を述べ立てるのが主眼でありませんから、この話はこれで打ち切つて、さてそれならこの便利なタイプライターが電信事務の上で如何なる役割を演ずるかを一通り述べて見ませう。

電信でタイプライターを利用すべき個所は勿論受信局です。受信者が音響式の受信器を耳で聞いてそれを通例ならば鉛筆か鐵筆で書きとる所を、タイプライターの押し鍵を押すことによつて行ふのです。タイプライターを使ふことによつて、配達される電報の文字が今よりズット鮮明になる事もそれの利益の一つですが、一番大事な事は通信速度を增すことが出來るといふ點です。

有線電信でも無線電信でも通信速度といふことはやかましい問題になつてゐて、速度の大なのは益々ねがふ所なのですが、その通信速度を大ならしめるためには、まづ第一に電鍵(キー)の押し方が上手になつて送信速度を大にすると共に、受信者の技術を練つて聞き違ひや聞き落としのないや

うにする事が大切です。ところが、この方面は極度の訓練によつて今日以上に成績を高めることがなほ可能であるといはれてゐるのに、その成績を今日の狀態以上に進步せしめ得ないものが一つあります。といふのは外でもない、受話器や音響機(サウンダー)で聞いたモールス符號の假名譯またはローマ字譯を鉛筆またはペンで紙上に寫しとる手續です。

受信局において、受信者が受話器を耳にあてゝ或ひは音響機(サウンダー)によつて、聞きとり得たモールス符號の譯字をタイプライターを介して書きしるすことは、特に長文電報の受信にあたつて効力が淺くない。この方法は勿論有線電信にも利用され得る事ですけれども、有線に對しては次節において說く所の更に有利なる機械の考案がありますから、それに凡てをゆづることゝして、タイプライターの利用は無線電信の受信にあてるのが一番の得策であります。しかしてタイプライターの利用といふ事になると假名式のモールス符號を使つて、特にこの目的のために考案された假名のタイプライターを動かす事も勿論考へられないではありませんが——中央電信局では L. C. Smith typewriter を改造して假名用に直したものを使つて、重に現字機の紙テープに現れたモールス符號を飜譯してゐる——ローマ字のモールス符號を使つて、ローマ字のタイプライターをた

ゝくのがあらゆる方法の内一番具合がよいといふことについては、私が多くの機會において本紙上で述べた所ですからこゝに再說することを省きます。

其二、高速度印刷電信機

抑々通信が迅速で、しかも確實で無ければならないといふことは電信にとつて一番大切なことだといへるでせう。間ちがひの多い電報は一般通信の目的からいつて、また電報がおそいといふ事は特に電信を利用する人の目的から考へてゆるすことの出來ない大問題であるのに、既に第一節で私が述べた通り、わが國の電報は電信のこの二大要素を缺いてをるといふ情無いあり樣です。『近ごろの電報はどうもあてにならない』とか『手紙の方がかへつて早い』とかいふやうな苦情をたゞ公衆の誇張した物いひだと聞き捨てにしてはなりません。ところが、今日歐米先進國――それは交通においても通信においても日本よりはるかに頻繁な國です――の電報には、絶えてこの樣な苦情を聞かないとは何とうらやましい次第ではありませんか。それといふものがつまり、西洋ではローマ字を使つた高速度印刷電信機を利用してをるからなのです。

今日歐米諸國の電信界では、今わが國で專ら行はれてをるところの、電流の斷續により發送されたモールス符號を耳で聞いたり目で見たりする舊式な方法は既にすたれて、殆どすべての電報はこの高速度印刷電信機によつて取扱はれてゐます。

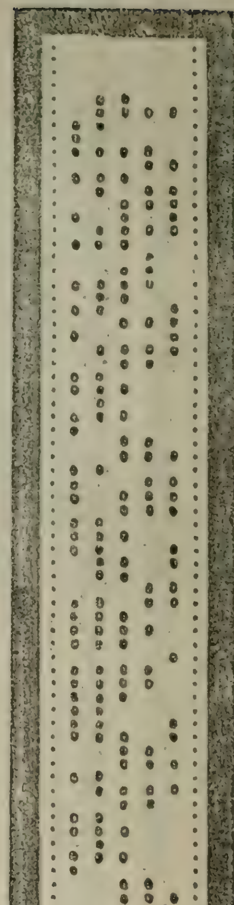
高速度印刷電信機のからくりは仲々込み入つてゐて、それだけの說明に一冊の本がいる位ですし、なほまた專門家でない私にはこまかな構造などがまだよく判らない點もありますのでこゝに述べることを止めて、極くあらましの要領をかいつまんでお話しする事に致しませう。

高速度印刷電信機の發信局における仕掛けは次ぎの二つからなり立つてゐます。

(イ)タイプライター仕掛で、幅一寸足らずの紙テープに孔を開ける機械。

(ロ)自働送信機。

この機械を使つて電信を打つにはどうしたらよいかといふに、發信者の仕事としては至つて簡單なもので、(イ)の機械の押釦盤(一名鍵盤 keyboard)に向つて、普通のタイプライターを使ふやうに、所要の押し釦を押しさへすればいゝのです。すると前に述べた紙テープに、押した字に相當する組合せの孔が一字一字穿たれます。


孔を穿たれた紙テープ

孔を穿たれたこの紙テープはすぐおとなりの自働通信機に自働的にはこばれて、そこで各字に相當する組合せの孔から、各字に相當する電流が通つて、それが電線を經て受信局における受信器に行くのです。この場合孔の數と配列の位置の相異が各の字についてちがつた電流を受信器の方におくる基となつてゐる譯です。

受信局には受信器があります。受信器は送信器から送られた電流の符號に應じて印刷裝置における活字を働かせて、すぐ紙の上へローマ字を印刷して仕まふのですがその間の早さは實にすばらしいものであります。機械の構造は頗る精巧を極めて且つ複雜でありますが、要するに發信者が押釦盤に向かつてたゝいた字が受信器にひとりでにチヤント印刷されて出てくるのですから、

それは全く普通のタイプライターとちがふ所はありません。たゞ普通のタイプライターでは押し鍵と活字との聯絡が機械的になつてゐるのを、印刷電信機ではそれに加へるのに電氣的裝置を使つたといふだけの話しです。從つて電信從業員はモールス符號を打つ世話もなければよむ必要も全くありません。發信局の局員はたゞタイピストでありさへすれば濟みますし、受信局では全く人手がいらない――印刷された紙をやぶいてとる位が一番の仕事です――といつて差支ありません。

なほこまかな事を申せば、この機械はアメリカ式とドイツ式とで多少相違の點があつて、前者を代表するウエスターン會社製のものは、普通の大きさの電報用紙にそのまゝ文字を印刷しますが、獨逸のシーメンス會社製のものは帶のやうに長い紙テープの上に文字が印刷されるのです。それでアメリカ式の事を一名ページ（page）式、ドイツ式の事を一名テープ（tape）式とも呼んでゐます。ページ式とテープ式との優劣は各國共やかましい問題となつてゐますが、ページ式では印刷された紙をそのまゝ配達する事が出來るばかりでなく、電報を受け取つた人も一目見て全體が分かるから大變讀みやすいといふ利益があるけれども、一方機械の中に行(ぎやう)をあける仕掛けが

施してあるので、これを働かすために時間のついえが可成大きくなります。テープ式で行くと、この時間をはぶく事は出來ますが、長いテープを電報用紙に張り付けて配達しなければなりませんからその手間が面倒です。そこで今の所では、時間を省いて電線の利用率を高めることを必要とする方面にはテープ式が使はれ、それと反對に手間を省くといふ事を必要とする方面ではページ式を使ふといふ事になつてをります。

さて、この巧妙な機械が電信界にもたらした革命の如何に大きいかを知るために、私はもう一度わが國現行のモールス式通信法について考へて見ませう。凡そ疲勞の狀態にはいつた人の仕事が錯誤や失策だらけであること、從つて能率の極めて低いものである事は、實驗心理學にかけて見なくても分かる事でせう。ところが旣に前にも一言した通り、今日一通の電文の長さが五百字を越えるものはザラにあるといふ有樣であるのに、モールス符號を使つて發信及び受信をやるといふ仕事は頗る無味乾燥、おまけに音響でモールスを聞き分けるといふ事の如きは殊に頭腦を疲らせる仕事です。長文電報のしまひころになれば發信者も受信者も心理學上のいはゆる疲勞曲線を越えた狀態にあつて事務をとつてゐるにちがひありません。かう考へると實に今日のわが國の

電信從業員はお氣の毒な次第で、よくまあアレで、アノ位の誤字、脫字で濟ましてゐると感心する位になつてしまひます。

印刷電信機は機械ですからその機械に故障が起こらない限り、またタイプライターの押しあやまりのない限り、押釦のAを押したが最後必ずAが出て來る事請合ひです。機械ですから怠業（サボタージュ）をすることもなければストライキもありません。しかも、機械はよく永年の使用にたへて、滅多にくるふ事はないさうです。

この便利な機械が昨年日本にも參りました。そして遞信當局はこれを東京の中央電信局と大阪の中央電信局とに備へ付けて、數ケ月の間毎日のやうにそれを運轉して實驗を重ね、同機の有効確實をことをたしかめ得たといひますから、近く實地に使はれるやうになることゝ思ひます。しかしてこれ等兩電信局間の試驗の結果、この精巧なる機械に故障といふものが殆どなかつた事を發見したのは、こゝに特筆大書すべき事だらうと思ひます。

それはそれとして、この便利な機械が輸入された事によつて私共はまた一つ考へさせられる事が出來ました。かういふ立派な機械が外國で考案された時、いつも私共日本人は指をくはへてう

らやましさうに西洋人のすることをながめてゐなければならぬといふことです。この前の時もさうでした。タイプライターの考案があつた時、またライノタイプが印刷界に大革命を起こした時、たゞ私共は外國人は仕合せだなと羨むばかりでした。今も尙さうではありませんか。日本の新聞社のどこにライノタイプが使はれてゐるのでせう? 發行部數の大を以て誇る大阪毎日や朝日でも、この目まぐるしい世の中に今なほ文選受け持ちの職工が締切り間ぎわに右往左往に馳せ廻はり、ヤレのぎへんが何うのにんべんがどこにあるのと騷いでゐるではありませんか。それがまた再び印刷電信機で繰返へされてゐるのだから情無い。上海でしたか外國人の居留地の公園に嘗て『犬と支那人入るべからず』といふ立て札があつたといひます。かういふ文化的諸機械の發明があつた時私はいつもこの制札を思ひうかべます。『犬と日本人用ふべからず』とは如何に横暴な西洋人でもいはぬ所ですが、事實はいつも或見えぬ柵にせかれて、私共はたゞその外から西洋人の自由なる振る舞をたゞ羨まし氣に打ち眺めてゐるだけです。「見えぬ柵」、あゝ「見えぬ柵」、それは文字の相違のまたの名でなくて何でせう。

なぜ私がこのやうな事をいふかといふに、遞信省の方針が、この便利な機械をたゞ歐文電報に

利用しようといふのに過ぎないといふからです。析角買ひ入れた便利なものが大多數の日本人の通信に少しも利用されずに、たゞ外國人と外國文をあやつる少數の日本人にしか役立たないのです。丁度大阪毎日社が高い金を出して買つた八臺の「インタータイプ」が大多數の讀者には何の功德もなく、たゞ英文毎日をよみ得る少數の日本人にしか役立たないのと全くおなじ關係です。

さてさうなるとだれしも頭に浮かぶことは、この機械の假名用のものを作つたらどうかといふ問題です。この事について私共の考へてゐることを書き上げて見れば、

(イ)假名の字數がおほいといふことは色々な點で不都合が少くない。全體、假名式の印刷電信に必要な字數は幾つになるかといふに、今日の制度では和文中に歐文の挿入をゆるされてゐますから、假名の四十八字の外にローマ字の二十六字を加へねばならず、なほその外に數字や記號などを込めて計算すると少くも百〇六字は必要となります。しかして百〇六字の印刷電信機を作ることは色々な關係で頗るむづかしい話しだといはれてゐます。

(ロ)それなら今日の制度をあらためて、和文中に歐文の挿入を禁止したらどうかといふことになります。假りにこの禁止がなり立つたとするとそれでも電信局は假名式とローマ式の二種の印

刷電信機を備へ付けてをらなければならないといふ結果になりますが、この二重生活は暫く我慢するとして、では假名計りの機械が幾つの文字を必要とするかといふに、少くとも七十五字はなければなりません。七十五字の印刷電信機はシフトを一つますことによつて、通信速度は多少おくれますけれども、改造の可能は充分あります。

（ハ）たゞこゝで注意すべき事は、タトヒ假名用に改造し得たとしても、さういふやり方は印刷電信機の場合にかぎらず、いつも外國で立派な發明があつたときその利用が何年も遲れるといふ事と、尙また日本計りで使はれる品物が經濟上はなはだしく不利な位置に立ちはしないかといふ懸念があることです。

（ニ）最後に、も一つ付け加へて置く事が殘つてゐます。上記の百〇六字のものにしてもまた七十五字のものでも、例の「イシヤ」が醫者か石屋か「マッチ」が燐寸か眞土かわからないといふ事をなほ免れる事が出來ません。これを救ふためには野上博士案のやうに、拗音や促音を一字で現す方法がありますけれども、さうすると文字の數がまた非常にふえて迚もそんなものは出來ないといふことになります。これにはどうしても高尾謙一氏の考案になる改良假名に使はれてゐる

やうな、特別の符號を作るのが一番いゝ方法だと思はれますが、兎に角それだけの文字がふえることを忘れてはなりません。

六　ローマ字の日本式綴り方

さて愈々電報にローマ字を使ふといふ事になると、私共は今まで考へてゐたよりももう一段突きつめてローマ字の事を考へて見る必要が起こつてくるのを覺えます。即ちローマ字の綴方の問題と語の付け離しの問題とについてゞす。

何も知らない人は、ローマ字と聞きさへすればすぐ停車場のローマ字書きや店の看板や、さては罐詰のレッテルなどに書かれたローマ字綴りを思ひ出します。併し、あれは、多くの使ひみちが示してゐる通り、英語の中にはさむローマ字、いひかへれば、英語に寄生してゐるローマ字綴りであつて、佛語やドイツ語の中にはさむのには決して適當したものではありません。何となれば、千葉驛を Chiba とつゞつたのでは、佛語を習つた人には「シバ」とよまれて仕舞ひますから。

そこでどなたもローマ字の綴り方には英語風のものもあれば佛語風のもある、獨語風のもあるといふ事に氣付かれたでせう。そこで日本が將來ローマ字でもつて日本語をうつす場合にはどうしたらよいかといふ事が問題となる譯ですがそれにはチャント日本式綴り方のローマ字といふものが出來てゐて、日本語をうつすのに最も都合よく行つてをります。

どういふ理由でこのつゞり方のローマ字が生れて來たかとか、或ひはそれの團體となつてゐる「日本ローマ字會」や「日本のローマ字社」の事についてはまた別の機會に詳しいお話しをする事として、私は今こゝに直にその實物を御披露する事に致します。

日本式つゞり方を主張する人の根據は、前にも述べた通り、今こゝで發表する事を差しひかへるとして、電信といふ日から見てどんな工合になるかといふのに、第一に字數が少くて濟むといふ事を擧げませう。田中館博士の計算によると、英語風即ちヘボン式の綴り方に較べると百字について三字だけ短くなるといふことです。勿論これは特にとり立てゝいふ程の利益とは思ひませんけれども、兎も角長いのより短い方が工合がよいことは明かです。尤も何等確實な據り所もなくて、たゞ短い一點張は決して感心された事でないのは云ふ迄もありません。

日本式綴り方

日本式綴り方の特徴（一）五十音の各行に一定の文字を使ふ。（二）拗音の綴り方が規則正しい。

左大文字	右小文字	ア Aa	イ Ii	ウ Uu	エ Ee	オ Oo	拗音 -ya	-yu	-yo	-wa
K	k	カ ka	キ ki	ク ku	ケ ke	コ ko	キヤ kya	キユ kyu	キヨ kyo	クワ kwa
S	s	サ sa	シ si	ス su	セ se	ソ so	シヤ sya	シユ syu	シヨ syo	—
T	t	タ ta	チ ti	ツ tu	テ te	ト to	チヤ tya	チユ tyu	チヨ tyo	—
N	n	ナ na	ニ ni	ヌ nu	ネ ne	ノ no	ニヤ nya	ニユ nyu	ニヨ nyo	—
H	h	ハ ha	ヒ hi	フ hu	ヘ he	ホ ho	ヒヤ hya	ヒユ hyu	ヒヨ hyo	—
M	m	マ ma	ミ mi	ム mu	メ me	モ mo	ミヤ mya	ミユ myu	ミヨ myo	—
Y	y	ヤ ya	イ i	ユ yu	エ e	ヨ yo	—	—	—	—
R	r	ラ ra	リ ri	ル ru	レ re	ロ ro	リヤ rya	リユ ryu	リヨ ryo	—
W	w	ワ wa	ヰ wi	ウ u	ヱ we	ヲ wo	—	—	—	—
G	g	ガ ga	ギ gi	グ gu	ゲ ge	ゴ go	ギヤ gya	ギユ gyu	ギヨ gyo	グワ gwa
Z	z	ザ za	ジ zi	ズ zu	ゼ ze	ゾ zo	ジヤ zya	ジユ zyu	ジヨ zyo	—
D	d	ダ da	ヂ di	ヅ du	デ de	ド do	ヂヤ dya	ヂユ dyu	ヂヨ dyo	—
B	b	バ ba	ビ bi	ブ bu	ベ be	ボ bo	ビヤ bya	ビユ byu	ビヨ byo	—
P	p	パ pa	ピ pi	プ pu	ペ pe	ポ po	ピヤ pya	ピユ pyu	ピヨ pyo	—

[illegible]はねる音には凡てnを使ふ、例 Anma, Kanban [illegible]つまる音には次に来る kstp を二つ重ねて書く、例 Sekkei, Ressya, Detti, Ittyome, Sappari [illegible]引く音には母音 a i u e o に∧をつけ、又は（特に大文字の時）は母音を二つ重ねて書く、例 Kôbe, Oosaka, Tôkyô, 大文字のみならば TOOKYOO [illegible]ヤ行イエ、ワ行のウはア行のイエウと同じこと

次ぎに、日本式では表を見ればすぐわかる通り「アルファベット」は十九字しか使ひません。そして面白いことにはその十九字以外の c f j l q v x の七字はモールス符號として次ぎに見られる通り、すべて四つの符號の組合はせからなつてゐるといふ事です。即ち、日本式に使はない所の七字にかぎつて長たらしい符號の所有者だといふ事になりますから、モールス符號を使ふ電信用のローマ字綴として日本式が餘程有利な位置にをるといふ事になる譯です。勿論これは偶然の事實ではありますけれども。

c　—・—・
f　・・—・
j　・———
l　・—・・
q　——・—
v　・・・—
x　—・・—

つゞり方の問題について大切な、言葉の付け離しの事については、私はいふべき事の多くを持つてをります。それは項を改めて次に述べる事と致しませう。

七　分け書きの問題

さて私は長々と電報にローマ字を使ふことの利益を說きあかして來ました。併しローマ字文の電報は今更私が多辯を弄するまでもなく、今日既にわが國人によつて實地に使はれてゐるのです。卽ち在外大公使館とわが外務省との間には申すに及ばず、海外派遣の帝國諸艦船と內地との通信も、或ひは商業用の電報でもそれが日本語で打たれるかぎり總てローマ字文の電報である筈です。如何に多額の料金を積み上げて見せても、假名文の電報などはどこの電信局でも取扱つてくれはしません。假名といふものが由來萬國的性質を持つてゐないものであるといふことはこの一事だけでも分かるでせう?

ところで、これ等官公私用のおほくのローマ字電報が、今日どういふ風に書かれてゐるかといふ實際の事情について、私は世の識者に一考をうながしたい事があります。といふのは外でもあ

りません。ローマ字文の付け離しの問題卽ちいひ替れば分け書きの問題であります。

ローマ字の電報が假名のそれとくらべて多少面倒に思はれることは分け書きの問題です。假名文では從來『アネビヤウキビンセンアリシダイカニレ』といふ具合にたゞだら〳〵と書いてゐた所を、ローマ字電報では一語一語チヤンとたゞしく分けて書かなければなりません。例へば、

ane byooki binsen ari sidai kaere

といふ具合に。

何ゆゑローマ字の電報がこのやうな事をしてゐるかといふと、それは假名のやうに一字幾らといふ料金の制度でなくて、一語幾らといふ事に列國共定めてゐるからだと通例いはれてゐます。併しローマ字だからとて、一字幾らの制度に直して直されぬ事はないのに、何ゆゑ一語の制度にしてゐるかといふ事が、つゞいて誰の胸にも浮かぶ疑問であります。

私の考へる所ではローマ字電報でも假名電報でも語制度にすべきものだと思ひます。いひ替れば假名もローマ字も本來分け書きをすべきものであつて、たま〳〵日本では普通の假名文で從來分け書きといふ事が考慮にのぼらなかつたゝめ、この事が電報文にまで影響を及ぼして、もと

〳〵分け書きをなすべき電報が、今日のやうなダラ〳〵書きの醜體を示すやうになつたのかと私は想像します。

ダラ〳〵書きの不都合なことについては、既に世間にかずおほくの滑稽な電報笑話が紹介されてゐますから、私は今それをこゝに繰かへすことを差しひかへますが、海軍に起こつた一例として嘗て『某司令官秋津洲をひきひ佐世保著』といふ電報が、この原因のため『某司令官安藝對馬をひきひ佐世保著』と取りちがへられた事などは有名な話です。前にも述べた通り、迅速といふ條件は電報の特性であるには毛頭相違ありませんけれども、それがこのやうに確實をかいては何の役にも立ちません。いやそれ所か、あやまつた通信のために一朝有事の際国軍が戰略的に非常に不利な羽目におちいる場合の起こり得る事は、專門家でなくても誰しも想像の付く事だと思ひませんか。

そこで分け書きの大切なことは充分分かつた事として次ぎに起こる問題は、實地にあたつて語の付け離しはどうするかといふ文法上の問題です。例へば「奇麗に」といふ言葉は一語にすべきや二語に（kirei ni といふ風に）すべきやといふ樣な法則は何によつたらよいかといふことで

す。併しこの事についてはローマ字實行家が實際ローマ字文を書く場合に、その付け離しをどうしてゐるかといふ事を調べれば苦もなく解決の付く問題です。なほこの具體的の方法について付け離しの詳細を知りたい方は日本のローマ字社（東京本鄉駒込曙町十一）發行の『ローマ字文の研究』といふ本について調べられたい。

以上の樣に、語の付け離しについてはローマ字論者の旣に充分研究濟みの問題であるに拘らず、ローマ字以外において——例へば一般の文法書や辭書などで——この事が明確に示されて居らないのは日本語といふものゝ立場からいつてはなはだ奇怪な事だといはなければなりません。ところが、世の中には、語の付け離し問題の從來曖昧になつてゐた所に附け込んで、一語は常に十五字一杯になるやうに（歐文電報では十五字迄を一語とし、一語每に料金をとる事になつてゐる）自分勝手に語の付け離しを考案して、電報料金を失敬してゐる不德漢が少くないのは更に一層なげかはしい事です。例へば前記「姉病氣……」の電報を正式に付け離しをして書くと六語となる所を、左の樣に十五字宛に分けて書き、それを二語としてそれだけの料金しか支拂はない橫著な日本人が今日至る所にあつて、外國通信局員の批難を買つてゐる實狀なのです。

萬國電信條約に附屬した「國際業務規則」の條文によると語數の計算といふ事は、かなりやかましい問題となつてゐて、例へば Hyde Park（ハイド パーク）といふ語（地名）をつゞめて Hydepark の一語とする事の如きは、國語の用法に反すといふ理由でゆるされない事になつてゐますし、または van de brande は三語として數へるが人名の Vandebrande は一語と認めるといつた風に嚴重な取極めがしてあるのです。

ところが、世の中には『それは日本側の利益になる事だから、外國側から公式に抗議が出て來たあかつきは兎も角、それまではだまつて十五字が一語となるやうにしてゐてもかまはない』と考へてゐる人があつて、しかも、それが何か愛國的な行ひでゞもあるかのやうに思ひ込んでゐるのさへあるといふから始末にをへません。見本品とは似も付かぬ商品をおくりだしたり、賣れ行きのおほい品物の商標を失敬して模造品を輸出したりして、國威を海外に輝かして居るのは多分斯ういふ手合の仕わざではあるまいかと思はれます。

西洋人が日本語の事情に暗いこと、いひかへれば日本語が外國に知れてゐないこと——それが

如何に殘念なことであるかを考へて御覽なさい！――をいふ事にして、斯ういふ不埒な事をしてゐるとは何となさけない根性に、日本人もなり了せたものではありませんか。これはあきらかに從來日本側が不正な手段をもつて不當利得をむさぼつてゐたといふ事になりますから、國際道德上の罪人といはれてもかへす言葉がありません。現に私は外國通信會社の人から『日本語については私は皆目知識がないが、何でも一語が大抵十五字の綴で出來てゐるのが日本語の特徴らしい。電報用としてまことに重寶な國語だ！』といふやうな皮肉な批評を聞いた事があります。皮肉な批評をしてゐるうちはまだよろしい。遂には彼れ等もだまつてをれなくなつて、これを國際通信會議の席上に持ちだすにはちがひありません。その時こちらの出やうによつては、將來萬國電信條約が日本語を普通語として遇しないで、これを電信上の用語でいふ所の「隱語」の取扱ひに移して仕まふやうな結果に立至らないともかぎりません。「隱語」となれば自然料金も高くなりますが、その問題は二の次ぎとして、いやしくも文明國、それも五大國とか三大國とかいはれる國の國語が丸で日影もの同樣の扱ひを受ける――現に支那語や朝鮮語は萬國電信上普通語として認められてゐない――などとは、私共骨のある日本人の到底默視する事の出來ない所です。

どうぞ海外通信に從事する官民諸君、戰後の經營でどこも節約節約の聲のやかましいをり柄ではありませうけれども、かういふ手段で百や二百の目くされ金を節約するやうなサモシイ考へはサラリと捨てゝ、眼をもつと高く遠い所につけて、斯かる見苦るしい差別的待遇を日本語に被らしめないやうに氣を付けていたゞくことをお願ひ申します。

八　むすび

電信に事よせて、永々とローマ字の事を述べて仕舞ひました。それ等の事を今一度かいつまんで列記すればかういふ事になります。

(イ)今日の我國の電信の狀態は、歐米諸國のそれにくらべて著しく遜色のあるもので、電信本來の役目を果してゐない。しかしてそれの最大原因はわが國が假名式の電報を用ひてゐる點に存してゐる。

(ロ)モールス符號を使つた電報でも、ローマ字式の方が色々の點から見て多少假名式にまさつてゐる許りでなく、殊に最近輸入した高速度印刷電信機の最能率ある使ひ方は申すまでもなくロ

ーマ字の使用にある。

（ハ）ローマ字でもつて電報を書くといふ事になれば、將來わが國の國字となるべき充分の運命を持つてゐる所の日本式綴り方を採用するといふ事が、また電信上から見て最も好都合である。

（ニ）今日の假名式電報のダラダラ書きは誤解を生じやすいから、これはローマ字電報の採用と共に斷然と分け書けをすることにして料金も語數制度に改める必要がある。序ながら、今日國語の付け離しが表向きには一定されてをらないのをよい事にして、各自勝手な分け書きをする事によつて、海外通信において不當利得をしめてゐる惡習は日本及日本語の體面にかゝはる問題であるから、今日かぎり廢止しなければならない。

電信にローマ字を使ふことが有利であるといふ事については、以上述べた事によつてたれしも異存のないことゝ思ひますし、なほこの事については政府の電信當局でも物のわかつた人は、恐らくは餘程前から認めてをつた事かと想像されるべきおほくの材料があります。併し電信にローマ字を使ふことの趣旨には贊成しつゝも、それの實現に尻込みをするのが今日の遞信當局の態度かと思はれます。いはゆる當世流行の「時期尙早」といふ奴です。併し本質において氣みぢか屋

である筈の日本人が「時期尚早」などをとなへながら落ち付き拂つた所は不調和もはなはだしいもので、到底見られたザマではありません。むかしからのことわざにもあります、『善はいそげ』と。

とはいふものゝ今日わが國全國の電信局がローマ字の電報でなければ受け付けない、又はローマ字電報でなければ配達しないといふ事になつたら、それこそ大變な騒ぎになりませう。この意味においてローマ字電報はたしかに「時期尚早」であるに相違ありません。

それならば國字改良運動家の運動が行きわたつて、全國民の九割九分までが實際ローマ字を使ふやうになつたあかつきに、初めて遞信當局はローマ字電報を採用する事にすべきかといふに、それはまた餘りにおそ過ぎます。矢張り『善はいそげ』の格言をまもつて、もつと早くそれを始めなければ國のためになりません。それには遞信當局が一つ世間を指導して見るのです。

指導の方法は至つて簡單です。まづ第一に著手すべき事は、「さいはひ今度設備された東京、大阪兩電信局の高速度印刷電信機を利用して、東京大阪間に限つてローマ字電報を開始して見るのです。『ローマ字電報なら今日の制度でも既に認めてゐるではないか』といふ人があるかも知

れませんが、私のいふローマ字電報といふのは、今日實施されてゐるいはゆる歐文電報とは丸で意味がちがひます。すべてが將來わが國がローマ字の日本となつた時とおなじやうに扱はれなければなりません。そしてローマ字電報の料金は、同一文を假名文に直した時の假名電報の料金よりも稍安く――私はそれの實現の可能を信じてをりますが、若し安くする事が出來なければ同一料金にしてもよろしい――なるやうに定めたならば、東京、大阪の居住者でそれを利用するものが必ずふえてくるに違ひありません。なぜならば、電報料金が在來のものと同一乃至同一以下であつて、しかも、早くとゞいた上に誤謬のないといふ三拍子そろつた誘惑が、ローマ字電報の上にあるのですから。

この事はたゞに電報利用者側に利益をもたらすばかりではなくて、遞信當局の側から見てもまた頗る好都合な事がある筈です。

今日折角立派な機械を買ひ入れても、それがローマ字でなければ役をしないといふ高速度印刷電信機を、當局が將來どういふ風に使つて行くかといふ事を考へて見ると次ぎの三つの場合しかありません。

（イ）　歐文電報專用とする案。

この案によると、折角國民の租税を使つて買入れた立派な機械が主として外國人（歐米人）または外國語を使ふ日本人のために役立つだけで、日本人自身は何等恩惠をかうむらない事となる。尤も歐文電報では、ローマ字つゞりの日本語電報をも取扱ふ規定になつてゐるから、この方法によつてローマ字を受け付けてもらふ事が出來るけれども、これは實際の所純ローマ字電報とは餘程おもむきを異にしてゐて歐文電報たるを失はない所の形式である。

（ロ）　受け付けは今日の假名のまゝとし、發信局でそれをローマ字に書き直した上で印刷電信機にかけて送信し、受信局では受信したローマ字電報を反對に假名に書き直して配達をする方法。

この方法は、如何にも一般國民をして印刷電信機の御利益に仲間入りしてゐるかのやうに感じさせる効能はあるけれども、それでは折角巧妙に作られた印刷電信機の一番よい所を殺して使ふやうなものであるから實現しさうに思はれない。

（ハ）　私が述べた樣な趣意に從つて特別にローマ字電報の取扱ひを制定すること。

以上三つの方法の內、（ロ）案は論外として、（イ）と（ハ）とをくらべて見るのに、（イ）の方法で

は前にも述べた通りわが國在留の少數外國人に利益を與へる外、一般國民と大した交涉がないばかりでなく、遞信當局の側から見ても一番働ける機械が一番ひまな仕事――歐文電報は和文電報にくらべてそんなに頻繁にある筈がない――に從事してゐるといふ事になります。然るに(ハ)の案によると、立派な機械を思ふ存分活用する事が出來る一方、それだけ從來に比して假名の和文電報の受け付け數がへつてくる道理ですから、消化し切れないでこまつてゐる所の今日の國内通信の狀態を少くとも、東京、大阪間においては緩和し得る事になります。

以上の二件は、電報利用者及び通信當局者といふ小さな立ち場から見たローマ字電報の利益です。處が、この二者にもまして(ハ)制度の設定が國家及び國民に對して貢獻する所のものは、實にローマ字文普及促進の効にあるのです。今日わが國において國字改良の必要は各種の方面から既に論じ盡くされてをります。この場合に當つてわが遞信當局が最新文明の利器を活用する所の實地の方面から、マザマザとローマ字の利益を國民に直面させる事によつて、ローマ字實行に一指を染る事が出來たならば、他日われ〳〵の子孫は、今日の遞信當局に對して心からの感謝を捧げる事を惜まないでありませう。

（附記）電信にローマ字を使ふことになつた場合に採用すべきタイプライター及び印刷電信機の押鍵盤（キーボールド）の配列について一言します。前に述べた通り、日本式のローマ字つゞりで必要な字母數は僅十九であることと、日本文における各字母の出現度數は、英文におけるものと餘程おもむきを異にしてゐること、なほ母音字と父音字とが交互にならぶ場合が一番おほいのがローマ字日本語の特徴であることの三つの理由からして、これ等の押鍵盤（キーボールド）の配列は、英文用のタイプライターのもの卽 universal keyboard をそのまゝ採用するのは決して策の得たるものではない。上記のローマ字日本語の特徴をよく考へて適當に押鍵の配列を定めると、この種の器械は日本語に對して歐米諸國におけるよりも以上に便利なものになる筈です。現にこれ等の點を研究して作つたタイプライター（日本式タイプライター）は一昨年以來百數十臺需要せられた有様ですが（使用者は皆その配列の便利なことを證言してゐる）、通信關係の諸器械もこの配列によることをおすゝめ致します。これ等諸機械の製造會社は元のまゝの値段でよろこんで新しい配列の新規註文に應ずるばかりでなく、現に使用中のものに對しては極僅（ごく）な費用で改造工事をしてくれることと存じます。ちなみに「日本式タイプライター」

は日本語ローマ字文を目的としたものであるけれども、エスペラント、伊、西、佛、獨、英、文用としても立派に役に立つ品物である。これ等についての詳細は前掲「日本のローマ字社」が親切に教へてくれます。（完）

追　記

A——今朝の新聞を見ると、君、神戸の山下さんがたうとう亡くなられたよ。

B——山下さんて誰の事かね。

A——住友の重役の山下さんさ……と云つても君には解るまいが、國字改良家のあの山下さんのことだ。

B——あゝさうか、改良假名の山下芳太郎さんか。こないだから不治の病に罹つて居られたとは聞いて居たが、たうとう亡くなられたか。さきには矢張り横書片假名の小森德之翁が東京で亡くなられたし。

A——二人とも君達の論敵だつたんだね。

B――それは今だつて僕は假名や改良假名の見込の無いものだと云ふことを信じてゐる。現にかうやつて假名の缺點の一つを數へ立てゝ居るのだから。併し見やうによつてはそれは小さな事にもなるのだ。「國字改良」と云ふ大きな眼で見ればローマ字論者も假名論者も目指す處は一つさ。實業家としての山下さんはどんな偉い人であつたか僕は全く知らない。併し國字改良家として山下さんは實に立派な仕事をなさつた。

A――實業家なんてものはただ金を貯めて居るばかりが能ぢやない。少しはかう云ふ人を見習つたらよからう。

B――實業家だつて皆金箱の番人ばかりぢやない。新莊さんなんて人は國字改良には惜まずに力添へをしたものだ。併しその新莊さんももうこの世に居ない……………

A――そんなに淋しがつてばかり居たつて仕方がない。君は君で一つ勇氣を奮ひ起して君の歩む道に進むがよい。それが卽ち君の云ふ大きな眼で見て故人に對する何よりの慰めだ。

（大正十二年四月東京日日新聞所載）

新しい意味の一票

總選擧の日も愈々迫り、諸所方々で火花を散らしつゝあるが、それに就き內務省では、ローマ字書きの投票を有効と認めて、其旨各地方長官に通牒した。全國有權者諸君、此際の淸き一票は必ずローマ字で書いて投票したまへ。それはまた我國の文化に寄與する上に極めて意味深いことでもある。

この前――大正九年の總選擧の時、北海道旭川の選擧區で憲政會の候補者と政友會の候補者との間にはげしい競爭があつて、憲政會は政友會の一七八〇票とかに對して僅數票の差で惜しくも落選といふことになつたが、投票を精しく調べてみると、憲政會の候補者に對する投票の中にあつたローマ字書きのものが無効とされて居たので、端無くも一つの問題となり、事件は函館の控訴院から遂に大審院へまで持ち出され、結局ローマ字書きの投票は有効だといふことになつて、其結果憲政會の勝利となつた。これは當時の新聞で見れば詳しく書いてあるが、大審院はローマ

字書を有効と認めた新しい判決例を拵へたわけである。

内務省の今度の通牒が大正九年の此大審院の判決に源を發して居ることは改めて云ふ迄も無いが其理由の一として内務省が『ローマ字の使用は日を追うて普及されつゝあるから』といふことを擧げたのは喜ばしい。あの判決文の中にも『ローマ字ハ人文發達ノ程度ニ鑑ミ普通人ガ讀ミ得ルモノナリ』といふやうな文句があつたと記憶する。かうなると、今はもうローマ字がいゝの惡いのと議論をして居る時代ではなくなつたのだ。

さう云ふと、ローマ字が内務省や司法省の御用になつたことそれ自身を私共が餘程有難がつて居るやうに聞こえるが、私の云ふのは其處ではない。政府をして公に認めざるを得なくさした社會に於ける勢力の漸く拔くことの出來ぬものになつたと云ふ點である。然るに何ぞや、内務當局が『ローマ字の使用は日を追うて普及されつつあり』と云ひ、世に「化石の司法官」と云はれる其司法當局が『ローマ字ハ人文發達ノ程度ニ鑑ミ云々』と判決して居る時代に、獨り本家本元の文部當局は小學校の課程にローマ字を入れることに就て何等の考慮をも廻して居ない。時世を見るの眼の無い連中、見ても斷行の勇氣に乏しい手合のする仕事はいつも社會に引ずられて行く。

引きずられるならまだ結構であるが、文部省のは社會からいつも本所の置いてけ堀にゐるのを私共は心外に思ふのである。

（大正十三年五月東京朝日新聞）

米國語を追拂へ

一

米國に於ける排日に對抗して起つた米貨排斥運動が昨今漸く火の手を擧げて來た。國民憤懣の情を表示する一手段としてそれにも相當意義はあると思はれるが、私はそれ等の運動を起した人達が更に一層有意義な事業である處の米國語の排斥を何故高調しないかを怪しむ者である。

外國品の過度の尊重はもとより警めなければならないが、要するにそれは國民の物的生活と交渉すべき範圍のもの、國民の知識及び思想の生活と直面する國語の問題に較べれば、文句は少し月並だが正に月とすつぽん、提燈に釣鐘の類だ。何かと云へば、すぐ物質に許り氣をとられて、より大切なものゝあることを忘れる近代の我國民の物質偏重癖が此處にもあらはれて情ない。

二

親愛なる同胞諸君！　少しく我に返つて我國首都の町通りを歩いて見るがよい。往來の看板と云ふ看板、英語の書かれて居ない者は稀だ。日本橋や尾張町の角に立つて居る交通巡査の振廻す「進め」「止れ」の信號標には GO. STOP が並べて書いてある。本屋の店頭に陳列してある雜誌といふ雜誌、新聞といふ新聞、殆ど例外無く The……,The……Shimbun と書いてある。國家の經營する鐵道の停車場までが共通りで、一體之が俺達の納めた税金で出來た日本の鐵道かと疑ひたくなる位だ。日本銀行の發行に係る公債證書でも、兌換紙幣でもやはり半日、半米だ。凡そ今日世界に國を建るもの幾十百か知らないが、苟くも獨立國にして一國公共の立札や紙幣などに外國語を自國語の傍に併記するのはバルカンや南米邊の名も無い弱小國に於てでさへ見ない處だ。或る皮肉な獨逸人が日本へ來て、此國は獨立國かと思つて居たのに、全體いつからアメリカの殖民地になつたのかと聞いたといふ。さうだらう到る處にかうベタベタ英語を書き立てたザマは、正に上海、香港、新嘉坡と軌を一にして居るから。

斷つて置くが、英語必ずしも米國語で無いことは勿論だ。併し太平洋の彼岸に米國といふ英語國の存在する事は明かに我國民の英語の濫用を助長して居る。信號標や汽車の立札の英語も、我國に來遊する外人の大部分が米國人だからといふことにあるとすれば――明治の初年は英國人本位の英語であつたかも知れないが――今日の我國の英語は米國人本位の米國語として取扱ふ事が至當の様に思はれる。

三

その米國語を日本語と並べ書きにして置くことでさへ獨立國の體面に係る不見識な話であるのに、何から何迄外國かぶれをした日本人の一部の中には、自國に居り乍ら自國語は丸でヌキにして、英語ばかりを使ふに至つてはあきれて物が言へない。郵船會社にまれ東洋汽船にまれ、日本の商船といふ商船の航海日誌がそれだ。全文悉く英語で書いてある。某々大會社の如きは國內で使ふ商用文が凡て英文ときて居る。東京は神田にある「月給取の組合」の固有名詞が「サラリーメンス・ユニオン」であることはいつかの中央公論で述べて置いたが、滑稽なのは彼の排外黨の

親王有田音松君が自家の屋號に英語の名を附け乍ら國粹の一手販賣をやつて居ることだ。國語の尊重すべきことを忘れて國粹保存が聞いてあきれる。

四

日本に來る外人觀光客の便宜を計るといふ意味で英語の並べ書きは至當だといふ者がある。一を知つて二を知らない者の言ひさうな事だが、一體外國人が高い旅費と貴い時間とを費して日本へ來るのは何の爲めであるか。日本及び日本人に就て知らんが爲めであることは今更くど〳〵しく說き立てる迄も無いことだらう。そして日本語を知るといふことは卽ち日本及び日本人に就て知ることの一部分でなくてはならないことも多辯を要しない。

公平に考へて、漫遊外人の便宜を計るといふことも決して惡いことではないが、その意味なら私は國際補助語のエスペラントなりイド語なりを並記するのが至當だと思ふ。いくら日本に米國人が金を落して行くからと云つて、それとこれとは別物だ。伊太利には日本と同じやうに每年澤山の米人が金を落して行く。併し伊太利の紙幣、伊太利の停車場、伊太利の信號標の何處に米國

語が書かれてあるか？　我國は震災後三大强國の實力は失せたかも知れないが、幾ら控目に見た處で五大强國の一として伊太利の下風に就く程衰へては居はしない。況や某々の泰西弱小國をやだ。その名もない弱小國の首都の何町何通り何丁目に自國語と英語とが並べ書きにしてあるといふのだ？　役人も役人だが國民も國民だ、大抵にして恥を知るがいゝ。

五

一體全體日本人といふ日本人の大抵が外國人に對していつも自國語を持ち出すことを恥るやうな態度をとつて居るのは、卑屈といはうか、奴隷根性といはうか。吾々が米國へ行けば誰でも英語を話しフランスへ行けばフランス語を話すと同じやうに、日本では西洋人も皆日本語を使ふのが順當であるのに、事實はいつもそれを裏切つて居る。そして外國人をしてこのやうに『鄕に入らば鄕に從へ』の格言を無視するやうに馴致したのは種々の原因もあるだらうが、日本人自身が自國に於て外國人に對する場合はおろか、自國人に對してでも無暗と英語を振り廻して得意がつて居るやうな根性になり了せたからだと云ふ事程有力なものはない。ホノルルに於ける日本語學

校が米國官憲によつて閉鎖を命ぜられて居るとき、日本に於ては津々浦々の中學生や女學生は「ソレハ一ツノ犬デアル」に頭を惱まして居るから世話はない。

六

先達米國に於ける排日法案が大統領によつて署名されてしまつた時、外務省のお役人達が十日餘りも頭を絞つて英文の抗議書を作つた。國辱を永く記念するために霞ケ關としては名文と稱せられるその抗議書を中學校の英語教科書に入れるがよいといふ說を出したものが省內にあつたといふ。冗談も休み休み言つて貰ひたい。米國大使館から我が外務省に來る一切の外交文書に日本文も添へて居ないものに對して、抗議書を英文で綴るといふことそれ自身が旣に國辱の最たるものだ。その國辱文をおめ〳〵と教科書などに載せることを考へるものが何處の國にあるか。

七

日本語を以て世界を征服しやうと云ふ風なことは今日の國際的精神の上から見て勿論許される

べきことではないと同じやうに、英語でもつて日本を征服しやうとする今日の狀態は亦明かに國際的精神に反する。日本國民に對する差別的待遇に對して起つた國民並に外務當局は日本語に對する差別的待遇に對しても亦速かに適當な處置を講ず可きである。內閣更迭し庶政刷新の折柄、其局に當る者は舊慣に囚はるゝ事なく、信ずる所に向つて勇往邁進するがよい。國民たるものは又自ら內に省みて米國語の濫用を愼み、國語の擁護を計らなければならない。たゞ國語の世界的發展といふことを思ふ時、いつもその障碍となるのは我國に於ける今日の國語の書方であつて、漢字交り文に對しては旣に我國民それ自身が手を燒いて居る以上、これは一般外國人に對して殆ど越える事の出來ない程度の障壁であるに違ひない。そして此問題に對する唯一の解決策は、日本語をローマ字で綴る事にある。（十三年六月東京朝日新聞）

失敗の語學教育

一

最近の報知紙上に連載された生田長江氏の「一般的に外國語を學ばしめることの愚劣さ」といふ論文程近頃小氣味よく讀まれたものは無い。かね〴〵私が言はうとして言ふことの出來なかつたことだけあつて、この論文を讀み了つたとき、私は獨り小聲で『生田さん、よく言つてのけて呉れましたね』と思はず口走つてしまつた程であつた。

去年の夏我國に「米貨排斥運動」と云ふものが一時火の手を擧げたとき、機乘ずべしとなして私は本紙に、『米貨排斥よりも一層有意義な事業である處の米國語の排斥を何故やらないか』と云ふ意味の意見を公にした事があつた。國語の尊ぶべきを忘れて外國語を過度に有難がる因襲は今尙我國の上下にはびこつて居るから、これはどうしても打破しなければならないが、それとはま

た別の意味で、我國の中等學校以上の外國語教育は是非共之を正科から追拂つてしまふ必要がある。

二

何故にそれを正科から追拂はねばならぬかに就ては、生田氏が最も明快に論述して居られたから此處にそれを繰り返すことを避けるとして、私は行政の整理と財政の緊縮をめやすとする現內閣の文政當局が、明日と云はずに今直にこの事を斷行されることをすゝめたい。財政の緊縮も民力の涵養も、共に今日望ましいことではあるが、それはたゞ豫算面に表れたこと許りでは物足りない。中等學校以上の語學教育に向つて大きな斧鉞を加へることによつて、幾百萬の青少年がこの愚かな制度から起る負擔から解放されることだらう。一生の內使ふか使はないか解りもしない外國語の知識を、百人が百人まで皆習得して置くといふやうな悠長な現在の日本ではない。食ふ物も着る物もせい一杯切り詰めて、遣繰りをして居る――さうしなければ國家は破產をすると彼等は宣傳して居るではないか――吾々日本人の生活に對して、學校生活のかなりの部分がこ

の無用の語學の學習に振向けられて居ることは不調和もまた甚だしい。

三

が併し、我國の外國語教育の失敗を說き、その制度の廢止を論ずる人はさすがに殖えて來た。嘗て本紙に出た楚人冠氏の「英語追放論」、いつぞやの國民紙上の北昤吉氏の「中等諸學校の英語排斥」もそれだ。そして今回の生田氏の所說は、この事を中等學校程度に止めずして、高等學校から更に進んで大學にまで適用された點において、前記二氏に比べて一段の進況を示して居る。

一般的の語學の學習を斥ける埋合せとして――「埋合せ」と云ふ言葉は適當ではない。埋合せた上に小山が出來る位に盛上る程の効果があらう――大規模の國立飜譯局を設置すべしと云ふ生田氏の提議は無條件で贊成してよい。北氏の意見の中にも飜譯局設置に觸れた箇所があつたやうに記憶して居るが、生田は更に突き込んで說いた。

四

何から何まで賛成だらけの生田氏の所論中、一箇所だけ私の腑に落ちかねる處がある。中等學校が之等外國語の一般的學習を廢止することによつて剩し得た時間の半ばを割いて、生田氏は國語及び漢文の授業增加にあてることを唱へて居られるが、國語の授業增加には勿論異論はないとして、私は生田氏が此處に漢文の學習を力說された事の理由がやゝ薄弱ではなかつたかと思ふ。同じやうなことは北昤吉氏の所說にもあつたが、高雅なる品性を養成したり、國民的精神をはぐゝむのに漢文の原書が何故に必要なのであるか。生田、北兩氏が提唱された國立飜譯局の飜譯に係る日本文の論語や孝經や日本外史が、此場合何故に効果を齎らさないと考へられるのであるか。國民に最强度の感動を與へるものは英文でもなく、佛文でもなく、はたまた漢文でもなく、それは實に祖國の言葉をつらねたものであることを信ずる私には解し難いことである。若しそれ古典としての國語及び漢文を『國語及び漢文は、特に漢文は』と擧げて重きを寧ろ漢文に置かれるあたりは、蘇峰學人の所說と一般、私の與することの出來ない處である。

（十四年三月東京朝日新聞）

ローマ字論者の大同團結について

永い間犬と猿との間柄であつた憲、政、革の三派が所謂「護憲」といふ大目的のために小異を捨てて大同に就いた。そして危ぶまれて居た三派の足並が存外よく揃つて居るのに人々は不思議のやうにも思ひ、尚忍ぶべからざるを忍んで政策上の小異を犧牲にした三派特に政友會の首領高橋是清氏の度量の程を賞めそやして止まない。

國字改良論者の內でも一番進んで居ると云はれるローマ字論者が、日本式綴り方を主張する日本ローマ字會派とヘボン式綴り方を主張するローマ字擴め會派とに岐れて居て各々自說を堅く執つて讓らない今日の有樣は之を政黨の對立にも譬へることが出來やう。處でこのローマ字論者の內輪の爭を見て、妥協と云ふことを忘れた兩派の狹量な態度を苦々しく思つて居るローマ字贊成者やローマ字同情家が世の中に少く無い。

『今日はローマ字論者が綴り方などの內爭に耽つて居るべき秋ではない。ローマ字會も擴め會も

よろしく小異を捨てて大同に就き、共に力を合せてローマ字採用の國論を喚起すべきである。護憲てふ共同の大目的のために、政策てふ小異を捨てた護憲三派の宏量な態度にローマ字論者は愧づべきである』と云ふ風な議論は諸所方々で許多私の耳にした處であるが、そのローマ字論者の一人である私は今この問題即――ローマ字論者の大同團結といふことに就いて少しく考へて見度い。

『兄弟牆に鬩げども外侮を受けず』とか云ふ言葉がある。國民共同の外敵が現れた時には今迄の内爭はピタリと止めて相協力して之に當らなければならないと云ふ事を敎へたものに違ひ無いが、世界大戰の勃發が英國に珍らしい聯立内閣といふ奴を産ましたのも、貴族院の横暴が加藤、高橋、犬養三氏の手を握らして仕舞つたのもそれだ。もともと憲政あつての政策上の爭であるべき處へ、大元の憲政が或者によつて脅かされたとすれば、政策上の小異は一先づ打捨てて、より大切な憲政擁護のために結束するのは政黨として當然な事でなければならない。

併しこの言葉を裏から眺めて見ると外敵が居なくなると又々兄弟牆に鬩ぐことが起り得るものだといふことにもなる。斯くしてどこの國でも共同の敵がなくなると聯立内閣は倒れ、大同團結

といふものは崩壞するものと相場がきまつて居る。

豫言者の眞似をする譯では無いが、加藤、高橋、犬養の聯立内閣の運命は今からチャンと見え透いて居る。今日でこそ「護憲々々」と仲間の結束を保つて居るけれども、今に皆が「護憲」の語が鼻に附き出してきた時、言ひ換へれば護憲といふことは當然なことで、何もとり立てて看板にする程のことではないと云ふ世の中になつた時――それが卽護憲の目的を達した時なのだ！――漸く政策上の異同が國民興味の中心となつて來て、そこで元來が政策を異にして居た三派が内爭を起すべきは火を睹るよりも明かな話だ。

昨秋山本伯が組閣の大命を拜するや否や『國家の爲め力を貸して貰ひ度い』と言つて傲然憲、政、革の三頭首を築地水交社に招致して官僚及各政黨を打つて一丸とする聯立内閣の組織を試みて成らなかつた。慧眼な伯の事であるから、もとより其成らざるを洞察して一應の形式を踏むだのに過ぎなかつたのであらうけれども、若しあの場合聯立内閣の可能を豫想した者があつたとしたならば其愚や到底濟度することは出來ない。

軍人や官僚の途は二言目(ふたことめ)にはきつと『國家のため』と云ふことを口にする。そして『國家のた

めに助力を賴むのに政黨といふやうな小さな立場にとらはれて二の足を踏むとは怪しからん』といふ風に物事をとる人が――「國家の爲め」を喰ひ物にして居る人は別として――眞面目な軍人や官僚の中に今尙少くないのであるが、何としてもそれは少し許り考が足り無い。

政黨屋に「政黨第一、國家第二」を標語として居るのではないかと思はれる振舞が決して無いとは保證出來ない。併し高橋總裁にした處で、加藤總裁にした處で、國家の爲めを思ふ點に於て決して山本伯に劣らない人々であるに違ひ無い。そのやうな常に國家を念としつゝある人達に對して『國家のため』を振り廻すことは當然すぎる程當然なことを問題とした話で、それだけで聯立內閣を組織しやうと云ふのは國家の成立が危殆に瀕した場合言ひ換へれば「國家のため」が脅かされた場合だけに可能なことである。一座の人々が皆國家のことを思つて居る場合には、その次の、もつと進んだ問題――政策のやうな――を話題とすべきである事は知れた話ではないか！

以上のことを今度は國字問題に當て篏めて見る。吾々のローマ字運動も漢字黨や假名黨が相當幅を利かして居る限りそれ等の論者に對抗する必要上ヘボン式も日本式も內爭を止めて大同團結をなすべきであるし、若し又世の中が進んで來て漢字黨も假名黨も跡を斷つてしまつたならばそ

れを目標とする大同團結も當然瓦解の運命に立到るべきである。日本中が皆ローマ字論者ばかりになつて仕舞へばヘボン式と日本式とが相携へてローマ字反對者に當るといふ必要が消滅してしまふ理であるからそこで今度は第二段の問題であるところの綴り方や附け離しなどか話題に上るのは世の進歩の成行でなければならない。それならば國字界の現狀はどうなつて居るか？　それを吟味して見ることによつてローマ字論者の採るべき態度が自ら明かになつて來る。

今日は何事に對しても所謂過渡時代であるが、國字といふものに對する國民の考にも大體二つの方面がある。

（イ）一つは漢字や假名に對してまだ相當の執着心があつてローマ字論には仲々耳を藉さない連中がある。これは所謂保守派に屬する者であるが其數は今の處國民の大部分と見なければならない。

（ロ）之に反して、ローマ字の採用は我國國字問題の當然の歸結だと見て居る進歩派の人々であつて、其數は今でこそまだ少いが漸次增加の勢を示して居ることは否まれない。

今日はこの二派が何がしかの割合で混つて居る處の世の中であるが、さう云ふ世の中に處する

ローマ字論者の態度は次の如くであるべきだと私は信ずる。

（甲）相手が保守派または保守派の色彩の濃い場合には、日本式論者もヘボン式論者も綴り方の異同に就いて論じないがよい。ローマ字論者たるものはたゞ漢字と假名の用ふべからざるを說いて、世界共通のローマ字を以て國語を綴ることの適切にして且有利なことだけを說けば事足る。

此時こそヘボン式論者も日本式論者も共に手を携へて所謂大同團結をなすべき場合である。たゞ此處で最も注意して置かねばならぬことは、今日の國民の多くがローマ字といへばすぐヘボン式綴り方のローマ字を頭に描い仕舞ふから、それだけは充分打破して置く必要がある。漢字假名に代つて國字となるべきはローマ字であると議論を結んだ時の相手の頭の中に綴り方の意識があることは、それが日本式であつても、ヘボン式であつても共によろしくない。相手は全く綴り方に就いて白紙であるやうな狀態に置かれるべきである。

ローマ字論者の採るべき今一つの態度は次の場合に於て一段と深入りしなければならない。

（乙）相手が進步派の人またはそれの色彩の濃い場合に（甲）と同じ態度をとることは蛙に水鐵

砲と同じことになるから、更に進んだ問題即綴り方のこと、附け離しのこと等の深入した問題に觸れて行かなければならない。從つて此場合こそ日本式論者もヘボン式論者も各々其信ずる處の綴り方を主張して毫も差支ない。

（甲）の場合即相手が保守派である場合でも、一通り漢字假名の攻撃（？）を濟ましたならば、それ等の人々の間にローマ字に對する了解が出來たものと認めて、直ちに綴り方の問題に話題を進めることは勿論差支ない。

少し詳く述べた嫌があるが、所謂ローマ字論者の大同團結といふことに就ては右のやうに私は考へて居る。そして世の中に對する態度としても私自身は今迄この通り行つて來たものであるが、日本ローマ字會も恐らくはこれと違つた方針を採つたやうなことはあるまいと思はれる。

（十三年十月國語教育）

大正十五年二月二十日印刷
大正十五年二月廿五日發行

定價金貳圓

著者　福永恭助

東京市牛込區橫寺町四三
發行者　後藤誠雄

東京市牛込區稻田鶴卷町四〇三
印刷者　谷口熊之助

發行所　東京市牛込區橫寺町四十三
聚英閣
電話牛込四六二番
振替東京四七八六九番

（濵口印刷所印行）

俳書

荻原井泉水著
俳話 昇る日を待つ間
四六版 特製 函入 美本
一、九〇 一七

俳壇の巨擘井泉水氏が多年俳句の徹底的研究を仕遂げようとして、途に蘊蓄を傾けられ!!所說を公にせられたるもの、其の精神より形式へ、感激より表現へ、自己より自然へ等、誠に聞くべきもの不尠。

荻原井泉水著
句集 流轉しつゝ
四六版 特製 函入 美本
一、八〇 一五

「流轉又流轉、孤獨の心を抱いて靑空の下を步きつゝ一あゝ太陽も亦、孤獨である」と獨語した著者が、さうした氣持から、只自然に對する信順と禮讃との一念によつて氏の魂が大きな自然の愛に感じて産んだ偉大なる收穫の句集である。

吉木燦涙校訂
俳聖 芭蕉全集
四六版 特製 函入
二、〇〇 一七

俳諧に千古不滅の礎を築ける者、實に芭蕉翁なり。其生活、人生觀は實に大哲人であり、大宗教家である。本書は翁の全集にして、俳諧篇、紀行篇、文章篇、日記篇・書翰篇等に分ち、斷翰零墨と雖も悉く收錄す。

文學博士藤村作序
水島重治校訂
俳聖 蕪村全集
四六版 特製 函入
二、〇〇 一七

『求むるなき喜悅の領土』を作家とし、或時は深く門を閉して孤獨の寂寥の中に生き、或は淸和な愛を求めて飄然と旅に漂ふた。其孤獨其愛の中から蕪村の藝術は產まれた。人及藝術家としての全面目を本書に見よ。

中村六郎校訂
一茶緣故
一茶選集
四六版 函入 頗風雅
二、二〇 一八

俳諧の聖域に悟り渾然として大成した芭蕉に較べて吾が俳諧寺一茶は死ぬ迄人間らしく惱み苦しみ續けその惡業と煩惱より救はれん爲に自然の愛に縋り六字の名號を唱へる心持で口誦んだものは彼の十七字である。